

八尾市文化財調査報告45
史跡整備事業調査報告2

史跡心合寺山古墳発掘調査概要報告書
—史跡整備に伴う発掘調査の概要—

2001年3月

八尾市教育委員会

報告書抄録

ふりがな	しせきしおんじやまこふんはつちようさがいようほうこくしょ						
書名	史跡心合寺山古墳発掘調査概要報告書―史跡整備に伴う発掘調査の概要―						
副書名	史跡整備事業報告2						
巻次							
シリーズ名	八尾市文化財調査報告						
シリーズ番号	45						
編著者名	瀧斎・藤井淳弘・西村公助・吉田珠己・吉田野乃						
編集機関	八尾市教育委員会						
所在地	〒581-0003 大阪府八尾市本町1丁目1番1号 Tel 0729-91-3881						
発行年月日	西暦2001年3月31日						
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村 遺跡番号	〇 / 〃	〇 / 〃		(m ²)	
しおんじやまこふん	やおし おおたけ						
心合寺山古墳	八尾市 大竹	27212	34 38 11	135 38 34	990204・22	1645.2	史跡整備に伴う発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項
心合寺山古墳	古墳	古墳時代	後円部主体部、前方頂方形壇（主体部）、前方部頂・下段平坦面埴輪列・墳丘斜面葺石・くびれ部西側造り出し、前方部前面周濠跡		埴輪 土師器 主体部副葬品（甲冑、夔鳳鏡、刀剣類、針、堅楯、勾玉、管玉等）		後円部主体部が粘土槨3基検出。前方部頂で主体部を有する方形壇出土。墳丘西側で造り出し検出。後円部と造り出しの谷部で「水の祭祀場を表した埴輪」出土
心合寺山古墳	古墳	奈良～鎌倉時代	溝・土坑等		瓦、土師器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦器		平安時代層より白鳳時代の心合寺のものとみられる単弁八葉蓮華文軒丸瓦をはじめとする瓦片出土

史跡心合寺山古墳発掘調査概要報告書—史跡整備に伴う発掘調査の概要—

正誤表

頁	行	誤	正
例言	29	環頭写真	巻頭写真
5	表1最下欄	2000年(平成12年)7月~10月	2000年(平成12年)5月~10月
5	表1最下欄	約__m ²	約500m ²
9	第5図	②(土坑埋土)	②(SK1埋土)
9	第5図		
21	38	下段裾	中段裾
30	写真6-11	NS21-2外側	NS21-22外側
42	第20図	〈東西土層断面図：B〉	〈南北土層断面図：B〉
80	16	前方部前面中段裾	前方部中段
82	第34図	(S=1/800)	(S=1/1600)
98	23	くびれ部で土した。	くびれ部で出土した。
101	40	導水施設は、貼石施設	導水施設は、I貼石施設
131	写真3 ②細片2 (I型・I'型)		



夔鳳鏡(鏡背)



夔鳳鏡(鏡面)



「水の祭祀場を表した埴輪」(斜めから)



「水の祭祀場を表した埴輪」(南面)

はじめに

心合寺山古墳は、八尾市域の東部に連なる生駒山系西麓に造営された北・中河内最大の前方後円墳です。昭和41年には、国の史跡に指定されました。

八尾市教育委員会では、心合寺山古墳を市民の方々をはじめ、多くの人々に親しまれる場として保存整備を計るために、平成4年度から継続して基礎発掘調査を行い、史跡整備の基本構想・基本設計の策定を行うなどの準備作業を行ってきました。

平成9年度から平成12年度までは、本体整備のための発掘調査を、文化庁の国庫補助事業として実施しました。その結果、心合寺山古墳の墳丘構造等が明らかになり、墳丘長が160m前後になることが判明するなど、大きな成果を取ることができました。墳丘の各段には円筒埴輪が並べられ、前方部墳頂部には全国的にも希な「方形壇」を検出、後円部墳頂部では3基の埋葬施設の位置やそのうち一つの副葬品の内容を確認、古墳の西側くびれ部には、「水の祭祀場を表した埴輪」が原位置で出土する等、学術的にも貴重な成果が得られました。

本書は、これらの調査成果の概要をとりまとめたものです。今後、心合寺山古墳の貴重な学術的価値を多くの人々に知っていただく一助となれば幸いに存じます。

発掘調査を進めるにあたりましては、地元の方々をはじめとする市民の皆様方、史跡整備委員の諸先生をはじめ、関係各位からの多大なご助力、ご指導を賜りました。心より厚く御礼申し上げます。

今後、心合寺山古墳を含めた市内の貴重な埋蔵文化財が、市民の方々をはじめ、多くの人々に親しまれるよう、保存・活用されていくことが、重要な課題となるでしょう。本書が、その役割の一助となれば幸いです。

平成13年3月

八尾市教育委員会

教育長 森 卓

例 言

1. 本書は、八尾市教育委員会が平成8年度から平成12年度までに実施した、史跡心合寺山古墳（八尾市大竹4・5丁目所在）の整備事業に伴い、実施した発掘調査の概要報告書である。
2. 発掘調査は、八尾市教育委員会社会教育部文化財課、米田敏幸の指導のもと、本課技師、藤井淳弘、洵齋、西村公助、吉田珠己、吉田野乃が担当した。

3. 調査期間は下記のとおりである。

第4次調査 1996年9月2日～10月7日

第5次調査 1997年7月1日～9月29日

第6次調査 1998年7月1日～10月30日

第7次調査 1999年7月12日～12月28日

第8次調査 2000年5月22日～9月28日

4. 発掘調査にあたっては、下記の心合寺山古墳史跡整備委員の御指導をいただいた。

村川行弘 大阪経済法科大学 総合科学研究所長 教養学部 教授

堅田 直 帝塚山大学 名誉教授

和田晴吾 立命館大学 文学部教授

井藤 徹 (財)大阪府文化財調査研究センター 調査部長

加藤允彦 文化庁文化財保護部記念物課（平成11年度まで委員、当時奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター保存工学研究室長）

（順不同・敬称略）

5. 本書には、史跡心合寺山古墳の整備に伴う発掘調査の概要・報告を収録した。概要の内容については、あくまで現時点での所見であり、今後整理作業を行って正報告を行う予定である。
6. 本書の作成にあたっては、藤井淳弘、洵齋、西村公助、吉田珠己、吉田野乃が行い、執筆分担・文責については目次に記した通りである。編集は吉田野乃が行った。
7. 調査にあたっては、下記の自然科学分野の分析を実施し、各氏に分析・玉稿を賜った。記して謝意を表します。

石種・胎土分析 八尾市立曙川小学校 教諭 奥田尚

樹種分析 (財)元興寺文化財研究所 研究開発室 井上美知子・菅井裕子

染料分析 奈良国立文化財研究所 客員研究員 佐藤昌憲

花粉分析 環境考古研究会 金原正子、岡山邦子、木寺きみ子、高井幸徳 桑名志保

監修 天理大学附属天理参考館 金原正明

（敬称略）

8. 環頭写真及び図版12、13、23の写真は阿南辰秀氏の撮影による。なお本写真は八尾市立歴史民俗資料館に提供していただいた。

本文目次

第1章. 調査の経緯と経過	(藤井)	1
第2章. 発掘調査の概要		
1. 第4次発掘調査報告	(吉田野)	6
2. 第5次発掘調査概要	(吉田野)	16
3. 第6次発掘調査概要		24
(1)前方部墳頂平坦面	(藤井)	
(2)後円部墳頂平坦面	(藤井)	
4. 第7次発掘調査概要		38
(1)1区	(藤井)	
(2)2区	(藤井)	
(3)3～7区	(道)	
5. 第8次発掘調査概要		66
(1)1区	(西村)	
(2)2区	(西村)	
(3)3・4区	(吉田珠)	
(4)5区	(西村)	
(5)6区	(西村)	
(6)7区	(西村)	
(7)8区	(西村)	
第3章. 考察		
1. 墳丘復元案について	(吉田野・藤井)	78
2. 主体部について	(藤井)	84
3. 埴輪配列について	(藤井・吉田野)	86
4. 墳丘築造について	(吉田野)	88
付論		
道 斎「水の祭祀場を表した埴輪についての覚書」		94
付編. 自然科学分析		
1. 奥田尚「心合寺山古墳の石材の石種・鉱物種とその採石地」		112
2. 井上美知子・菅井裕子「八尾心合寺山古墳青銅鏡に伴う遺物の分析」		126
3. 佐藤昌憲「八尾心合寺山古墳青銅鏡に伴う繊維の染料分析」		138
4. 環境考古研究会「史跡心合寺山古墳発掘調査に伴う環境考古学分析」		140
5. 株式会社浪速技研コンサルタント 「史跡心合寺山古墳保存整備工事に伴う土質調査」	(抜粋)	152

図版目次

- 図版1 史跡心合寺山古墳現況写真 古墳全景(南上空から)・(西上空から)
- 図版2 第4次調査 調査地全景(後円部より)・東側調査区(北より)
- 図版3 第4次調査 東側調査区(北より・後円部を望む)・(落ち込み・東より)
- 図版4 第4次調査 西側調査区埴輪列出土状況(東より)・(南より)
- 図版5 第4次調査 西側調査区埴輪列(検出状況・東より)・(掘方掘削後・東より)
- 図版6 第4次調査 西側調査区埴輪列(北より)・(北西より)
- 図版7 第4次調査 西側調査区埴輪列(検出状況・南より)・(北より後円部を望む)
- 図版8 第4次調査 西側調査区(埴輪④南より)・(埴輪⑤南より)
- 図版9 第5次調査 調査区全景(西より)・(南西より)
- 図版10 第6次調査 調査区全景(南から)・前方部調査状況(北から)
- 図版11 第7次調査 方形壇検出状況(北から)・西槨内出土状況(右が北)
- 図版12 第7次調査 7区調査区全景(西より)・7区埴輪出土状況(東より)
- 図版13 第7次調査 7区埴輪出土状況(南より)・(南東より)
- 図版14 第8次調査 1区全景(南から)・2区全景(南から)
- 図版15 第8次調査 3・4区全景(空撮)・4区葺石・周濠内円筒埴輪(南から)
- 図版16 第8次調査 3・4区葺石検出状況(南から)・4区葺石(南東から)
- 図版17 第8次調査 5区全景(南から)・6区全景(南から)
- 図版18 第8次調査 7区全景(南から)・8区全景(西から)
- 図版19 第4次調査出土遺物
- 図版20 第5次調査出土遺物
- 図版21 第7次調査出土遺物 夔鳳鏡X線写真
- 図版22 第7次調査出土遺物 7区出土形象埴輪・6区出土円筒埴輪
- 図版23 第7次調査出土遺物 「水の祭祀場を表した埴輪」東面・俯瞰

第1章 調査の経緯と経過

心合寺山古墳の位置 心合寺山古墳は、大阪府八尾市大竹に所在する中河内を代表する大型前方後円墳である。八尾市域の北東部に位置し、生駒山地西麓の扇状地西先端部に造営されており、南北方向に墳丘主軸をそろえ、前方部を南側に後円部を北側に向けている。古墳の周囲には、「新池」・「観音池」・「総池」といった周濠の名残と考えられる3つのため池が取り囲み、西側から望む墳丘は特に前方後円墳の形状を精美に残している。大阪府内でも貴重な前方後円墳の一つとして、昭和41年2月には国史跡に指定されている。

周辺には、西ノ山古墳、花岡山古墳(現在消滅)、向山古墳、鏡塚古墳(円墳?)といった古墳時代前期から前方後円墳が造営されている。そして、古墳時代後期には愛宕塚古墳や大石古墳などの大型横穴式石室を主体とする古墳が造営されている。心合寺山古墳を含むこれらの古墳を総称して「楽音寺・大竹古墳群(大竹古墳群)」と呼称している。

しかし、八尾市域でも近年平野部から生駒山地西麓域にかけての宅地化の動きが進み、これらの古墳の保全が危惧されることから、八尾市教育委員会では、心合寺山古墳を中心としたこれら多数の文化財の保存・活用に向けて、心合寺山古墳の史跡整備を行うこととなった。そして、古墳の墳丘復原整備のための基礎資料を得るために発掘調査を実施することになった。平成4年度(1992年)から平成12年度(2000年)にかけて8次にわたる史跡整備に向けた発掘調査を実施している。

心合寺山古墳における既往調査(表1 調査一覧表参照) 八尾市教育委員会による発掘調査以前に、円筒埴輪・形象埴輪片や当古墳出土とされる長持形石棺の縄掛突起の破片が本古墳の採集資料として紹介



第1図 心合寺山古墳とその周辺(1/8000)

されている(大阪文化財センター1976)。

史跡整備に伴う発掘調査以外にも、墳丘及び周濠等の周辺で、八尾市教育委員会や(財)八尾市文化財調査研究会により発掘調査が行われている。八尾市教育委員会では、古墳東側の総池外堤部や前方部里道の調査(八尾市教育委員会1984・1985)など公共工事等に伴い実施してきた。最近では、心合寺山古墳の北西側の「新池」と呼ばれるため池の堤体改修に伴い、(財)八尾市文化財調査研究会により堤体及び池底部分の発掘調査が継続的に行われている((財)八尾市文化財調査研究会1990・1998～2000)。これらの調査で、古墳築造当時の周濠や外堤は確認できなかったものの、古墳築造以後に築造されたため池の様相が明らかになるなどの成果が得られている。また、心合寺山古墳以降、奈良時代に造営されたと考えられる「心合寺(大竹廃寺)」に関連する瓦が、古墳西側周辺で出土している。

史跡整備に伴う発掘調査 心合寺山古墳の史跡整備に伴う八尾市教育委員会による発掘調査は、平成4(1992)年度から第1次発掘調査(以下第一次と略記)として開始している。平成6(1994)年度の第3次まで、墳丘と周濠部分の各所に調査区を設定し、古墳の基礎データを得るための基礎発掘調査を実施した(八尾市教育委員会1996)。さらに平成8(1996)年度の第4次では、後円部北側の周濠推定範囲の予備発掘調査を行った(本書6頁～15頁)。

平成9(1997)年度からは、文化庁の国庫補助事業により、史跡整備に向けた本格的な発掘調査を第5次として開始している。第5次では、墳丘西側くびれ部及び前方部裾部の調査を行い、基礎発掘調査で確認した西側くびれ部の基底石から前方部にかけての段築最下段の平坦面とそれに並行して伸びる埴輪列を検出している(八尾市教育委員会1998・本書16頁～23頁)。

平成10(1998)年度は、第6次として、前方部及び後円部の墳頂平坦面の調査を行った。後円部墳頂平坦面では、後世の攪乱が著しいため埴輪列等は確認できなかったものの、従来考えられていた石棺を伴う主体部ではなく、同一の墓壇内に埋葬された東西に並列する3基の粘土槨であることを確認した。前方部墳頂平坦面では、墳端に沿って樹立された南北方向の埴輪列やその内側に葺石列により区画された「方形壇(方形壇状遺構)」を検出している(八尾市教育委員会1999・本書24頁～37頁)。

平成11(1999)年度は、第7次として、前方部の「方形壇」下層の調査(1区)と後円部で検出した3基の粘土槨(中央槨・西槨・東槨)の位置・構造確認と特に破壊の著しかった西槨内北側部分の内部調査(2区)を行った。さらに墳丘復元の為に後円部南側斜面、前方部、西側くびれ部裾に調査区(3区～6区)を設定し、調査を実施している(本書38頁～65頁)。

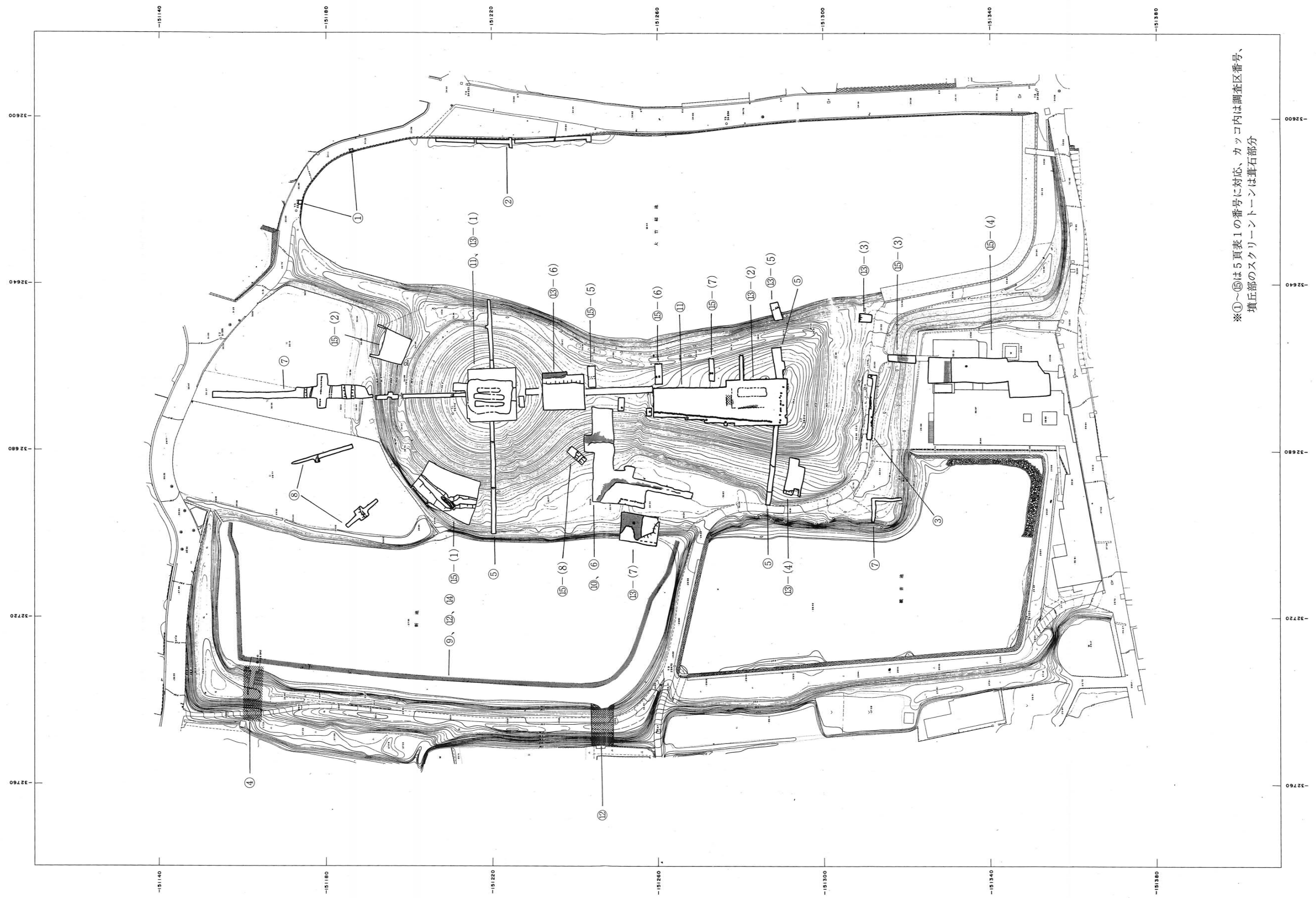
「方形壇」下層では、墳丘主軸やや東よりに南北方向に木棺を直接埋葬したと思われる埋葬施設の一部を確認した。西槨内の調査では棺北小口に置かれた短甲と衝角付冑、その南側の礫敷きの上に置かれた棺内の副葬品(夔鳳鏡1面・鉄刀2本・鉄剣3本・鉄針7本以上・竖櫛1点・管玉32点・勾玉2点)を確認している。これまで知られていなかった大型前方後円墳の副葬品の一端を知ることができた。

さらに、西側くびれ部裾(7区)では、造り出しの一部を検出し、造り出しと後円部との結節部裾ではこれまでに出土例のない囲形埴輪と家形埴輪が一体化した「水の祭祀場を表した埴輪」が現位置で出土している。これら埴輪の使用方法等を知る上で貴重な資料が得られた。

平成12(2000)年度の第8次は、後円部西側及び北側裾部の調査(1区・2区・8区)、前方部墳頂平坦面の第6次で検出した南北方向の埴輪列に対応する東側の調査(3～5区)、前方部裾南端の調査(6区・7区)を実施している(本書66頁～77頁)。この調査では、後円部斜面の葺石や前方部墳頂平坦面の第6次で確認した南北埴輪列の対称位置に埴輪列を確認でき、墳頂平坦面に台形状に樹立された埴輪列が復元できる資料が得られた。前方部南端裾では、墳丘南端を示す葺石と基底石を検出し、墳丘規模、構造を知る上で貴重な資料が得られた。さらに基底石の外側約3.5m離れた所で円筒埴輪が単独で樹立されていた。円筒埴輪の使用方法を探る上で新たな検討課題となった。

【参考文献】

(財)大阪文化財センター 1976「清原得巖所蔵考古資料図録」『大阪文化誌』第6号



※①～⑮は5頁表1の番号に対応、カッコ内は調査区番号、
墳丘部のスクリーントーンは葺石部分

第2図 調査区設定図(1/1000)

【表1 心合寺山古墳の既往発掘調査一覧表】

調査年	調査内容	調査主体	調査名	参考文献	第2図番号
1984(昭和59)年 2月	総池北東側外堤部の護岸工事に伴う試掘調査。古墳の外堤は確認できず。	八尾市教育委員会	史跡心合寺山古墳試掘調査概要	『八尾市内遺跡昭和58年度発掘調査報告書』1984年	①
1984(昭和59)年 11月	前年度に引き続き、総池東側の試掘調査。中世の盛土層以下に古墳外堤に使用された葦石と思われる石材を確認。外堤上の埴輪列は確認できず。	八尾市教育委員会	心合寺山古墳東側外堤2次発掘調査概要	『八尾市文化財紀要1』1985年	②
1988(昭和63)年 12月	前方部中段にあたる里道で埴輪の散乱が見られたため、里道整備に先立ち実施した発掘調査。平坦面に樹立された東西方向の埴輪列を長さ約14m、14個体を検出。	八尾市教育委員会	史跡心合寺山古墳前方部里道の発掘調査	『八尾市文化財紀要6』1992年	③
1989(平成元)年 12月	新池北西隅の樋管付け替え工事に伴う発掘調査。新池外堤は、3時期にわたり後世に築造されたものであることが判明。正徳6(1716)年の墨書のある礎板を確認。	(財)八尾市文化財調査研究会	心合寺山古墳第1次調査(S089-1)	『八尾市文化財調査研究会年報平成元年度』1990年	④
1993(平成5)年 2月～3月	史跡整備のための基礎発掘調査。墳丘部に8箇所の調査区を設定。調査面積は215㎡。前方部墳頂平坦面の東西方向の埴輪列の検出、西側くびれ部の段築平坦面痕跡と上段斜面の葦石を確認。	八尾市教育委員会	史跡心合寺山古墳第1次発掘調査	『史跡心合寺山古墳基礎発掘調査』八尾市文化財調査報告35 1996年	⑤
1993(平成5)年 7月～9月	史跡整備のための基礎発掘調査。調査面積は約55㎡。前年度調査を実施した西側くびれ部裾を拡張し、後円部と前方部の結節点付近の葦石基底石を確認。	八尾市教育委員会	史跡心合寺山古墳第2次発掘調査	『史跡心合寺山古墳基礎発掘調査』八尾市文化財調査報告35 1996年	⑥
1994(平成6)年 8月～9月	史跡整備のための基礎発掘調査。調査面積は約186㎡。後円部北側の周濠推定部分と前方部南西端の調査を実施。後円部北側では、周濠の痕跡と東西方向に埴輪列を樹立した平坦面を確認。	八尾市教育委員会	史跡心合寺山古墳第3次発掘調査	『史跡心合寺山古墳基礎発掘調査』八尾市文化財調査報告35 1996年	⑦
1996(平成8)年 9月～10月	史跡整備のための予備発掘調査。調査面積は39㎡。第3次で確認した後円部北側の周濠状痕跡と埴輪列の延長を確認するため、後円部南西側に2ヶ所の調査区を設定。周濠状痕跡と埴輪列の一部を確認。	八尾市教育委員会	史跡心合寺山古墳第4次発掘調査	本書掲載	⑧
1997(平成9)年 11月	埴体改修に伴う発掘調査。新池築造当時の池岸・石敷き遺構を確認。	(財)八尾市文化財調査研究会	心合寺山古墳第2次調査(S097-2)	『(財)八尾市文化財調査研究会報告62』1998年	⑨
1997(平成9)年 7月～9月	史跡整備のための発掘調査。調査面積は約270㎡。西側くびれ部裾の調査で、上段及び下段斜面裾の葦石と基底石を検出し、下段では並行する埴輪列を確認。	八尾市教育委員会	史跡心合寺山古墳第5次発掘調査	「史跡心合寺山古墳第5次発掘調査概報」『八尾市文化財紀要8』1998年・『国史跡心合寺山古墳－これまでの発掘調査の成果－』2000年・本書掲載	⑩
1998(平成10)年 7月～10月	史跡整備のための発掘調査。調査面積は約510㎡。前方部墳頂平坦面の端で南北方向の埴輪列を長さ約30m、約100個体を確認。さらに、埴輪列の内側に方形壇の一部を検出。後円部墳頂平坦面では、主体部に関連する墓壇と埋葬施設的位置を確認。	八尾市教育委員会	史跡心合寺山古墳第6次発掘調査	「史跡心合寺山古墳第6次発掘調査概報」『八尾市文化財紀要9』1999年・『国史跡心合寺山古墳－これまでの発掘調査の成果－』2000年・本書掲載	⑪
1998(平成10)年 10月～1999年 (平成11)年1月	埴体改修に伴う発掘調査。平安時代～近世の遺構を検出。外堤が5時期にわたることを確認。	(財)八尾市文化財調査研究会	心合寺山古墳第3次調査(S098-3)	『平成10年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』1999年	⑫
1999(平成11)年 7月～12月	史跡整備のための発掘調査。調査面積は約330㎡。前年度確認した後円部の埋葬施設の継続調査及び主体内部の調査、方形壇の下層確認、西側くびれ部の最下段、前方部各所の調査を実施。西裾の副葬品(短甲・鏡等)の構成の一部を確認。方形壇の下層に埋葬施設を確認。西側くびれ部では造り出しの一部と水の祭祀場を表した埴輪を現位置で検出。	八尾市教育委員会	史跡心合寺山古墳第7次発掘調査	「史跡心合寺山古墳第7次発掘調査現地説明会資料」1999年・「史跡心合寺山古墳第7次発掘調査遺物展示会資料」1999年・『国史跡心合寺山古墳－これまでの発掘調査の成果－』2000年・本書掲載	⑬
1999(平成11)年 11月～12月	埴体改修に伴う発掘調査。古墳時代中期～近世の遺構・遺物を確認。	(財)八尾市文化財調査研究会	心合寺山古墳第4次調査(S099-4)	『平成11年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』2000年	⑭
2000(平成12)年 7月～10月	史跡整備のための発掘調査。調査面積は約㎡。後円部西側及び北側、前方部墳頂平坦面、前方部裾南端を調査。第6次で確認した東西埴輪列の対称位置に埴輪列を確認。前方部裾の基底石及び葦石を検出し、墳丘の南端を確認。	八尾市教育委員会	史跡心合寺山古墳第8次発掘調査	「史跡心合寺山古墳第8次発掘調査発掘調査概略」2000年・本書掲載	⑮

下線の調査は史跡整備に伴う発掘調査

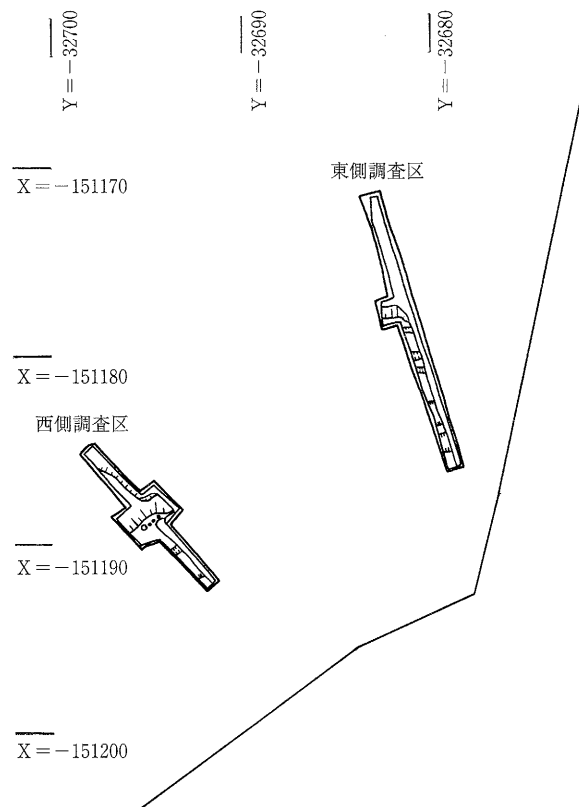
第2章 発掘調査の概要

1. 第4次発掘調査報告

平成6年度に行った第3次調査で検出した後円部北側下段平坦面上の埴輪列の延長を確認する目的で、第3次調査区の西側に2箇所の特レンチを設定した。現況の後円部の北側は平坦地となっているが、西側が東側に比べて1.6m前後段差をなして低くなっている。第3次調査区は用地の東側にあたり、今回設定した特レンチは西側にあたる。今回の調査地の現況地盤はT.P. +28.8m前後である。後円部中心点から放射線状に南西に延ばした延長上に幅1mの特レンチを2箇所設定(東側調査区、西側調査区)した。〔東側調査区〕幅1m、長さ15mの調査区を設定した。北側落ち込み肩部分について西側へ幅1m拡張した。調査面積は16.5㎡である。後円部中心点から北35~50.5m地点にあたる。地表下0.15~0.62m、T.P. +28.74~28.32mで墳丘が削平されたのちの墳丘構成層の面(ここでは便宜上、墳丘削平面と称する)を確認した。この面は南東から北西方向への緩傾斜面である。第3次調査では後円部中心点から北40~41m地点、T.P. +29.0m前後で埴輪列を検出しているが、ここでは埴輪列をはじめとする古墳に伴う遺構はまったく遺存していなかった。ただ後円部中心点から北44m地点で第3次調査で周濠状痕跡とした墳丘削平面が北へ向かって落ち込む肩を検出した。

層序は南壁から7m付近では地表下0.55mで墳丘面を確認しており、0.1~0.15mの表土層の下に、旧耕作土とみられる褐色斑暗灰色粘砂層(2層)、褐色斑灰色砂質土層(7層)が0.2~0.3m前後堆積し、この下には灰茶色砂質土(13層)が堆積して墳丘面に至る。また落ち込み肩の以北では13層の堆積する部分に暗灰茶色粘性砂層(10層 瓦器・須恵器片を含む)、明灰茶色粘性微砂層(14層、須恵器片・土師器片を含む)が堆積し、この下は落ち込み内の堆積となる。

落ち込み肩より南側では墳丘削平面上で東西方向の溝とみられる遺構を5条検出した。これらは一部の遺構の埋土に中世とみられる土師器片等を含むこと、上層に瓦器片等を含むことから、中世以降の遺構とみられる。溝の大きさ、深さ、埋土、出土遺物については表1の通りである。落ち込みはT.P. +



第3図 調査区設定図(1/400)

28.3m前後で肩をなし、ここから北へ傾斜をなして落ち込む。確認したもっとも深い部分はT.P. +27.8 mである。落ち込み内の堆積土は灰白色系の砂層、粘性砂層、微砂層、粗砂層であり、流水があったものとみられる。これは第3次調査で周濠状痕跡の肩部として確認したものに続くものとみられる。その後の調査で心合寺山古墳が3段築成で最下段斜面には葺き石が葺かれている事が判明した(第7次調査8区、第8次調査4区)。このことからこの落ち込みは周濠を後世に利用した際に、墳丘最下段部分を削平した痕跡とみることが出来る。墳丘の最下段斜面はこの落ち込み肩より以北の、近い位置に存在したものとみられる。落ち込み内堆積の時期は第3次調査の成果から平安時代以降とみられる。

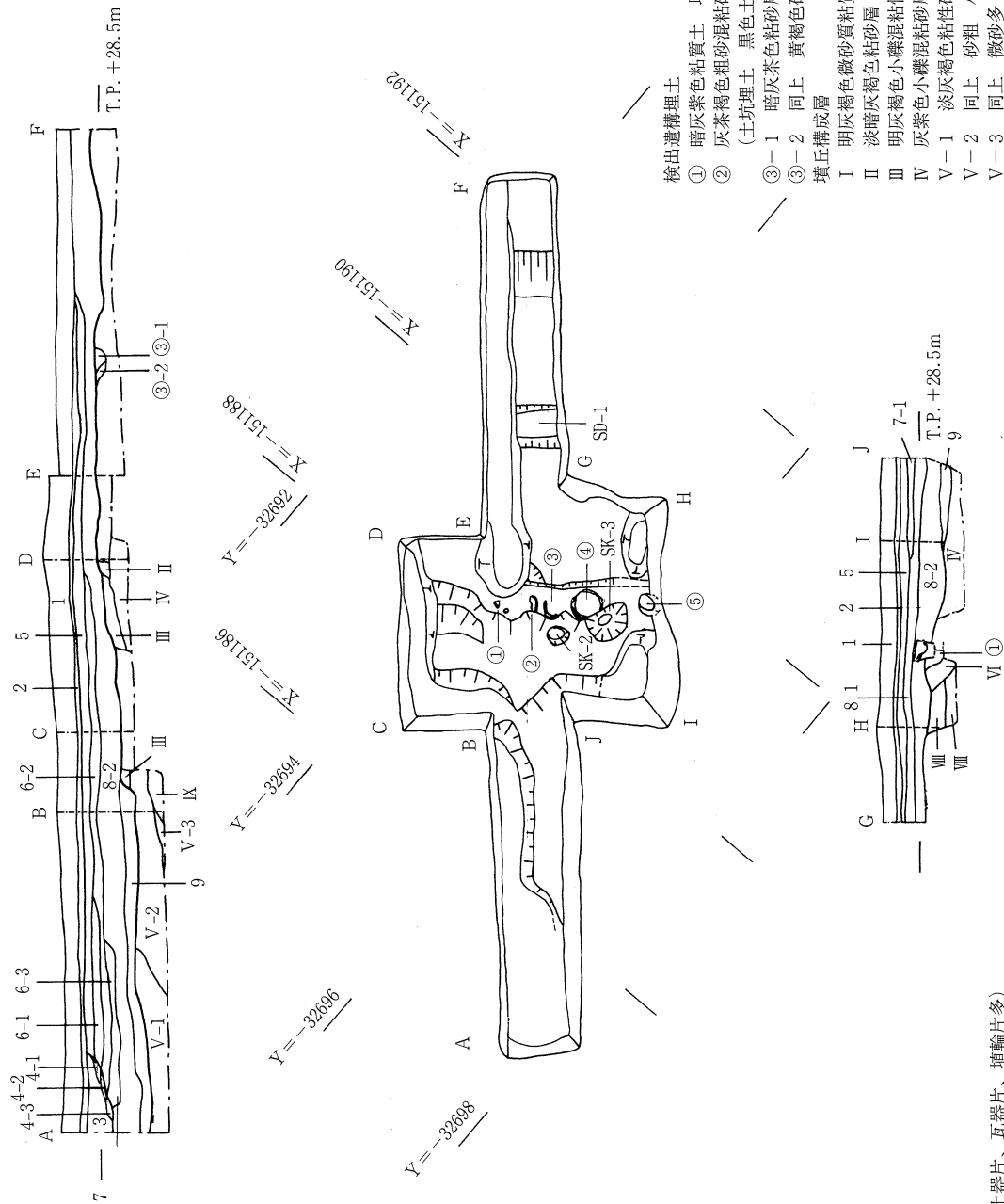
墳丘構成層は東壁と西拡張区の西壁に一部断割をいれて確認したところ、粘質土を主体とし一部粗砂や微砂層を含んでおり、盛土とみられる。ただ東壁のT.P. +28.08m以下にみられる明褐色粘性微砂層(X層)は墳丘築造以前の土層である可能性をもつ。第3次調査では埴輪列の東側は墳丘築造前の土層である褐色粗砂から掘り方が掘り込まれており、埴輪列の西側では砂層を主体とする墳丘築造以前の扇状地性堆積物層の上に盛土をし、ここから埴輪列の掘り方が掘り込まれていた。X層は西側に傾斜する墳丘築造前の土層の一部である可能性がある。

	最大巾 (m)	最大深 (m)	埋 土	出 土 遺 物	備 考
S D 1	1.12	0.20	褐色斑灰色粘性砂		上層の落ち込み状
S D 2	0.89	0.14	灰褐色粘砂	埴輪片・近世陶磁片・土師器片他	
S D 3	0.32	0.05	灰黄色微砂		
S D 4	0.40	0.06	灰色小礫混砂	土師器片	
S D 5	0.25	0.06	灰色砂		

表1 東側調査区検出溝一覧表

〔西側調査区〕幅1m、長さ10mの調査区を設定した。埴輪列検出部分については東西に1mずつ拡張し、幅3m、南北2mとして拡張した。調査面積は14m²である。後円部中心点から北37~47m地点にあたる。地表下0.3m~0.8m、T.P. +28.6~27.9mで墳丘面を確認した。ここでは北東から南西方向に並ぶ埴輪列を検出した。墳丘面は埴輪列付近まではほぼ平坦面だが、埴輪列のすぐ北側では削平によりゆるやかに傾斜する。層序は南壁から5m付近では、地表下0.85mで墳丘面を確認しており、層厚0.25mの表土の下に、上から層厚0.05mの赤褐色粘砂層(2層)、層厚0.15m前後の褐灰色砂質土層(5層)、層厚0.2~0.25m前後の暗灰茶褐色粘性砂質土層(8-1層・埴輪片・瓦片・黒色土器片・瓦器片・土師器片を多く含む)が堆積し、墳丘面に至る。

埴輪列は南壁から5m付近、後円部中心点から北41m地点で検出した。検出面の高さは地表下0.5m前後、T.P. +28.4m前後である。第3次調査では後円部中心点から北40~41m地点、T.P. +29.0m前後で東西方向の埴輪列を検出している。今回検出した埴輪列はこれの延長部分にあたり、後円部の下段平坦面上では円弧をなして埴輪列が廻らされている事が、今回判明した。埴輪列は北東から南西方向に並ぶ円筒埴輪を5個体、長さ1.8m分検出し、東側から埴輪①~⑤として取りあげた。埴輪列の北東側は墳丘面を削平して掘り込まれた遺構等によって消失していた。埴輪列の南西側についてはさらに調査区外に続くものとみられる。検出した円筒埴輪5個体のうち樹立した状態のものは④、⑤の二個体のみである。埴輪④は第2段タガ付近まで遺存し、上半部は口縁部を南東にして倒れ、破片となって集中する状態であった。この上半部は墳丘面より0.2~0.3m前後上の平安時代中期頃の包含層である暗茶褐色粘性砂質土層(8-1層)の上の倒れこんでいた。このことから少なくとも平安時代中期頃までは埴輪④は樹立した状態で遺存しており、こののちに削平により倒れたものとみられる。埴輪⑤は第1段タガ付近まで遺存し、西壁にかかる状態であった。東側の3個体は削平により遺存状態が悪く、特に東端の①についてはばらばらになった破片が集中するのみであった。埴輪③は第一段タガまで、埴輪③は底部のみ遺存していた。また埴輪④と⑤の間にも一個体樹立されていたものとみられるが、この部分に掘り込まれたSK3によって削平されており、SK3内には埴輪片が密に含まれていた。また埴輪②、③、⑤は



第4次調査 西側調査区

- 1 暗灰色小礫混粘砂層(表土)
- 2 赤褐色粘砂層
- 3 暗灰褐色小礫混砂質土層
- 4-1 褐色小礫混砂質土
- 4-2 同上 小礫少
- 4-3 同上 小礫少 色調暗
- 5 褐灰色砂質土層
- 6-1 褐色斑淡灰色小礫混砂質土層
- 6-2 同上 小礫多
- 6-3 同上 色調暗い、小礫少
- 7 茶灰褐色粘砂層
- 8-1 暗灰茶褐色粘性砂質土層
(炭混、瓦片、土師器片、黒色土器片、瓦器片、通輪片多)
- 8-2 同上 中礫混
- 9 明茶灰色粘砂層(土師器片、瓦器片、通輪片)

検出遺構埋土

- ① 暗灰茶色粘質土 埴輪列掘方埋土
- ② 灰茶褐色粗砂混粘砂層
(土坑埋土、黒色土器片、灰釉陶器片、緑釉陶器片)
- ③-1 暗灰茶色粘砂層
- ③-2 同上 黄褐色砂混
- 埴丘構成層
- I 明灰褐色微砂質粘質土
- II 淡暗灰褐色粘砂層
- III 明灰褐色小礫混粘性粘質土
- IV 灰紫色小礫混粘砂層
- V-1 淡灰褐色粘性砂質土層
- V-2 同上 砂粗 小礫混
- V-3 同上 微砂多 小礫少
- VI 灰茶褐色粘質土層
- VII 黄褐色粗砂混灰紫色粘砂層(小礫混)
- VIII 灰褐色小礫混粗砂層
- IX 灰色微砂層

第5図 西側調査区 平面・土層断面図(1/80)

底径25cm前後の小型品であるが、埴輪④は底径35cmを計る大型品である。第3次調査時の埴輪列は大型品が小型品を10本あいだにはさんで規則的に並べられており、これに対応するものとみられる。埴輪列の掘り方は削平により明瞭でないが、埴輪列の南東側でその肩部の輪郭を検出している。掘り方の深さは最も残りの良い西壁断面の埴輪⑤では深さ0.2mを計り、第1段目の中位よりやや上付近まで埋めて樹立されていたものとみられる。掘り方の上面は削平されているものとみられるが、埴輪②、③、④については上面の削平のため、掘り方埋土にほとんどかかっていない状態であった。ただ埴輪列の掘り方は埴輪底面より深く掘り込まれており、埴輪の下の埋土によって第1段タガがほぼ水平になるよう(T.P. +28.5m前後)調整されている。掘り方底面はT.P. +28.26m~28.36mの幅で凹凸がある。今回検出した埴輪列の樹立方法は第3次調査検出埴輪列のそれとほぼ共通するものである。

古墳に伴わない遺構は埴輪列付近から北側にかけて掘り込まれた落ち込みと、土坑3基(SK1~SK3)、溝1条である。落ち込みは3段の段をなして北側へ落ち込む。平安時代中期頃の包含層により、墳丘面が削平された痕跡である。土坑及び溝の詳細は表2のとおりである。SK1は平安時代中期頃の遺構である。他も時期は判然としないが、同様の時期の遺構かとみられる。

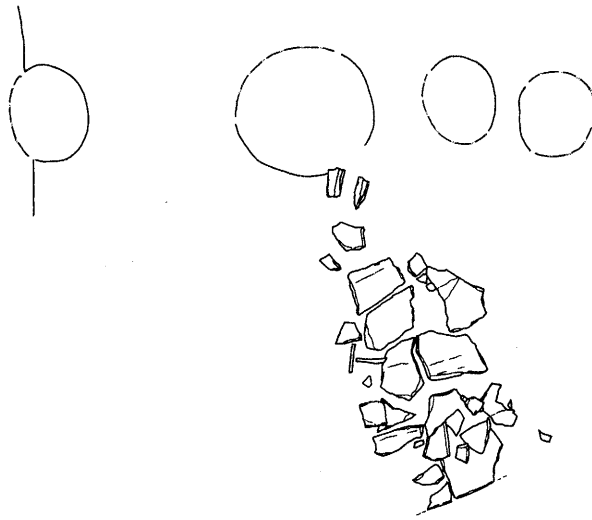
墳丘構成層は粘砂層、粘性砂質土層を主体とし、幾つかに分層でき、盛土とみられる。東壁のT.P. +

	形状	長径(m)	短径(m)	最大深(m)	埋土	出土遺物
SD1		最大検出幅0.5		0.15	暗灰茶色粘砂	
SK1	不整形	最大検出幅1.5		最大検出深 0.15	暗灰茶色粘質土	埴輪、黒色土器A類、 緑釉陶器、灰釉陶器、 土師器
SK2	不整形	0.7	0.44	0.15	暗灰茶褐色粘性砂質土	埴輪片、土師器片
SK3	不整形	0.6	0.45	0.15	暗灰茶褐色粘性砂質土	埴輪片

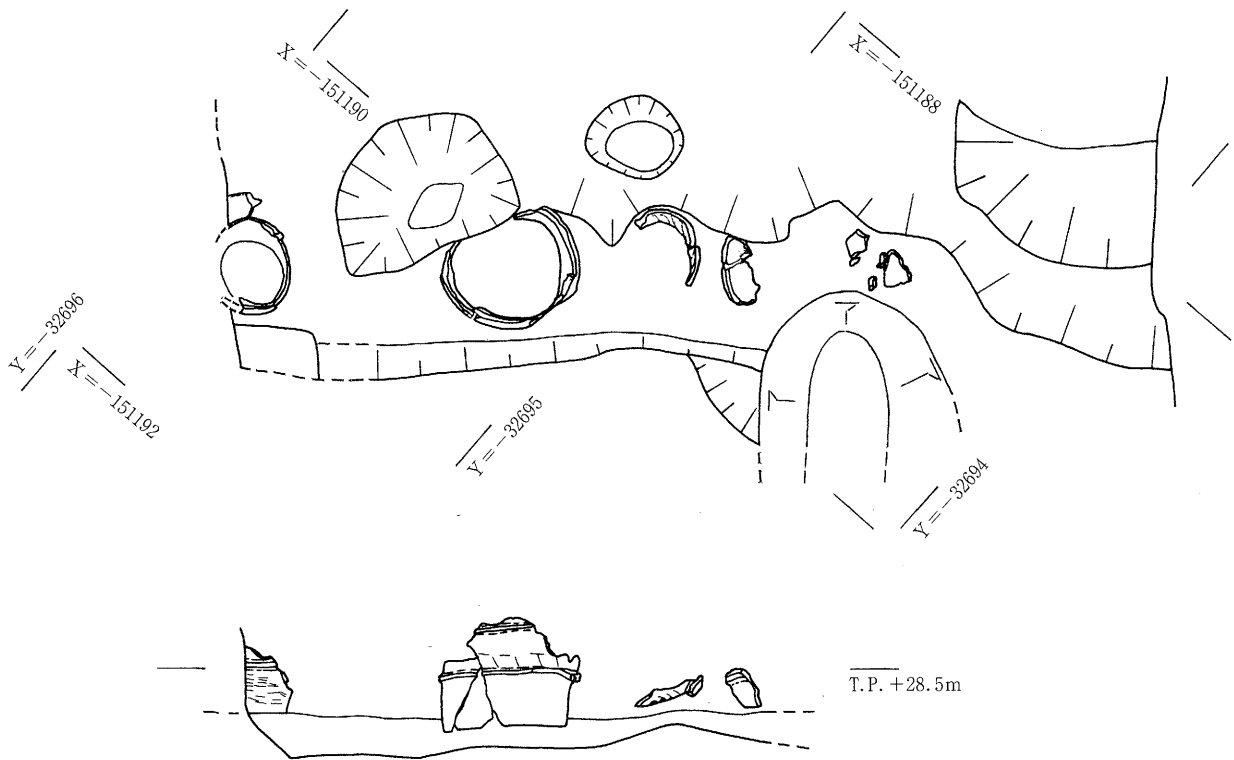
表2 西側調査区検出溝一覧表

27.96m以下に灰色微砂層(IX層)があり、これは墳丘築造以前の堆積層である可能性がある。

〔出土遺物〕1~3. 15は円筒埴輪列内の小型品の円筒埴輪の底部である。1が埴輪列内の埴輪①、2が埴輪②、3が埴輪③、15は埴輪⑤である。15は取り上げを行わず、現場保存としたため、現場で略実測と拓本を行なったものである。いずれも底径20cm前後で、第1段タガ上端貼り付け部までの高さは3で14.2cm、15で13.5cmを計る。底部外面の調整はタテハケが残るもので、3は一部にヨコハケが底端付近まで及ぶ。2. 3は底端面に棒状圧痕がみられ、3は木目痕がみられる。4. 5は円筒埴輪のタガ部分の破片で、両者は同一個体の可能性がある。これらは器壁が薄くタガがやや扁平であり、心合寺山古墳の他の円筒埴輪と比べると、やや異質感を与えるものであるが、他の古墳からの混入であるかは判然としない。6は蓋形埴輪の立飾片である。両面に線刻模様がみられる。7は蓋形埴輪の笠部の破片であり、3本一組の線刻がみられる。内面には笠部と基部とを貼り付けた際の剥離痕がみられ、基部側に格子状に線状の刻み目を入れた痕跡が、凸状に残存している。小片のため判然としないが、大型品で笠縁が外下方に短く開くものになるようである。地元産の胎土である。基礎調査報告時の分類ではA類に相当する可能性が高い。8は器種不明の形象埴輪である。外面にはナデがみられ、内面には貼り付けの際の線状のキザミメの残る剥離痕がみられる。家形埴輪の一部の可能性もあるが判然としない。9は綾杉文の線刻模様が施された形象埴輪の破片である。家形埴輪、甲冑形埴輪等の草摺部の一部の破片の可能性はあるが、判然としない。10は西側調査区のSK1埋土内から出土した緑釉陶器の皿である。硬陶で素地は灰白色、淡緑色の釉が施されている。心合寺山古墳で出土している緑釉陶器はこの1点のみである。12は10と同じく、SK1から出土した黒色土器A類である。高台はやや高く、若干外側に張り出す。11は西側調査区の西拡張部の2~3層から出土した灰釉陶器の壺の底部片である。高台は低く、やや外側に張り出す。10~12は平安時代中期頃の所産とみられる。14は埴輪列内埴輪④の推定復元図である。埴輪④は大型品で上半部が南側に倒れていた。埴輪④の下半部である第2段目までは現場保存と



第6図 埴輪④(上半部)出土状況平面図(1/20)

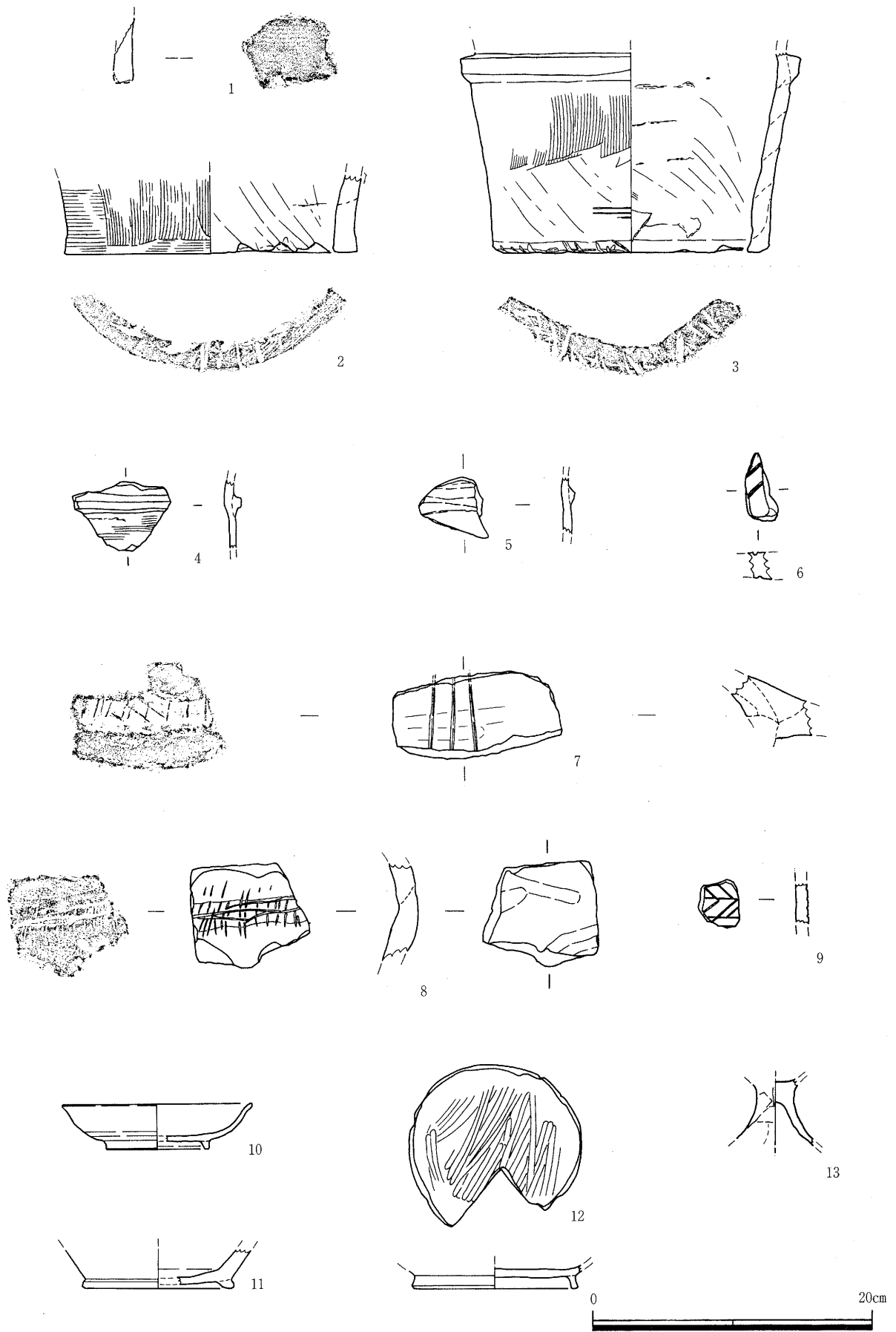


第7図 埴輪列 平面・立面図(1/20)

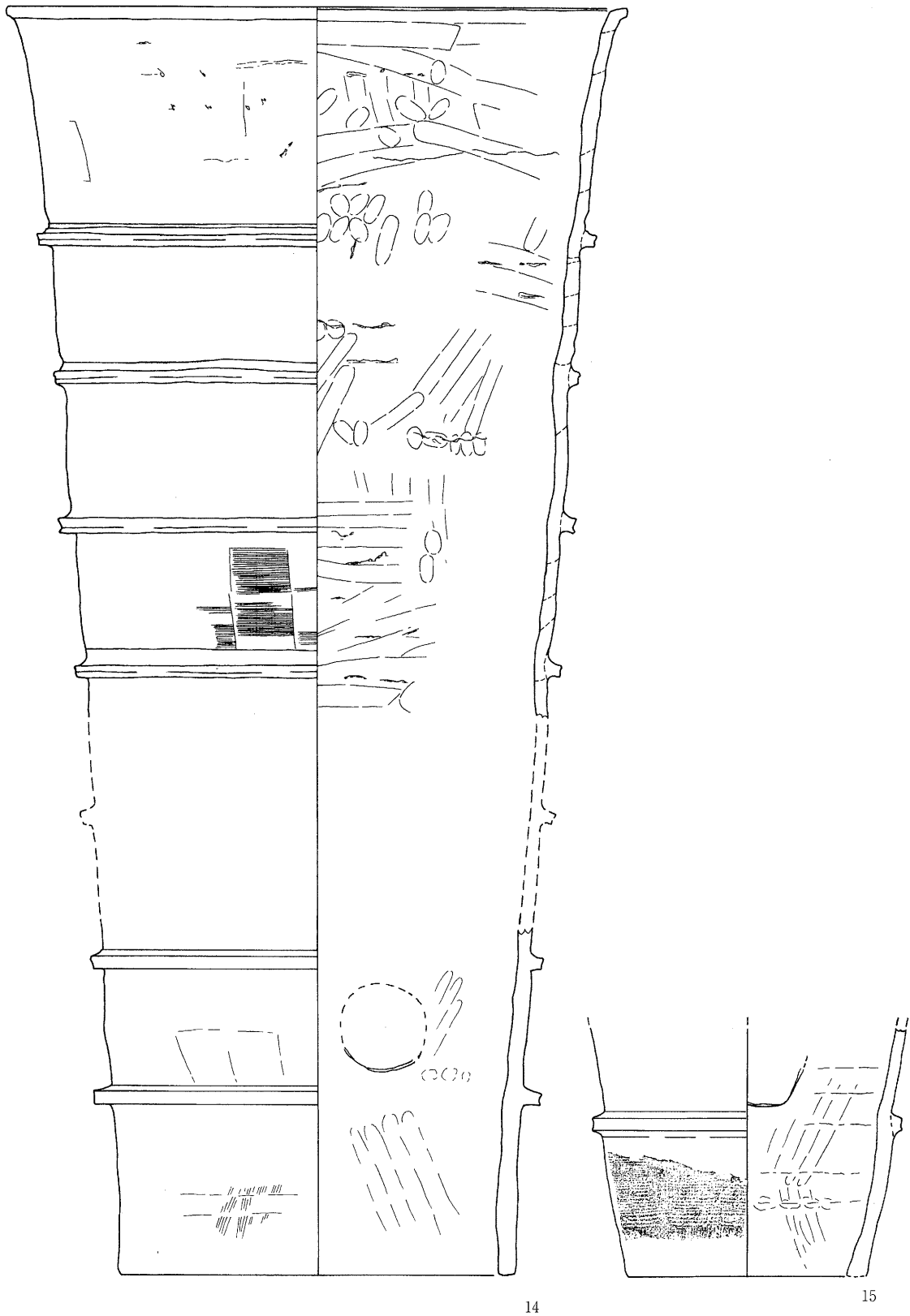
し、現場で略実測を行なった。上半部については取り上げて実測を行なっている。このため下半部の現場での略実測図と上半部の実測図を合成復元した。7条突帯8段構成の大型の円筒埴輪に推定復元できる。推定全高103cm、底径32cm前後、口径50cm前後を計る。底部下端に半円の切り込みがみられる。口縁端部はL字状に屈折するもので、基礎調査報告時分類のD類に相当する。タガはしっかりとした台形で、比較的突出度が高い。突帯間隔は下から第1段目は15cm、2～7段目は11.5cm、最上段に当たる8段目は18cmである。外面調整はB種ヨコハケを施し、観察可能な第5段目ではタガ間に原体を2回ないし1回廻している。内面調整はナデ、ユビオサエである。心合寺山古墳で出土している円筒埴輪の大型品は底部がほとんどであるが、第7次調査6区で下から第2段目から口縁部までの個体(第27図)が出土しており、7条突帯8段構成となることが確実である。第7次調査6区の埴輪の口縁端部の形態はD類であり、突帯間隔は最上段の突帯間隔が広くなることを含めて14と同じであり、共通の規格で作られたものとみられる。なお、口縁部分類のD類については、基礎調査時に出土したものは口径の判明できるもの11点のうち10点が19～26cmであり、1点が32cmで比較的口径が小さいものが多く、口端部の形態から小型の壺形埴輪を載せていた可能性も考えた。しかしながら、第4次調査出土の大型品、第7次調査6区出土の大型品のありかたから、D類については大型品の口縁部にもみられることが判明した。大型品の口縁部については基礎調査時に幅広の突帯を貼り付けるE類を確認している。これは口縁部片しか確認できていないが、基礎調査で出土した12点中9点が口径46～51cmを計るものであり、前方部頂の大型品とともに出土していることから、大型品の口縁部であることは確実である。このことから心合寺山古墳の円筒埴輪の大型品の口縁部にはE類とD類がみとめられ、D類は小型品にも存在することがわかる。前方部頂の大型品については小型品による円筒埴輪列の外側に約4.2～4.5m間隔で樹立しており、蓋形埴輪を載せていたことが第6次調査の成果から判明している。この大型円筒埴輪に蓋形埴輪等が載せられていたかについては、埴輪④が少なくとも平安時代中頃までは樹立されていた状態で遺存し、そののちに削平されて上半部が倒れたとみられるにも関わらず、周辺にまとまった状態での蓋形埴輪等の破片がみられないことから、載せられていなかった可能性が高い。

〔まとめ〕今回の調査の最も大きな成果は、第3次調査で確認した後円部北側の下段平坦面上埴輪列の西側への延長を確認したことである。第4次調査後に行った第5次調査で、くびれ部西側の下段平坦面で後円部・前方部下段結節点から後円部側と前方部側に延びる埴輪列を確認し、第3次調査後円部北区、第4次調査西側調査区、第5次調査区の埴輪列が結びつくことがわかった。これらの調査成果から下段平坦面の埴輪列は小型品の円筒埴輪を10本あいだに挟んで、大型品の円筒埴輪を配する規則的な埴輪配列がなされていることが判明した。また大型品については形象埴輪の基部等の可能性も基礎発掘調査報告時には考えていたが、今回調査の埴輪④上半部のありかたから、大型品の円筒埴輪であることが確実となり、その突帯数は7条突帯8段構成のものである可能性が高くなった。また大型品の円筒埴輪の上には蓋形埴輪を載せる等はされていなかった可能性が高い。

以上の成果の他に心合寺山古墳に伴うものではないが、墳丘面から切り込まれたSK1、墳丘面直上の8-1層から出土した平安時代中期頃の遺物は注意される。SK1からは緑釉陶器の皿片が1点出土している。第5次調査においても下段平坦面上埴輪列直上に平安時代下限とする包含層があり、7世紀後半の心合寺独自の瓦当文様をもつ軒丸瓦をはじめ多量の瓦片が含まれていた。心合寺の存続時期については独自の瓦当文様をもつ軒丸瓦の系譜が白鳳時代から奈良時代後期までみられる。平安時代の様相については今後の課題を残す点が多いが、心合寺山古墳の後円部北側からくびれ部西側の下段平坦面については寺院関連の施設により利用され、この際に埴輪列の上部が削平されたものとみられる。



第8図 出土遺物実測図1(1/4)



第9図 出土遺物実測図2(1/5)

出土調査区	出土位置・出土層	種類	番号	器種	部位	径等 (cm)	高さ (cm)	調整・手法	色調	焼成	胎土	備考
西側調査区	埴輪列 埴輪①	埴輪	1	円筒埴輪	底部	不明	残存高 4.6	外面-ヨコハケ、ユビオサエ 内面-不明	淡暗橙色	やや硬	非常に粗	
	埴輪列 埴輪②		2	円筒埴輪	底部	底径 18.4	14.2	外面-タテハケのち斜め方向ナデ 底部下端付近 ヨコハケ 内面-ナメナデ 底部 下端付近 横方向ナデ	暗橙色	やや軟	やや粗	底端面付近に 棒状圧痕残存
	埴輪列 埴輪③		3	円筒埴輪	底部	底径 20.8	残存高 5.3	外面-タテハケのちヨコハケ 内面-ナメ方向ナデ	淡橙色	硬	非常に粗	底端面付近に 木目痕、棒状 圧痕残存
	精査中		4	円筒埴輪	体部		残存高 4.9	外面-ヨコハケ、タガ付近横 方向ナデ 内面-ユビオサエ のち横方向ナデ	淡暗橙色	やや硬	非常に粗	
	42区 西拡張部 4層		5	円筒埴輪	体部		残存高 4.3	外面-横方向ナデ 内面-不 定方向ナデ	淡暗橙色	やや硬	非常に粗	
	43区 2~ 3層		6	蓋形埴輪	立飾部片		残存長 4.9	内外面-ナデ	淡橙色	普通	やや粗	
	44区 6層		7	蓋形埴輪	笠部		残存高 4.4	外面-横方向ナデ 内面-笠 縁部 横方向ナデ 他は不定 方向ナデ	橙色	やや硬	非常に粗	内面に貼り付 けの際のキザ ミメ痕が凸状 に残存
	埴輪列 4の 北		8	不明形象 埴輪			残存長 7.6	外面-斜め方向ナデ 内面- 不明	淡橙色	普通	粗	内面の貼り付け 痕に線状のキザ ミメ残存 家形 埴輪の一部か
	埴輪列 4・ 5間埴輪溜り		9	不明形象 埴輪			残存長 3.5	不明	淡橙色	やや軟	非常に粗	
	東拡張部 SK1	緑釉陶器	10	皿	口縁~底 部	高台径 13.4	器高 3.3	体部上半外面~内面-ロクロ ナデ 体部下外面~底部外 面-ロクロヘラケズリ	淡緑色 (素地灰 白色)	硬	非常に精 良	高台部内面と 底面以外施釉 削りだし高台 か
	43区 西拡 張部 2~ 3層	灰釉陶器	11	壺	底部~体 下半部	高台径 10.5	残存高 2.8	体部外面-ロクロヘラケズリ のちロクロナデ 高台~底 部外面-ロクロナデ	淡暗灰緑 色 (素地 灰白色)	硬	精良	施釉範囲全面
	東拡張部 SK1	黒色土器	12	黒色土器 A類	底部	高台径 11.6	残存高 1.7	底部外面-ロクロヘラケズリ のちロクロナデ 中央部 仕 上げナデ 高台外面-ロクロ ナデ 内面-ヘラミガキ 一 部横方向ナデ	橙色	普通	普通	
	43区 東拡張部 おちこみ	土師器	13	高坏	脚部	口径 49.6	残存高 4.7	内外面-ナデ、一部ユビオサ エ	淡橙色	普通	普通	
	埴輪列 埴輪④	埴輪	14	円筒埴輪	口縁~底 部 (合成 復元)	底径 32cm前 後	推定高 103	口縁~体部外面-ヨコハケ、 タガ部分横方向ナデ 底部外 面-タテハケのちヨコハケ 内面-斜め~横方向ナデ、ユ ビオサエ、一部縦方向ナデ	橙赤色~ 淡橙色	やや硬	非常に粗	底部下端に半円の切 り込みあり。上から 4段目に黒斑あり 現場にて略実測した 底部から第2段目ま でと上半部を圓上で 合成復元。上半部摩 滅著しい。
	埴輪列 埴輪⑤	埴輪	15	円筒埴輪	底部	底径 19.6cm 前後	残存高 20.3cm前 後	外面-タテハケのちヨコハケ 内面-ナメナデ ユビオサ エ	橙赤色	硬	粗	現場にて略 実測及び拓本 採取。黒斑あり。

第4次調査出土遺物観察表

番号	残存部位	突帯間隔	外面2次調整	施文単位	原体巾	静止後間隔	静止後角度	原体条数	一次調整	底部付近にみられる調整	底面の状況
1	底面より 4.6cm	不明	ヨコハケ	不明	不明	不明	不明	4本/cm	不明		不明
2	第1段タガ まで	14.0	不明	不明	不明	不明	不明	不明	タテハケ 6本/cm	ナデ、ヨコハ ケ	棒状圧痕跡残 存
3	底面より 5.3cm		ヨコハケ	不明	不明	不明	不明	4~5本/cm	タテハケ 4~5本/cm		底端面付近に 木目痕、棒状 圧痕残存
14	底部~第2 段 第4段 ~口縁部	第1段(底部) 15.0 第2段、第 5~7段11.5 第8段(口縁部) 18.0	B種ヨコ ハケ	2単位か	4.5cm前 後	4.5cm前 後	L10°	6本/cm	タテハケ	取り上げを行なっていない ため不明	
15	第1段タガ まで	13.5	B種ヨコ ハケ	2単位か (底部)	取り上げを行っていないため 不明			4~5本/cm	タテハケ 4~5本/cm	取り上げを行なっていない ため不明	

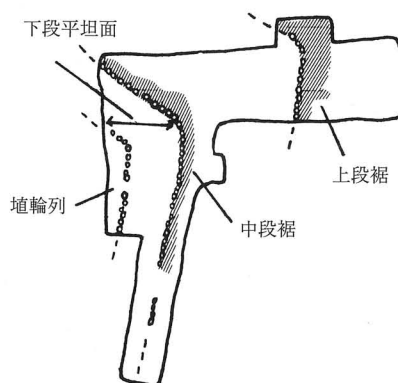
出土円筒埴輪調整一覧表

2. 第5次発掘調査概要

平成5年度に行った第2次調査で確認した西側くびれ部中段裾及び上段裾の葺石の延長を確認するために第2次調査の範囲(約50㎡)を中心に約270㎡の調査区を設定した。第5次調査の概略については1998年に報告済みであり、一部記述が重なる点があるが、出土遺物の一部の紹介と葺石の作業区画、墳丘構成層についての所見等を若干加えたかたちで今回報告しておきたい。また1998年報告時には心合寺山古墳の墳丘構造が完全な三段築成であるか判然となかったが、その後の調査で最下段裾の葺石が検出され、完全な三段築成の構造であることが判明した。このため今回の報告では前回報告時に下段裾とした部分を中段裾に、最下段平坦面とした部分を下段平坦面に修正しておく(第10図)。今回の調査では西側くびれ部の上段と中段の裾付近の葺石及び下段平坦面に樹立された埴輪列を検出した。

〔下段平坦面部分の層序〕トレンチ西端近くの南壁では地表下0.9~1.0mまでは、墳丘を削平した現代の土層であり、この下は地表下1.3~1.4mまで、瓦器小片等を含む黄灰色~茶灰色の粘性砂質土である。さらにこの下の地表下1.5~1.6m付近まで埴輪片、瓦片を多量に含む暗黄灰色小礫混砂質土層となる。この土層には7世紀後半代とみられる心合寺独自の瓦当文様をもつ単弁八葉蓮華文軒丸瓦(第12図7)が出土しており、心合寺関係の遺物を含む土層である。この土層には平安時代前期頃とみられる須恵器(第12図8)等も含まれており、平安時代頃を下限とする包含層である。下段平坦面の埴輪列内の埴輪上半部はこの土層によって削平を受けたとみられる状況であり、心合寺山古墳の西側くびれ部の下段平坦面は後円部北側の下段平坦面と同様に(第3次・第4次調査)、平安時代に削平を受けているものとみられる。この下は地表下1.7m~1.8mまで墳丘構成層と類似し、埴輪片のみを含む淡灰茶色小礫混砂質土が堆積する。これを除去すると墳丘構成層である茶灰褐色粘質土となる。

〔下段平坦面の状況〕下段平坦面は中段斜面裾の西側に幅5m以上拡がることを確認した。平坦面の標高はT.P.+28.9m~28.55mの南西下がりの緩傾斜面である。この平坦面は6m前後の幅に推定復元できることが、その後に行なった第7次調査(7区)の成果で判明した。



第10図 調査区各部位の名称

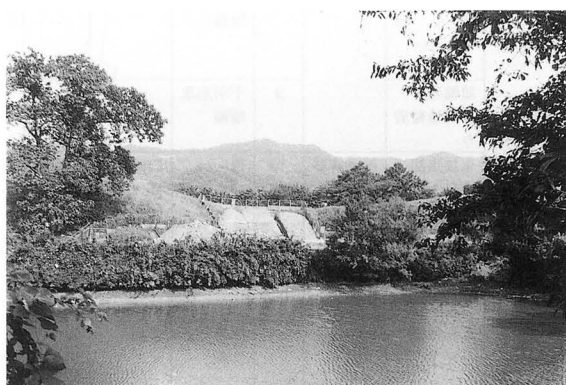


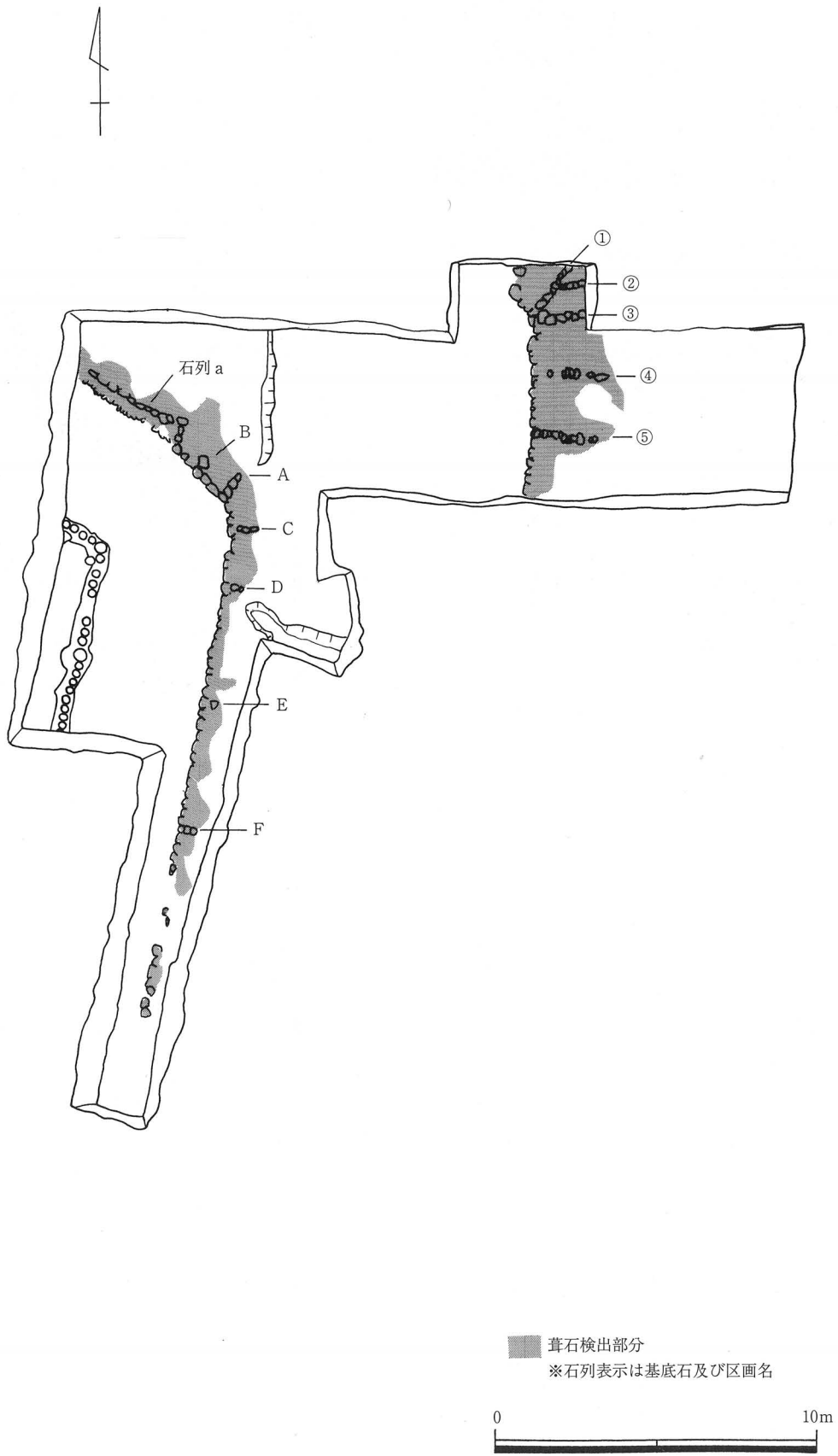
写真5-1 調査区(新池西より)



写真5-2 調査区(南西より)



写真5-3 調査状況(北より)



第11図 検出遺構模式図(1/200)



写真 5-4 壺形埴輪出土状況



写真 5-5 壺形埴輪出土状況



写真 5-6 蓋形埴輪出土状況



写真 5-7 円筒埴輪出土状況

墳丘面から10~20cm上の土層で上方からの転落とみられる埴輪片が、比較的まとまって出土する部分があった。下段裾の後円部・前方部結節点から後円部側へ1.5mの地点で蓋形埴輪の笠部の一部が、結節点から南へ3.5mの下段裾のやや西側で壺形埴輪片が、結節点から南へ6m付近で円筒埴輪の底部が転落石上で出土した。蓋形埴輪については前方部頂から後円部頂に続く平坦面上に、壺形埴輪については中段平坦面に置かれていたものが転落したものである可能性が高い。

下段平坦面上で基底石ラインに約4m前後で並行する円筒埴輪列を23個体検出した。埴輪列は6m幅の平坦面の中央付近から西寄りに樹立されている。埴輪は底部から第1段目付近のタガまでが残るものがほとんどであるが、2段目まで残る個体も若干ある。円筒埴輪は径20~25cm前後の小型品が主体であるが、後円部・前方部間結節点部分には大型品を配置し、ここから10本小型品をはさんで前方部側には大型品を配している。第3次・第4次調査では今回確認した、くびれ部下段平坦面につながる後円部北側の下段平坦面を確認しているが、ここでも小型品を10本あいに挟んで大型品を配置していた。下段平坦面埴輪列内の大型品については第4次調査で上半部が出土しており、7条突帯8段構成の円筒埴輪である可能性が高いことがわかっている。埴輪列の掘り方は溝状の布掘りで、幅は円筒埴輪の大小に合わせて設定されており、大型品の部分で幅1m前後、小型品の部分で幅0.5前後である。掘り方の深さは径0.1~0.25m前後で大型品の底部の部分は深く掘り込まれている。埴輪は底部中位付近まで埋められており、第1段タガに合わせて設定され、第1段タガが同じ高さ(T.P.+28.7m前後)なるよう設定されている。掘り方の埋土は暗茶灰褐色粘質土である。掘り方の埋土には一部に埴輪底面の下に径5~10cm前後の小石をかませている部分がある。

〔下段平坦面の墳丘構成層〕下段平坦面ではT.P.+29.5~28.9m以下で墳丘構成層を確認した。墳丘面は後円部側で高くなっている。墳丘構成層については北壁の断割り部分での確認では、T.P.+29.5m前後を上面として、T.P.+29.0m前後までは黒灰色粘土及び灰茶色粘質土をブロック状に含む茶灰褐色粘質土層等よりなり、盛土とみられる。T.P.+29.0m前後以下は黒灰色粘質土層が堆積し、これは第1次



写真 5-8 下段埴輪列(南西より)



写真 5-9 下段埴輪列(南より)

調査の後円部西側調査区の西端断割り部分でT.P. +29.0m前後以下で確認した、墳丘築造前の土層とみられる弥生時代後期包含層の黒色小礫混砂質土層と対応する土層である可能性がある。T.P. +29.0m前後以上に堆積する盛土とみられる土層は、墳丘築造前の土層とみられる黒灰色粘質土層をブロック状に含んでいることから、旧地表付近構成層を掘削して盛土を行なった痕跡を示しているものとみられる(註1)。

〔中段斜面裾〕葺石の遺存する中段斜面裾を検出した。検出した範囲は基底石で後円部と前方部の結節点から後円部側へ約5.6m分、前方側へ16m分である。葺石の遺存状況は基底石付近を中心に残っている状態であり、前方部南側については遺存状態が悪く、基底石は結節点から16m付近で途絶える。基底石は長軸長0.4～0.5m前後の縦長の石を並べる。作業は石の切りあい関係から、結節点から南側については前方部側に向かって並べられ、結節点から北側3m分は後円部側に向かって並べられている。後円部と前方部の基底石ライン結節点の角度は約 140° を測る。基底石下端の高さは標高28.9m前後を測る。区画石は結節点部分に後円部中心方向に向かう区画石が設定されており(区画石A)、ここから約1.2m、後円部側にも区画石かとみられる大きめの石がみられる(区画石B)。さらに区画石Bから約1.6m、後円部側の、結節点から3m付近で基底石の並びが一旦途絶え、径15cm前後の小振りの石が幅0.6m前後で敷き並べられる。さらにこのラインから0.5m内側に基底石と同様の大きさの石が直線的に並ぶ(石列a)。小振りの石が葺かれた後に基底石と同様の大きめの石が設定され、この大きめの石の設定作業は後円部側からくびれ部側に向かって行われている。なぜこの部分のみこのような葺き方となっているのかは、判然としない。結節点部分の区画石Aから1.2m前後、前方部側では、基底石ラインに直交して前方部頂側に延びる区画石Cが設定される。前方部側では基底石ラインに直交する区画石を3箇所(区画石D～F)確認している。葺石の遺存状況が悪いため判然としないが、本来は2m前後の間隔で区画石が設定されていたものとみられる。後円部側の葺石を葺く作業の方法は1.5m～2m前後間隔で基底石ラインに直交する方向に区画石が並べられ、区画石による区画内の葺石は基底石に向かって右下から左上方向、後円部側から前方部に向かって斜め方向に葺かれている。

〔上段斜面裾〕葺石の遺存する上段斜面裾を検出した。検出した範囲は基底石ライン部分で後円部・前方部結節点から後円部側へ約1m分、前方側へ約5.7m分である。葺石の遺存状況は基底石から最大2.5m幅で遺存しているが、調査区南側では遺存状態が悪い。結節点から後円部側に向かった基底石は3つめまでしか遺存していない。さらにこの基底石の北東側には径0.4mの大きめの石が遺存していることから、この部分は下段裾と同様に基底石部分に小振りの石が敷き詰められていた可能性もあるが、判然としない。基底石は長軸長0.3～0.5m前後の縦長の石を並べる。中段裾の基底石に比べるとやや小振りである。後円部・前方部結節点の角度は中段裾部と同様の約 140° を測る。上段裾の結節点は下段平



写真 5-10 上段裾葺石(西より)



写真 5-11 上段裾葺石(南より、左側が天)



写真 5-12 下段裾後円部葺石

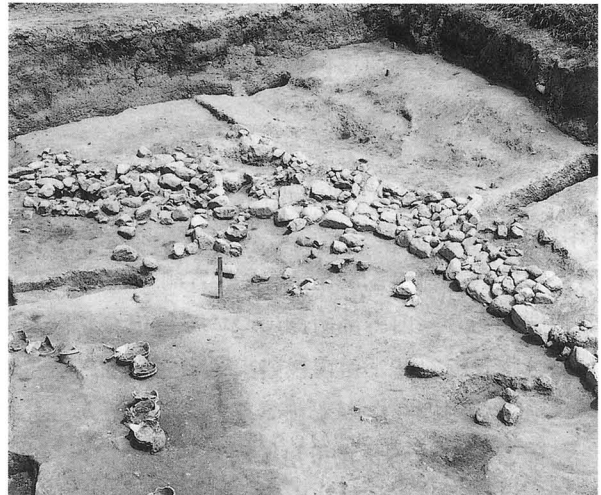


写真 5-13 下段裾くびれ部葺石

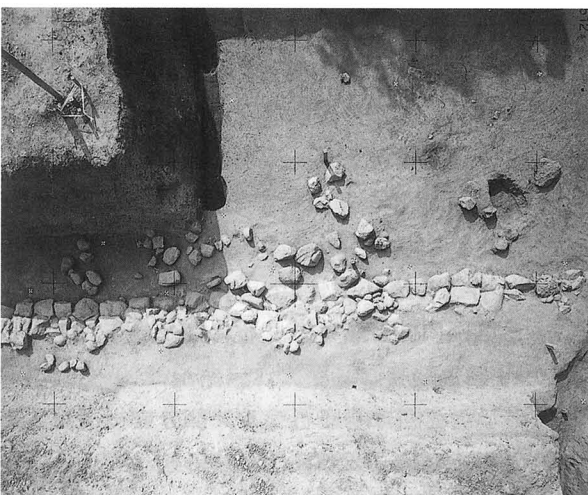


写真 5-14 下段裾前方部葺石(東より)

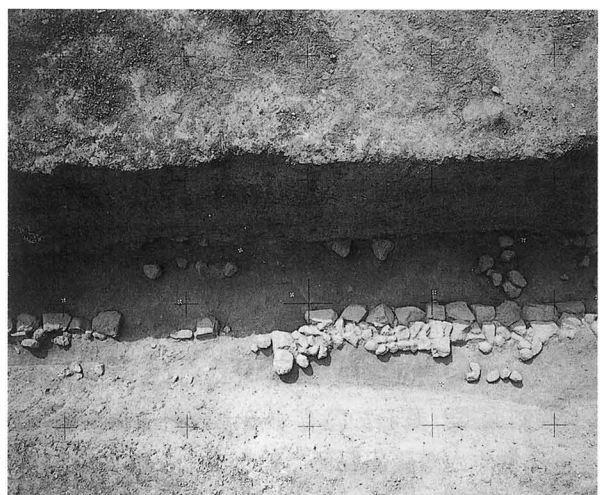


写真 5-15 下段裾前方部葺石(東より)

坦面埴輪列の結節点と中段裾の結節点を結んだラインの延長からやや南に振れるが、ほぼ延長上を意識して設定されているようである。上段裾の基底石下端の高さは標高31.9m前後を測る。基底石の設置作業は石の切りあい関係から前方部側は結節点から前方部側に向かって並べられているようだが、一部前後があるようである。

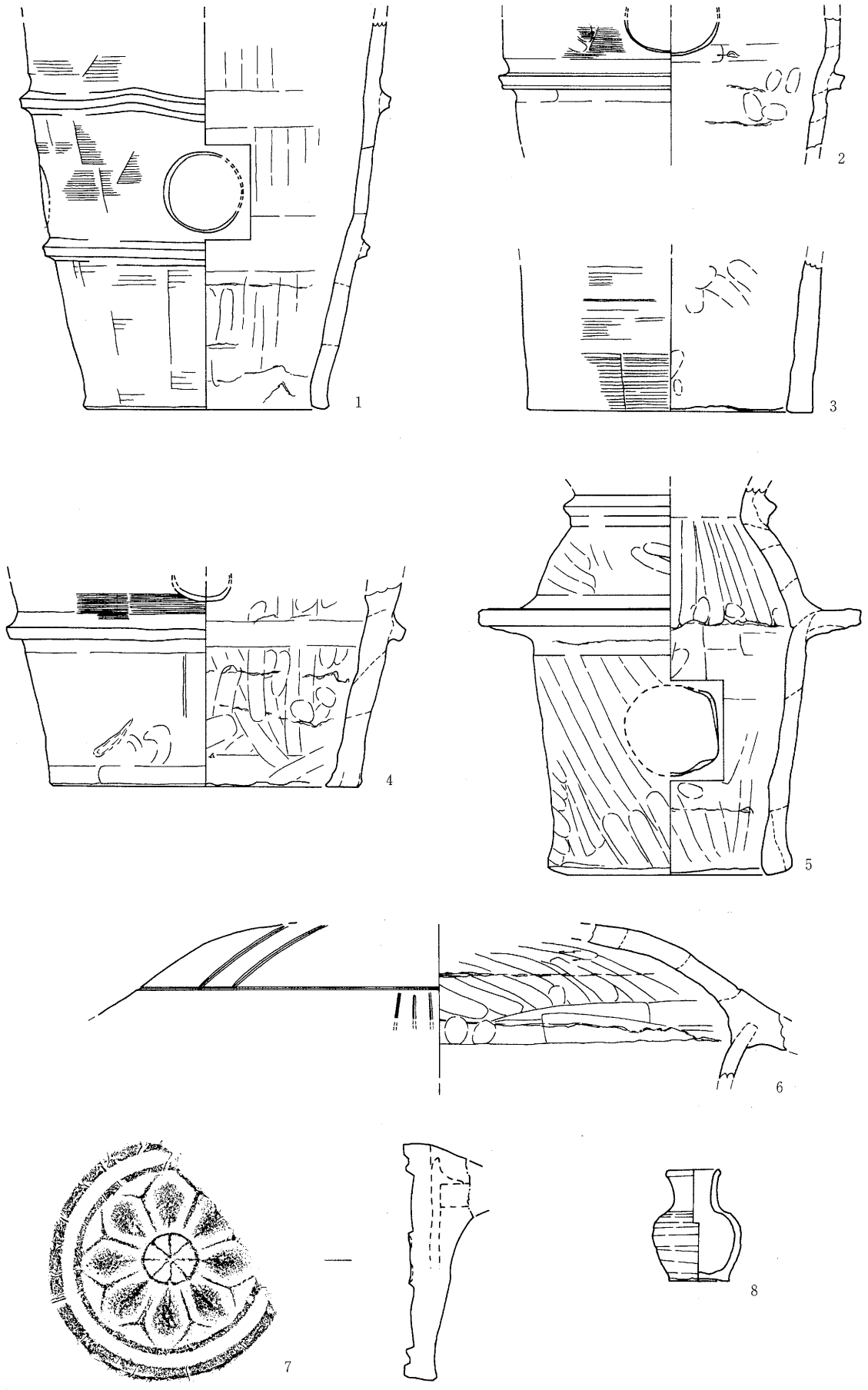
葺石を葺く作業の方法は結節点から後円部中心方向に向かう区画石(区画石①)が設定されたのちに、結節点から前方部側基底石ラインに直交方向の区画石(区画石③)が設定される。結節点から後円部中心方向に向かう区画石の途中(結節点から1.5m)付近ではさらに前方部頂側に向かう区画石(区画石②)が設定されている。結節点から前方部側へは1.9m付近(区画石④)とさらにそこから1.6m付近に基底石に直交する区画石(区画石⑤)が設定されている。区画石による区画内の葺石の葺き方は中段裾のあり方と比べてやや複雑である。いずれも中段裾よりやや小振りな石を葺いており、区画石①と②の間は基底石に向かって垂直方向に前方部側から後円部側に向かって積み上げられている。区画石②と③、区画石③と④、区画石④と⑤、区画石⑤から前方部側では基底石に向かって垂直方向に、後円部側から前方部側に向かって葺かれている。区画石内の葺石の葺き方は上段裾では基底石に向かって垂直方向に葺かれているが、下段裾では右下から左上方向に斜めに葺かれている。この違いは上段裾では葺石をほぼ小口積みに近い状態で葺いているのに対し、下段裾では葺石の大きい面を表側に向けて斜めに葺いていることによるものとみられる。

〔中段平坦面の痕跡〕 上段斜面裾に取り付く中段平坦面は削平により痕跡のみを確認した。上段斜面裾から最大幅2.3mまでが標高31.4～31.9mまでの緩傾斜面であるが、ここから西へは削平により急傾斜をなして下方に続く。この緩傾斜面上では埴輪列の痕跡すら確認できなかった。中段斜面裾の傾斜角と上段裾の高さの延長から、中段平坦面の幅は約4m前後に推定復原することができる。

〔出土遺物〕 1～4は埴輪列内の小型品の円筒埴輪である。埴輪列内の埴輪については、大半を現場で現状保存したが、遺存状態の悪いもののみは取り上げを行なった。埴輪列内の埴輪については北から順にアルファベット記号を付している。1は埴輪I、2は埴輪M、3は埴輪R、4は埴輪Sである。1、3、4はいずれも底径20cm前後である。1、4は第1段タガ上端部までの高さが12cmを計る。1は下から第2段目に円形のスカシが、3ついれられている。4方向に2つずつ対向するスカシがいれられていたものとみられる。2は第1段目タガ付近の体部片で2段目に円形のスカシをいれる。5は壺形埴輪である。底部から肩部まで遺存しており、心合寺山古墳出土の壺形埴輪のなかでは残りの良いものである。底径は13.5cmを計り、小型円筒埴輪の平均的な底径より小さい。罫の径は26.4cm、残存高26.4cmである。これと同種の壺形埴輪は西側くびれ部の中段裾付近で多く出土している。また前方部前面中段平坦面付近からも出土している。5は中段裾葺石の西側から出土しており、くびれ部の中段平坦面に円筒埴輪に載せられるなどして置かれていた可能性がある。6は蓋形埴輪の笠部である。残存最大径47cmをはかる。地元産の胎土で基礎調査報告時の分類では笠径60cm前後となる大型品のA類もしくはB類に相当する可能性がある。横方向の線刻の上位に3本一組の縦方向の線刻が、下位に3本一組の縦方向の線刻がはいる。7は下段平坦面の13層より出土した心合寺独自の瓦当文様をもつ単弁八葉蓮華文軒丸瓦である。胎土はやや粗く、地元産かとみられる。7世紀後半頃の所産とみられ、心合寺創建期頃の軒丸瓦となる可能性がある。8は7と同様に下段平坦面の13層より出土した須恵器の壺Mである。底面は糸切り痕が遺存する。平安時代前期頃の所産かとみられる。

〔まとめ〕 本調査においては、くびれ部西側の上段裾及び下段裾の葺石と下段平坦面の埴輪列を検出し、心合寺山古墳の墳丘構造を把握するための貴重な資料を得た。また、下段平坦面の下層で確認した平安時代下限とみられる土層は、心合寺関係の遺物が含まれており、下段平坦面の埴輪列はこの時期には削平を受けたものとみられる。

註1 北壁断割部の墳丘構成層の所見については、財団法人向日市埋蔵文化財センターの中塚良氏に現地を実見していただき、ご教示をいただいた。記して謝意を表します。



第12図 出土遺物実測図(1 / 4)

出土位置・出土層	種類	番号	器種	部位	径等 (cm)	高さ (cm)	調整・手法	色調	焼成	胎土	備考
円筒埴輪列 I	埴輪	1	円筒埴輪	底部	底径 16.6	残存高 26.5	外面-ヨコハケ、タガ付近横方向ナデ 内面-ユビオサエのち斜め方向ナデ	橙色	やや軟	粗	底端面付近に棒状圧痕残存 第2段目にスカシ、3箇所あり。
円筒埴輪列 M		2	円筒埴輪	体部	最大径 24.0	残存高 9.0	外面-ヨコハケ、タガ付近横方向ナデ 内面-ユビオサエのち横方向ナデ	橙赤色	軟	粗	黒斑あり
円筒埴輪列 R		3	円筒埴輪	底部	底径 19.6	残存高 10.3	外面-ヨコハケ 内面-斜め方向ナデ、横方向ナデ	淡橙色	硬	粗	底端面付近に棒状圧痕残存
円筒埴輪列 S		4	円筒埴輪	底部	底径 21.0	残存高 14.0	外面-ヨコハケ、タガ付近横方向ナデ 底部付近 不定方向ナデ 内面-ユビオサエ、縦方向ナデ、横方向ナデ	淡橙色	やや硬	粗	底端面付近に棒状圧痕残存
前方部中段裾西側16層		5	壺形埴輪	肩部~底部	底径 13.5 鍔径 26.4	残存高 26.4	外面-斜め方向ナデ、タガ付近、鍔付近 横方向ナデ 内面-縦方向ナデ、横方向ナデ、ユビオサエ	暗橙色	硬	粗	底端面付近に棒状圧痕残存
前方部中段裾西側16層		6	蓋形埴輪	笠部	最大残存径 47.0	残存高 10.0	外面-ナデ 内面-笠縁部 横方向ナデ 笠肩部 斜め方向ナデ、横方向ナデ ユビオサエ	橙色	普通	粗	外面摩擦著しい
前方部中段裾西側16層	瓦	7	単弁八葉蓮華文軒丸瓦	瓦当部	瓦当径 15.7	残存長 4.9	瓦当部上面・下端面-ヘラケズリのち横方向ナデ 瓦当部~丸瓦部時上面外面-ユビオサエ、ナデ 内面-不定方向ナデ	淡暗灰色	普通	やや粗	
下段平坦面上埴輪列東側	須恵器	8	壺M	完形品	口径 3.5 底径 4.2	全高 7.7	体部外面-ロクロヘラケズリのちロクロナデ、底部付近斜め方向ナデ 口頸部外面~内面-ロクロナデ 底面-糸切り痕残存	暗灰色	非常に硬	やや粗	

第5次調査出土遺物観察表

番号	残存部位	突帯間隔	外面2次調整	施文単位	原体巾	静止痕間隔	静止痕角度	原体条数	一次調整	底部付近にみられる調整	底面の状況
1	第2段タガまで	第1段12cm 第2段10cm	B種ヨコハケ	第1段1単位 第2・3段2単位	8.2~9.0	3.2~4.5	第1段R 3~5° 第2段R 20~25° 第3段R 30~35°	6~8本/cm	不明	ユビオサエ、ナデ	棒状圧痕残存
2	第2段タガ付近のみ	不明	B種ヨコハケ	不明	不明	不明	R20°	8本/cm	不明	不明	
3	底面より10.3cm		B種ヨコハケ	2単位か	4.5cm前後	不明	不明	6本/cm	不明		棒状圧痕残存
4	第1段タガまで	12.0	B種ヨコハケ						不明	横方向ナデ	棒状圧痕残存

出土円筒埴輪調整一覧表

3. 第6次発掘調査概要

第6次調査は、後円部及び前方部の墳頂平坦面における墳丘面の遺存状況、特に埴輪列の位置及び埋葬施設に関連する遺構の位置確認を主な調査の目的とした。調査期間は、平成10(1998)年7月1日～10月30日である。調査区域は、墳頂平坦面ほぼ全域とし、調査面積は、約510m²を測る。前方部及び後円部とも、史跡指定以前は畑地や里道として利用されており、特に後円部墳頂平坦面と前方部の墳頂平坦面東側の墳丘遺存状況については、不安がもたれていた。

主な調査概要は、『史跡心合寺山古墳第6次発掘調査概報(八尾市教育委員会1999)』に記載したとおりである。今回は、前方部と後円部に分けて、新たに明らかになった点も含めて記述することにする。

(1) 前方部墳頂平坦面(図版10)

〔南北方向の埴輪列の概要(墳頂平坦面西側 南北埴輪列)：第13図・写真6-1～6-8〕

第6次調査で検出した埴輪列は、第1次調査で確認した前方部墳頂平坦面の南端を東西方向に伸びる埴輪列が、西端隅で北に屈折して、墳頂平坦面の西端をくびれ部、後円部に向かって続く南北方向の埴輪列である(写真6-2～6-4)。

埴輪列の検出状況 東西埴輪列から屈折するコーナー部分付近の埴輪は流出していたものの、検出した南北埴輪列は、一直線に樹立され、距離にして約28.5m続く。さらにその延長を確認するために調査区北側3箇所には拡張区を設定した。しかし、埴輪列は、調査区のすぐ北側の拡張区までしか続かず、北側以降は墳丘面が削平されていたために、検出することができなかった。但し、中央部の拡張区では、南北埴輪列の延長にあたる地点で円筒埴輪基底部の一個体分の破片を確認しており、少なくとも前方部墳頂平坦面には埴輪列が樹立されていたことが明らかとなった。

そして、第6次調査で検出した西側南北埴輪列と対になる、削平が著しいと考えていた東側南北埴輪列の一部を第8次調査(「5. 第8次発掘調査概要：5区～7区」を参照)で確認でき、前方部から後円部に向かって埴輪列が、墳頂平坦部面の縁辺に平行して台形状(東西埴輪列と南北埴輪列の屈曲角約88



写真6-1 埴輪列調査風景



写真6-2 埴輪列検出状況(その1：北から)



写真6-3 埴輪列検出状況(その2：南から)



写真6-4 埴輪列検出状況(その3：南から)

度)に樹立されていたことが明らかとなった。

この台形状に樹立された埴輪列の南端内側中央部で、「方形壇(方形壇状遺構)」を検出しているが、他の方向の埴輪列や埴輪の樹立は確認できなかった。

埴輪の出土状況 約28.5mにわたる埴輪列は、円筒埴輪がほぼ近接して樹立されており、円筒埴輪の個体数は約95個体を数える。円筒埴輪以外には、朝顔形埴輪、蓋形埴輪が出土している。その他の種類の形象埴輪は確認できなかった。

約95個体の円筒埴輪は、地表下0.3m前後で表土と流入土の直下にほぼ原位置で出土している。但し、西斜面側に倒れこんでいるものがほとんどで、各埴輪の破片も斜面側に散らばっている。ほとんどの円筒埴輪が、基底部から第2段まで残存している。幸いにも列中の円筒埴輪は、後世にほとんど抜かれておらず、残存状況は良好である。埴輪を据えるための掘り方は、ほとんどが流出しているが、一部北側で埴輪より若干幅の広い溝状の掘り方(幅約0.5m)を確認している。南北埴輪列は南端では、T.P. +38.5m付近で検出でき、検出した北端ではT.P. +36.5m付近で、高低差は約2mあった。

これら円筒埴輪は、1m四方に設定したグリッドごとに取り上げた流入土中の埴輪片と南北埴輪列の南端から円筒埴輪ごとに番号を付け(NS 1～と呼称)、サンプルで取り上げた埴輪以外は現状保存を行い、取り上げを行わなかった。それでも出土した埴輪片はコンテナにして約30箱を数えた。

埴輪配列 埴輪列の復元は、現地での観察と出土した埴輪やサンプルの埴輪等により検討を行っているため、現状では充分とはいえないが、基本的に円筒埴輪約8～9本おきに1本の間隔で朝顔形埴輪が樹立されていたと考えられる(写真6-7)。一部配列に規則性を持たない部分があり、必ずしも埴輪列約28.5m間でも、埴輪が古墳造営当初から現在に至るまでそのまま樹立しているのではなく、古墳造営後の埴輪の並び直しや交換といった作業があったと考えられる。これは埴輪樹立の作業工程や古墳造営期間等に検討の必要があり一概には言えず、今後の検討材料として指摘するにとどめておきたい。

埴輪列の外側約80cmには掘り方から遊離しているものがほとんどであるが、原位置を保つ底径約30cm



写真6-5 前方部調査風景(その1)



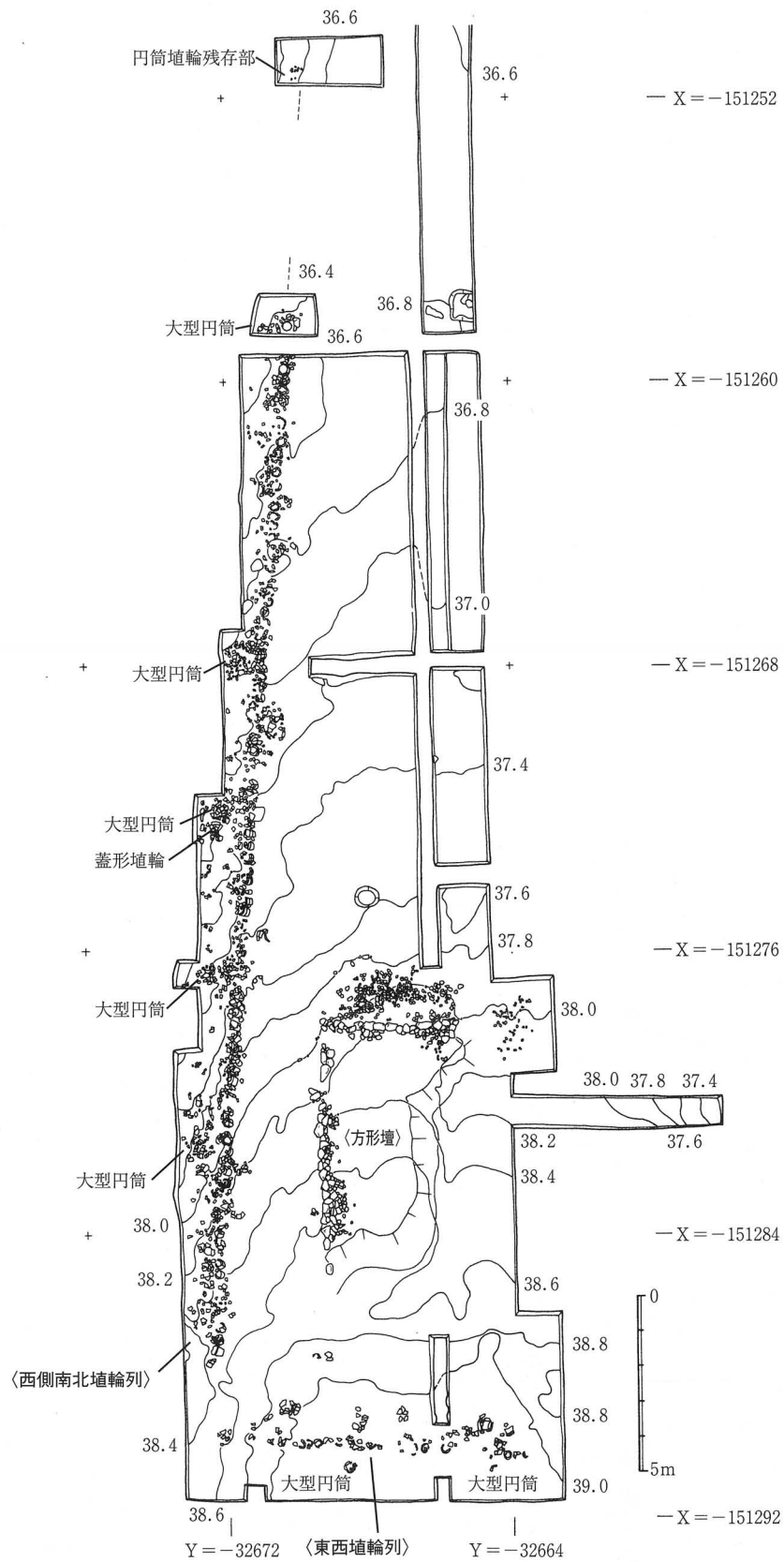
写真6-6 円筒埴輪出土状況(その1)



写真6-7 円筒埴輪出土状況(その2)



写真6-8 大型円筒埴輪と蓋形埴輪



第13図 前方部墳頂平坦面遺構検出図(S = 1 / 200)

前後の大型円筒埴輪が約4.5m間隔に配置されており、5個体分を確認している。周囲には蓋形埴輪が出土しており、これらは大型円筒埴輪上部に重なるためのものであったと考えられる(写真6-8)。

〔前方部墳頂平坦面の主な出土遺物の概要：第18図・写真6-9～6-13〕

土師器・瓦 埴輪以外の出土遺物はほとんど確認できなかったが、倒壊した円筒埴輪に混じって瓦、黒色土器、土師皿、瓦器の破片が出土している(写真6-9)。これらは、古墳造営以降に、前方部墳頂平坦面の利用や埴輪列が埋まった時期を示す資料となる。直接関連する遺構は検出できなかったが、心合寺山古墳の墳丘は、白鳳時代から奈良時代には「心合寺」の寺域にあったと考えられ、その後は中世の墓地等として利用された可能性がある。近年では墳丘全体が耕作地として利用されていた。

円筒埴輪 南北埴輪列の円筒埴輪や朝顔形埴輪、蓋形埴輪など、取り上げを行った埴輪は、現在整理中であるため、今回は接合の進んだ埴輪についての概略を記載することにする(第14・15図・写真6-11～6-13 参照)。

円筒埴輪は、川西編年のⅢ期の特徴を示し、B種ヨコハケを主体としているが、その単位・調整方法はいくつかに分類できる。また、タテ方向のナナメハケ調整のみの埴輪も散見する。焼成は、すべてに黒斑が見られ、野焼きである。タガは、台形状もしくはやや偏平な台形状を呈しているが、わずかに突出した方形のタガを持つものが見られた。

円筒埴輪は、埴輪列南端から番号をつけた埴輪(NS-)のうち、サンプルで取り上げ、底部が完存し、最下段以上が復元できた円筒埴輪についての概略を記載する(写真6-11)。

NS9は、底径約13.5cmを測り、最下段の調整はタテハケである。写真は底部のみであるが、上部各段の破片が口縁まであり、スカシは、4段目が三角形(先端がやや半円ぎみ)で、2段目が円形である。4条突帯5段構成に復元できる。器高は59.5cmとなる。外面調整は、各段タテハケ調整で、古い要素をもつ円筒埴輪である。NS21-22外側(第14図1)は、埴輪列外側に配置された円筒埴輪で、底径約32cmを測り、列中の円筒埴輪より大型品である。最下段のB種ヨコハケ調整を行うにあたって、基準線となる条線が引かれていた。NS28は、底径約21cmを測り、底部高は約14.5cmとなる。2段目の円形スカシが、一方のみ穿孔されている。色調は白黄橙色を呈す。NS34は、底径約21cmを測り、底部高は約14cmを測る。NS44は、底径約21cmを測り、底部高は約10cmとなる。NS55は、底径約21cm、底部高約13.5cmとなる。方形スカシが、3段目と4段目に続けて穿孔されている。上部は不明であるが、朝顔形埴輪になる可能性がある。列中の円筒埴輪は、ほとんどが底径約21cm前後に決められていたようである。

朝顔形埴輪は、列中に配されていたNS12(第14図2・写真6-12)は底部から頸部までで、残存高65cmを測る。底径は約20cmであった。5条突帯6段構成である。笠部は残存していなかった。頸部にはヘラ記号が見られた。また、別個体であるが、半円形スカシが朝顔形埴輪にみられる(写真6-12右)ことがあり、これらの種類に古い要素として残されていたと考えられる。

形象埴輪 前方部墳頂平坦面で使用が確認できた形象埴輪で、唯一内容が明らかな蓋形埴輪(写真6-10・6-13)は、立ち飾り部(第15図1：立ち飾り1枚の幅29cm)と笠部(第15図3：器高約43cm・底径約23cm)とが分離して製作されている。笠部には線刻がほとんど見られず、笠端部の笠表現に横方向の線刻

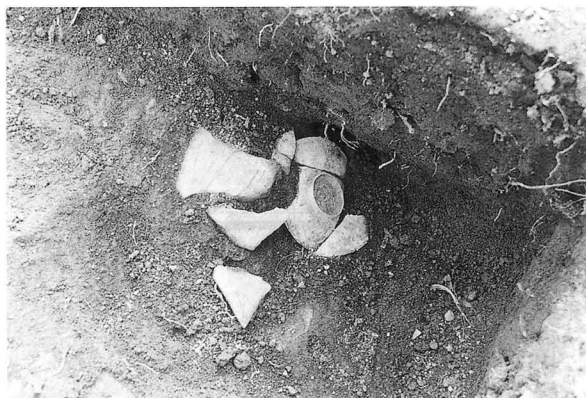
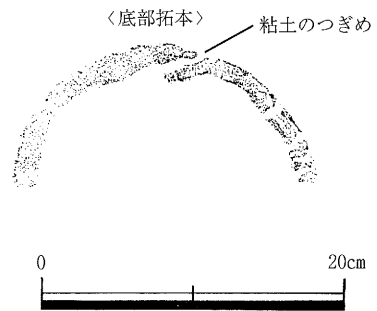
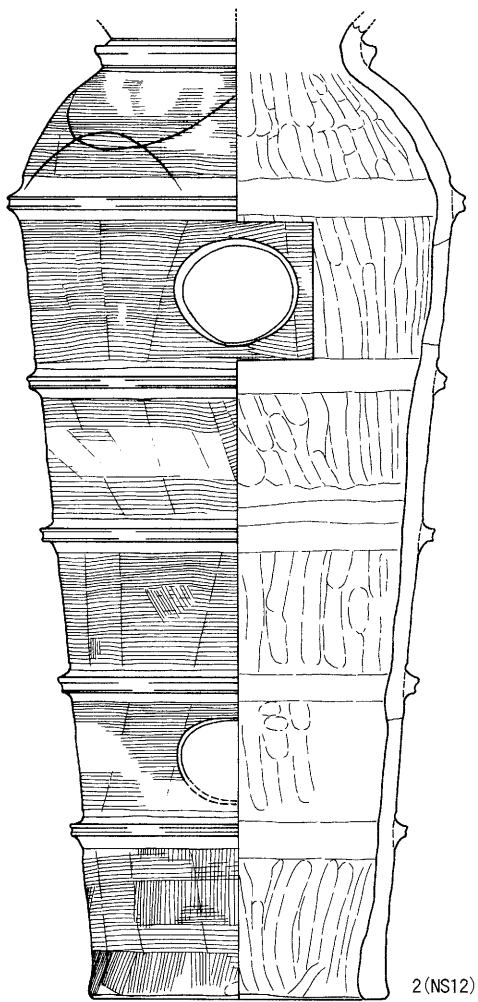
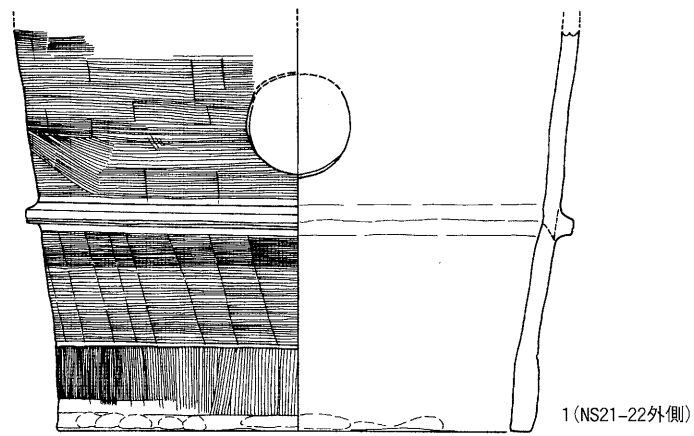


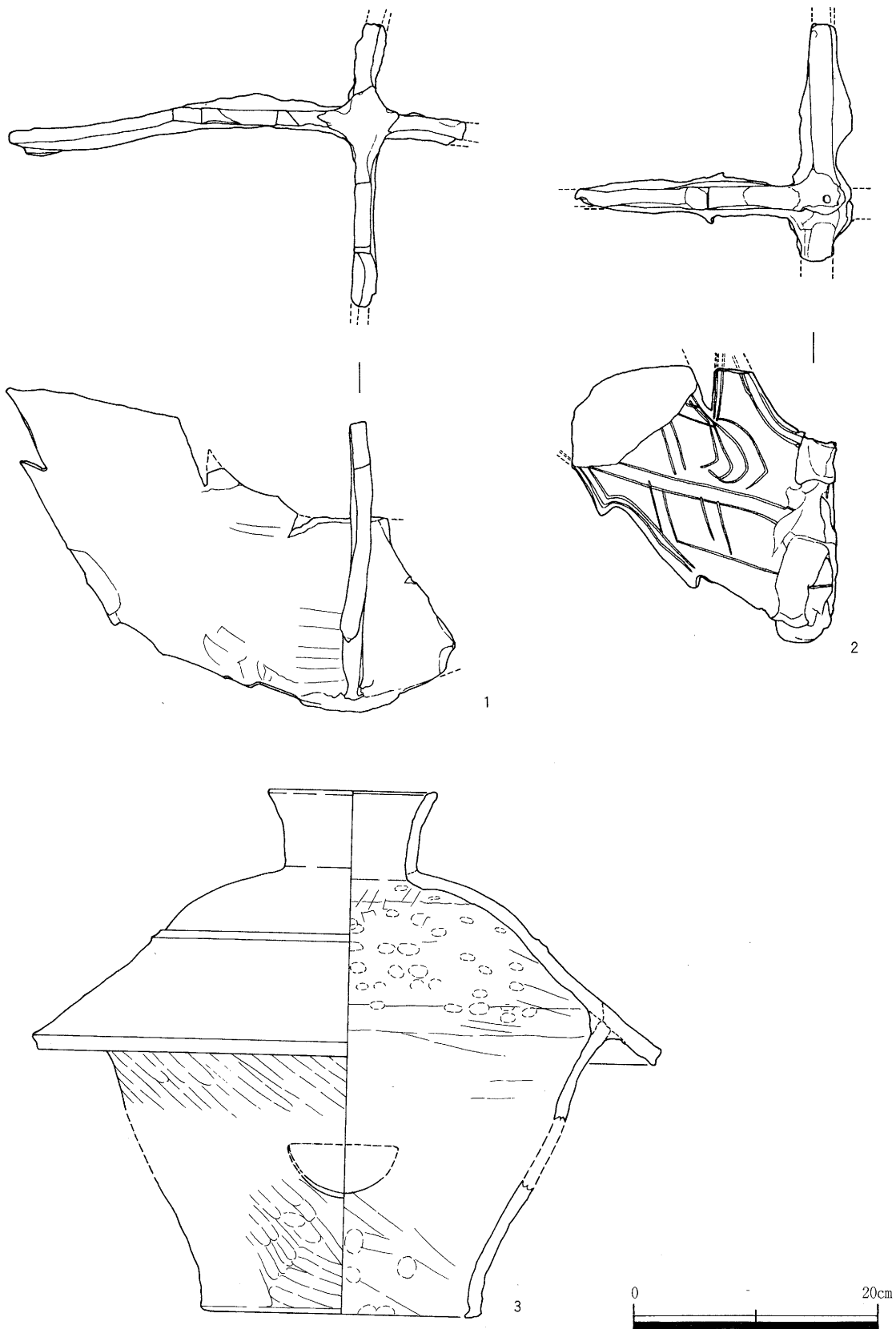
写真6-9 黒色土器出土状況



写真6-10 蓋形埴輪出土状況



第14図 円筒埴輪実測図(S = 1 / 5)



第15図 蓋形埴輪実測図(S=1/5)



NS9



NS21-2外側



NS28



NS34



NS44



NS55

写真 6 -11 前方部墳頂平坦面の円筒埴輪

がわずかに見られるのみであった(第15図3・写真6-13:3)。その他、笠下半部を表現する縦方向の線刻が見られるが、全体的に線刻について省略されたものが多い。笠部中央突帯は、台部上方に位置している。軸受部の口縁は、直立し、わずかに外反する。笠台部のスカシは半円形である。

立ち飾り部の文様には、全く無紋のもの(第15図1・写真6-13:1)と線刻を施すもの(第15図2・写真6-13:2・写真同右下)との2種類あることがわかっている。笠部と立ち飾り部に線刻が見られないものがセットとなっていた。また、立ち飾りの線刻についても数種類あり、分類が必要となろう。

【参考文献】松木武彦 1992「蓋形埴輪の形式と範型」『究班－埋蔵文化財研究会15周年記念論文集－』

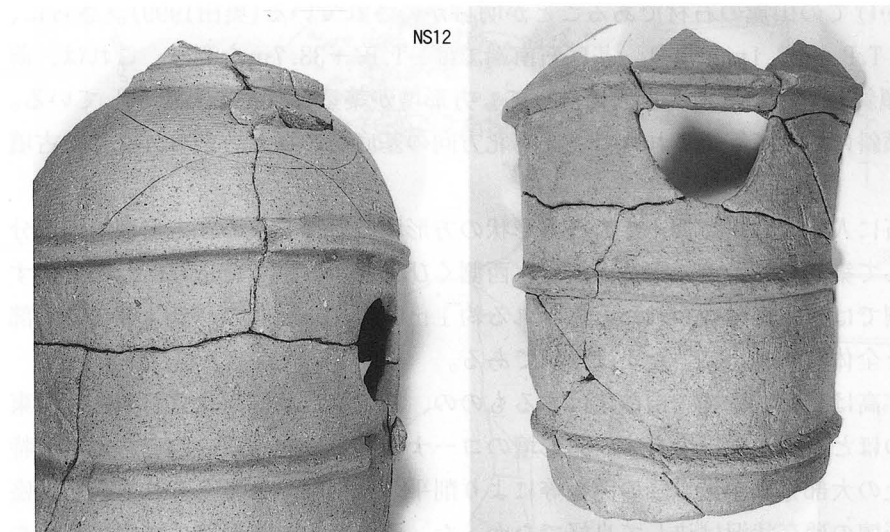


写真6-12 前方部墳頂平坦面の朝顔形埴輪

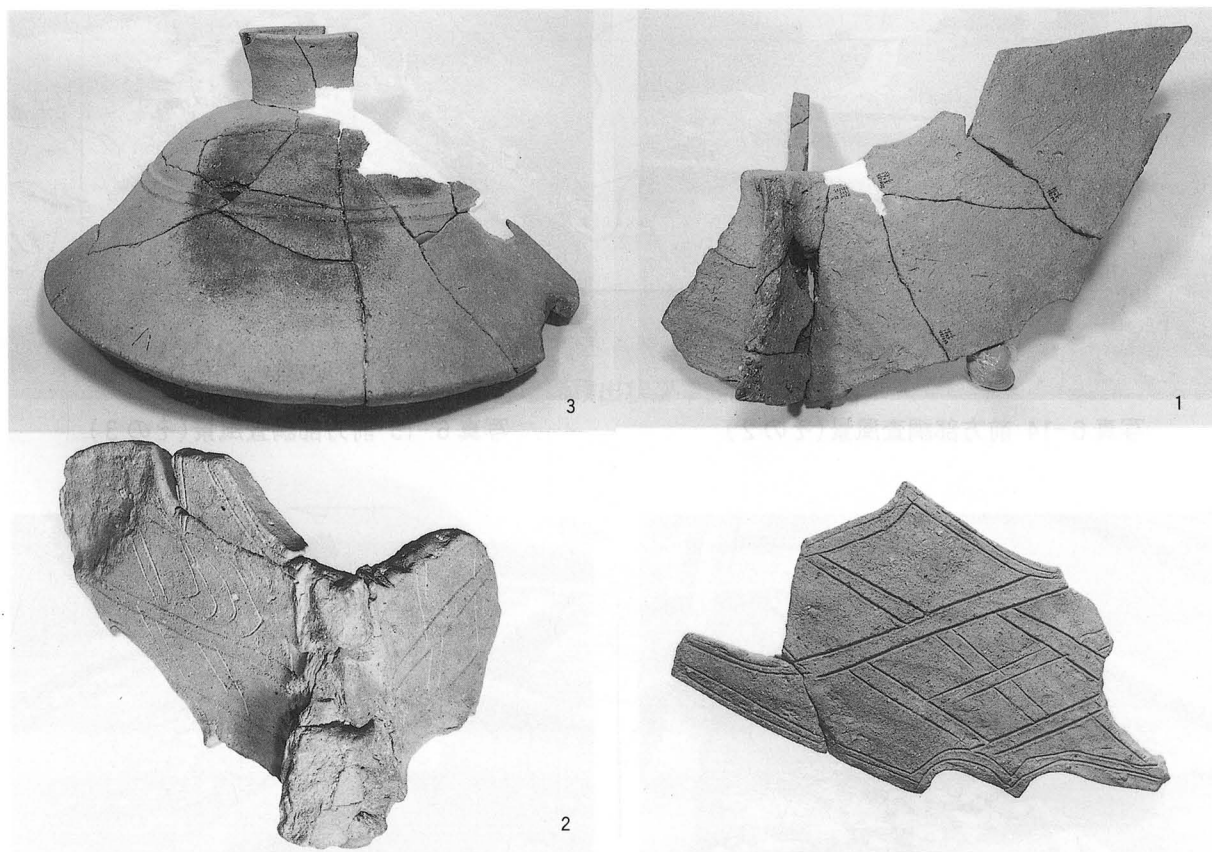


写真6-13 前方部墳頂平坦面の蓋形埴輪

[方形壇(方形壇状遺構)の概要：第16・17図・写真6-14～6-19]

方形壇の検出状況 前方部墳頂平坦面の南端中央部の埴輪列内側で確認した遺構である。調査当初、墳頂部端に樹立された埴輪列の内側に別区画の埴輪列を想定していたが、内側に埴輪列はなく、葺石が南北方向に並び、それがさらに北西隅で屈曲して東西方向に続くことが明らかになった。調査当初は中世墓等の石組みではないかと考えた。しかし、墳丘斜面に用いた同様の石材の葺石を用いた長方形の低壇状の区画が続き、北西コーナー部分から南北に約6.4m、東西に約3.8mを測る10cm～20cm大の基底石と壇斜面の葺石の一部を検出できた。

葺石は、奥田氏の観察によると心合寺山古墳の墳丘のその他の場所で使用されている石材と同様に本墳東方の楽音寺から大窪にかけての山麓の石材であることが明らかにされている(奥田1999)。さらに、南北石列の基底石北端では、T.P. +38.1mを測り、基底石南端では、T.P. +38.7mを測る。これは、前方部から後円部に向かって傾斜していく墳頂平坦面に沿って、方形壇が築造されたことを示している。墳頂平坦面や南北埴輪列の傾斜に沿って築造されたことが南北方向の基底石の据え方から分かり、古墳に伴う遺構であると考えた。

方形壇の葺石 四方に基底石に人頭大の石を据えて、長方形の方形壇の規格を決め、方形壇斜面部分には、こぶし大の石を使用して築造した。この築造方法は、西側くびれ部で検出した造り出しと共通する。また、北側基底石の外側では壇北側に敷かれたと思われる約1m幅に10cm大弱のバラス敷きの一部を検出した。但し、方形壇を全体取り巻いていたかは不明である。

方形壇の残存状況 壇の残存高は、0.2m～0.3m前後はあるものの、検出した西側南北葺石列と北側東西葺石列以外の方形壇4辺のほとんどが検出できず、方形壇のコーナー部分のみであった。特に方形壇東側と壇上部の盛土の大部分は中世以降の開墾等により削平されたものと考えられ、葺石・盛土層は全く確認できず、方形壇の残存状況は決して良好でなかった。そのため、方形壇の本来の高さや葺石の傾斜角、上部の平坦面は不明である。



写真6-14 前方部調査風景(その2)



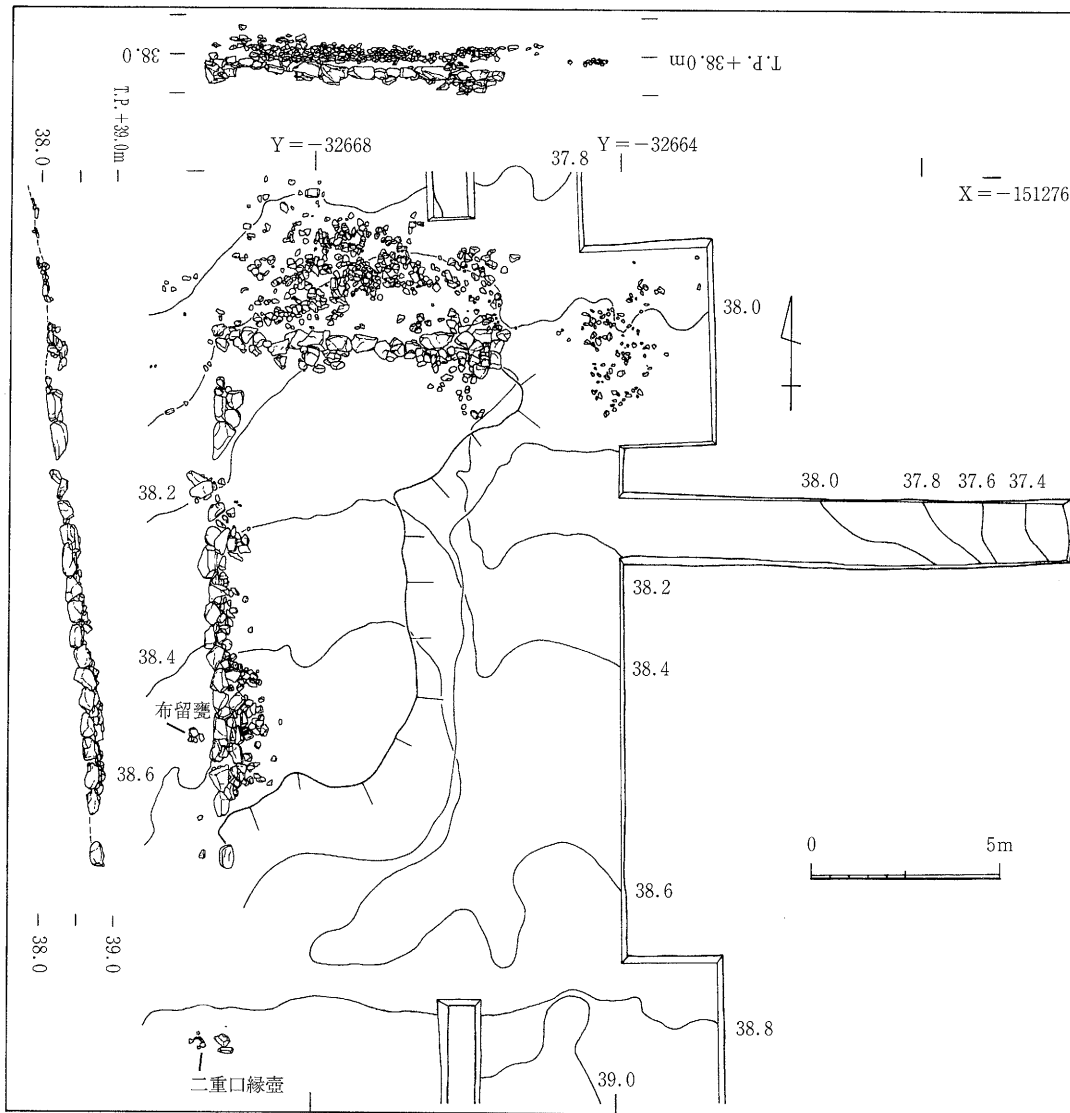
写真6-15 前方部調査風景(その3)



写真6-16 方形壇と埴輪列(南から)



写真6-17 方形壇検出状況(北から)



第16図 方形壇の検出状況平面図(1/100)



第17図 方形壇西裾土師器出土状況(1/40)

方形壇に伴う出土遺物 方形壇に伴う古墳時代の出土遺物としては、西側基底石裾で検出した布留式土器の甕体部片(写真6-18)や二重口縁壺(写真6-19)や埴輪片がある。布留式甕は、基底石裾で壇上から転落したように破片の一部が出土している。二重口縁壺は方形壇の南側基底石列の推定位置となる南西コーナー付近の流入土中から出土している。おそらく方形壇削平時に転落したものと思われる。但し、すべて破片で全容は明らかにできなかった。また、土師器、埴輪以外の出土遺物では、例えば土製品等は確認できなかった。

方形壇の性格 第6次調査で検出したこの遺構については、調査当初その性格を検討する上で類例がないため、「方形壇状遺構」と呼称していた。前方部墳頂平坦面上に設置された何らかの祭祀の場所と考えていた。その後、次年度の第7次調査に継続調査として実施した下層確認調査で埋葬施設を確認したことから、この遺構の性格が、埋葬施設の埋設後に、上部に盛土をして「壇」を築造した遺構であるが明らかとなった。そのため、「方形壇状遺構」は、今後、埋葬施設の上部構造として「壇(埋葬施設の明示・祭祀の場)」の性格をもつことを含めて、「方形壇」と呼称することとする。下層の埋葬施設の詳細等については、次章の第7次発掘調査概要(1区)の部分で述べることにする。

【参考文献】

奥田尚 1999「心合寺山古墳の葺石の石種とその採取地」『史跡心合寺山古墳第6次発掘調査概報』八尾市文化財紀要9

〔方形壇の主な出土遺物の概要：第18図・写真6-20〕

土師皿 方形壇に伴わず、方形壇及びその周辺で出土した遺物は、ほとんどが小片の土器ばかりで、現位置を保つものはほとんど確認できなかった。唯一、方形壇削平部分南側中央の流入土中から、方形壇の削平時期を示す完形の土師皿が出土している(第18図1~3)。土師皿(1・2)は、土壌の掘り込み等は確認できなかったが、2枚が重ねられて出土しており、おそらく3枚とも方形壇削平部分に埋置されて、同じ流入土で埋め戻されたと考えられる。土師皿は、すべて直径約8cm前後の小皿で、調整はほとんど省略されており、外面の底部調整は手づくねである。内面、口縁端部のみヨコナデ調整である。口縁は丸く仕上げられている。時期は近世である。

土師器 方形壇に直接関連する古墳時代の遺物には、方形壇西側基底石裾で出土した布留式甕体部の約1/3(第18図4)と方形壇削平部分南側の方形壇南西コーナー(推定)付近から出土した二重口縁壺の口縁部~頸部の約1/2弱(第18図5)、有段口縁壺の口縁部などの土師器片がある。

布留式甕(4)は壇上から転落した土師器で、おそらく壇上で使用されていた土器の一部である可能性が高い。外面はヨコハケを基本とし、一部不定方向のやや粗いハケ調整である。内面はユビナデで、ユビオサエ痕が顕著である。口縁部、頸部は確認できなかった。やや厚手の器壁で、体部全形は不明であるが、やや上方に肩部が張り、球形化している。

二重口縁壺(5)は、直径18.3cmの口縁部と頸部~体部の一部が出土している。外面は細かいハケ調整である。内面は、ユビナデである。頸部から口縁部にかけてゆるやかに直立する部分は短く、約1cmの



写真6-18 方形壇布留式甕出土状況

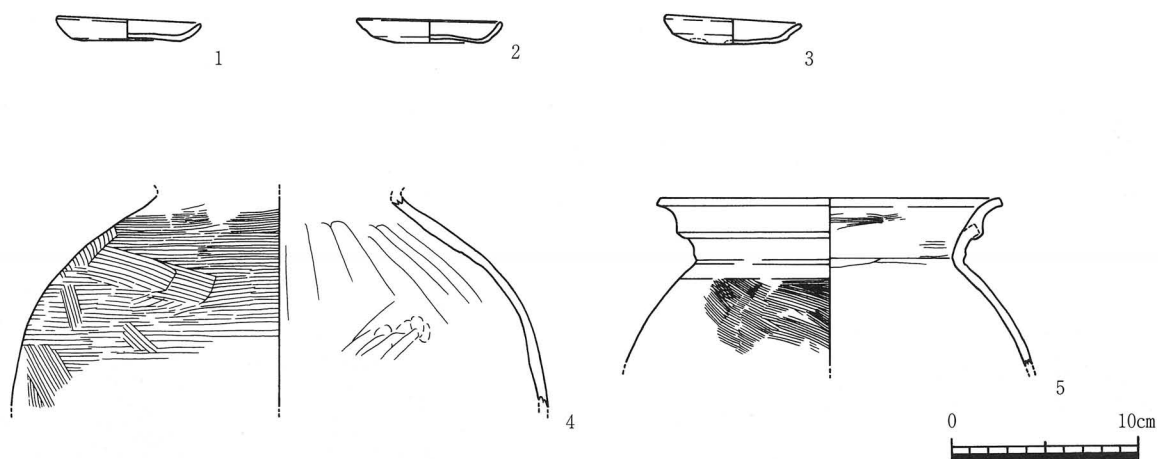


写真6-19 方形壇二重口縁壺出土状況

高さである。口縁有段部がわずかに張り出し、やや上方に伸び短く外反する。二重口縁部の受部と口縁部の高さの比率は、ほとんど変わらない。口縁部は、二重口縁の受部を製作した後、二重口縁上部を貼り付けて製作したものと思われる。

これらの土師器は、方形壇削平部分の流入土中からの出土で、墳丘構成層(古墳盛土)に含まれていた土器ではない。布留式甕、二重口縁壺ともに、方形壇上で行われた葬送儀礼等で使用された土師器の一部であると考えられる。古墳時代前期以降、埋葬施設上で使用されてきた土師器の器種構成、方形壇の築造・使用年代を考える上で興味深い資料である。

埴輪類 方形壇の削平が著しく、壇上や壇周囲に掘り方等の埴輪樹立の痕跡は確認できなかった。また、顕著な形象埴輪や円筒埴輪の出土は確認できなかったが、わずかに円筒埴輪の破片が出土している。但し、特に円筒埴輪の破片が集中して出土した場所もなかった。そのため、円筒埴輪が方形壇の周囲や壇上に並べられていた可能性があるものの、その使用状況や配置場所は明らかにできなかった。家形埴輪などの形象埴輪が配置されていた可能性は低いと考えられる。



第18図 方形壇出土の土師器(S = 1 / 4)

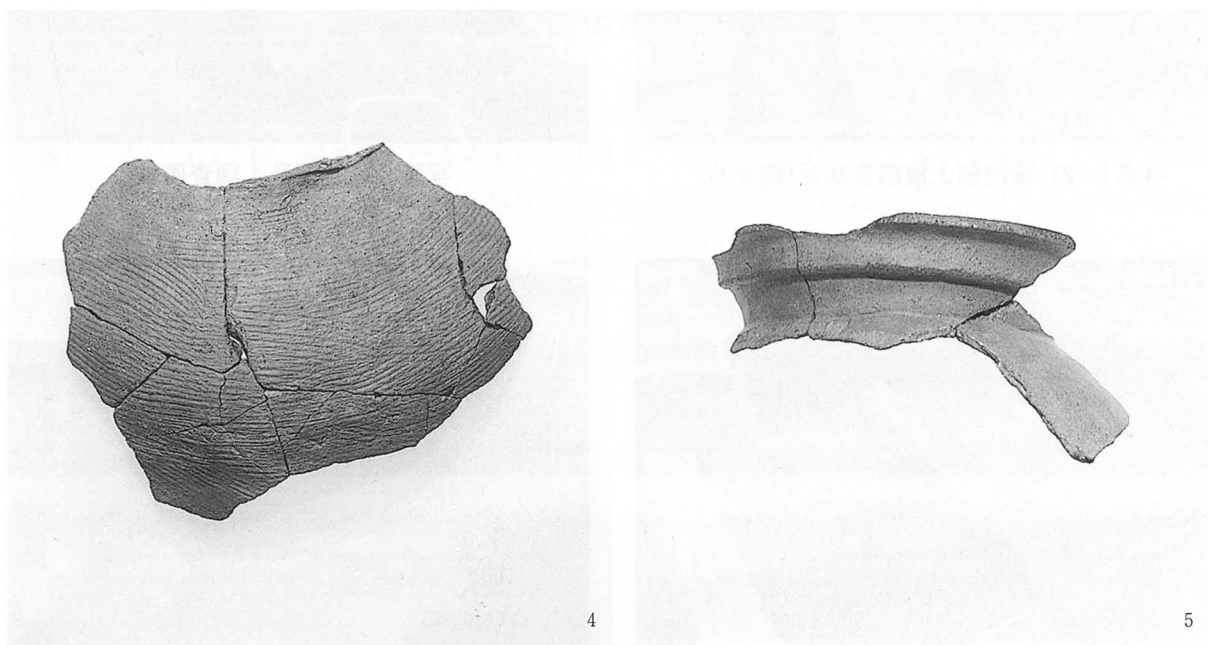


写真 6-20 方形壇出土の土師器

(2)後円部墳頂平坦面

[墳頂平坦面の概要(古墳造営以後)：第20図・写真6-21・6-22]

心合寺山古墳造営以後の状況 心合寺山古墳は、精美な前方後円墳形をしているものの、墳丘全体が畑地として利用されていた時期があるなど、各段築面は削平を受けている。現況でも特に東側墳丘の削平は著しい。後円部墳頂平坦面でも同様に現況では平坦に見えるものの、東側中央部にはコンクリート布基礎の一辺約3.5mの小屋等が建てられていた(写真6-21)。近年(時期不明)、この建物を建設するときには墳頂平坦面を整地したようで、墳頂平坦面は大きく広がっている。後円部墳頂平坦面にあったと考えられる埴輪列は、削平が著しいため確認できなかった。

そして、コンクリート基礎内中央部には直径約2.5m、深さ約1.9mの隅丸方形の大きな攪乱(攪乱1と呼称：写真6-22)があった。これにより後述するように主体部に関する情報は得られたものの、結果的には西槨を大きく破壊していたことが明らかとなった。また、この攪乱1に先行して、平坦面中央には直径約2mの攪乱(攪乱2と呼称)があり、中央槨を破壊していることが明らかとなった。この攪乱は土師皿の破片等を埋土に含んでおり中世以降に掘られた盗掘孔であった。また、攪乱1の南側に接する直径1m大の攪乱やその他に樹木の抜き取り痕や小さなごみ穴などが多数確認できた。

墳頂平坦面の整地作業を示すものとして、墳頂平坦面北端で検出した埴輪集積がある。埴輪集積は、表土直下に掘り込まれた直径約0.55m、深さ約0.4mの土壌の一部である。円筒埴輪や家形埴輪などの破片や小礫が含まれていた。おそらく、整地作業時に集めて廃棄したものと思われる。

[墳頂平坦面の墳丘遺存状況：写真6-23・6-24]

墳丘面の状況 先述したように後円部墳頂平坦面端に樹立された埴輪列は検出できず、また主体部を取り巻く方形区画等は検出できなかった。これらがもともとなかったのかは不明である。墳頂平坦面の流入土中や先述の埴輪集積から形象埴輪の破片が出土しているが、いずれも小片で埴輪の構成・全体像を知る資料は少ない。墳頂平坦面に建物を建てる時にかなりの整地を行っていたと考えられ、表土直下

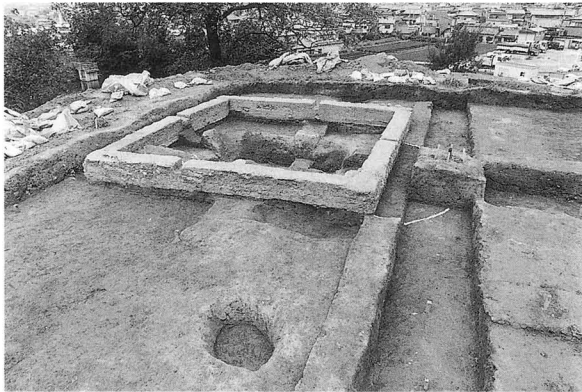


写真6-21 後円部上層調査状況(南から)



写真6-22 攪乱1調査風景



写真6-23 墓壙検出状況(西側)



写真6-24 墓壙と3基の粘土槨(南から)

に整地層らしき流入土を確認している。また、後円部墳丘裾部の調査で、墳頂平坦面で使用されていたと考えられる形象埴輪の破片が出土していることから、墳頂平坦面の埴輪はほとんどが墳丘削平時にかなりの移動をし、転落したものと考えられる。

主体部の位置 後円部墳頂平坦面の主体部構造・位置等については、基礎発掘調査時には明らかにできず、攪乱1の調査により何らかの情報が得られると期待したが、調査当初は石室構造等を示すような、石材は確認できなかった。そして、コンクリート基礎除去後、平面精査と攪乱1壁面の精査を続けたところ、攪乱1の北壁の東隅付近から朱の残る部分が現れ、礫が幅約0.5mの皿状に残っていることが確認でき、埋葬施設に関連する礫群と考えた。平面での墓壙検出面は、北側ではやや深く地表下0.5m (T.P. +39.8m) から、南側では地表下0.2m (T.P. +39.9m) 付近の浅いところであったが、T.P. +39.8m前後ではほぼ一致していた。そして、調査時の墳頂平坦面仮中心点よりやや西寄りに、東西約7.5m、南北約11mの隅丸方形の大きな墓壙らしき平面プランを確認できた(写真6-23)。但し、本来の墓壙掘削面は明らかにできなかった。

さらに、上記の攪乱を利用して、埋葬施設の位置を確認することとなった。その結果、東西に並列する3基の粘土槨(中央槨・西槨・東槨と呼称：写真6-24)であることが分かり、従来考えられていた石室・石棺構造でないことが明らかとなった。但し、粘土槨の遺存状態は、その検出高が高いために、上記の攪乱のため、特に中央槨、西槨については被覆粘土が一部削平を受けていた。

この第6次調査に引き続いて、次年度の第7次調査で埋葬施設の位置や構造の詳細を継続して調査を実施することとなった。

〔後円部墳頂平坦面の主な出土遺物の概要：写真6-25〕

円筒埴輪 墳頂平坦面の円筒埴輪は、全体を復元できる個体はほとんどなく、小片ばかりであった。埴輪列が削平されたことにより、ほとんど墳頂平坦面には遺存していなかったと考えられる。

形象埴輪 墳頂平坦面からは、家形埴輪や蓋形埴輪、草摺形埴輪などの形象埴輪の破片が出土している。墳頂平坦面に樹立された形象埴輪の原位置は確認できなかったが、種類はわずかに知ることができる。写真6-25は、第6次調査で出土した形象埴輪である。ほとんどが小片である。

1～11は、家形埴輪の部位である。2は一辺約3.5cmの三角形部分とタガ一条を一部残す。内部に三角の線刻が施されている。小片ながら圀形埴輪の山形突起と壁面上部突帯の一部の可能性もある。これらの破片から、家の種類や個数を知ることはできなかったが、比較的大きな家形埴輪が主体部上部に配置されていたことは間違いない。

12～14は、草摺形埴輪の裾部である。綾杉文の線刻が施されている。甲冑形埴輪の部位となるが、上部に続く短甲部分の破片の存在は確認できなかった。そのため、短甲部分と組み合わせ型、一体型であったか、もしくは草摺形埴輪のみであったかは明らかでない。

土器 土器については、形の復元できるものは少なく、土師器の細片がほとんどである。一部に布留式土器の破片が出土している。また、墳丘構成土中からは弥生土器の底部破片等が出土している。弥生土器については、墳丘築造時の盛土に含まれていたものと思われる。

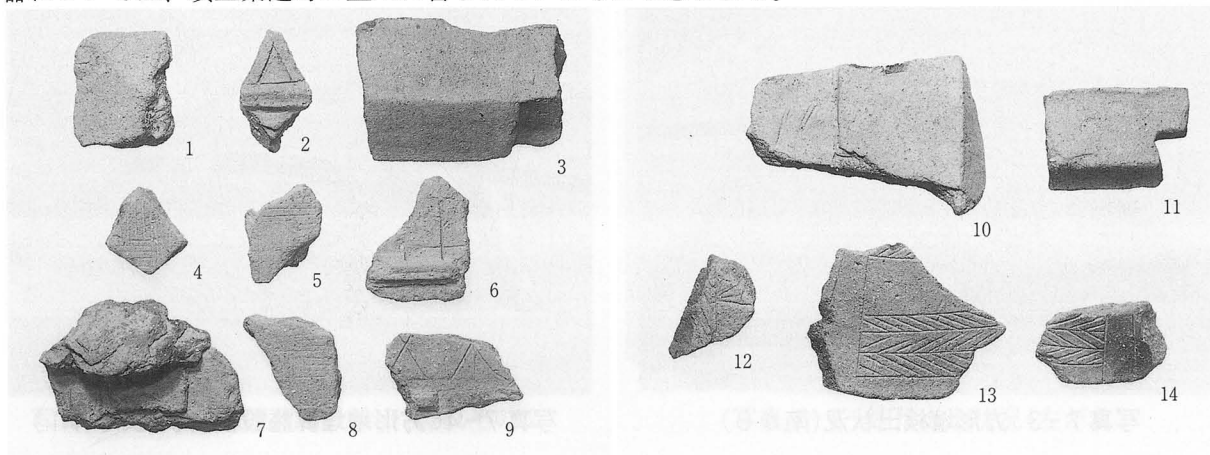


写真6-25 後円部墳頂平坦面出土の形象埴輪

4. 第7次発掘調査概要

(1) 1区(図版11上)

〔方形壇下層の調査概要：第19図・写真7-1～7-6〕

前年度(第6次調査)に検出した「方形壇(方形壇状遺構)」の追加調査として、方形壇未検出部分及び下層部分の調査を行い、埋葬施設の有無を確認した(1区)。調査面積は、約60m²を測る。

方形壇は、西側基底石列と葺石の一部から北側基底石列のコーナー部分のみを検出しており、東側のほとんどが、後世の削平が著しく葺石・盛土は残存していなかった。また、東西方向に設定した長さ6mのトレンチでも方形壇の葺石や埴輪列は確認できなかった。方形壇の復元については、墳丘主軸から折り返して反転する復元案を想定している。復元規模は、東西約5.8m、南北約8.8mの長方形の壇となる。

方形壇の下層確認 削平部分を利用して、東西及び南北方向にT字形にトレンチ(0.8m幅)を設定し、調査を行ったところ、墳丘主軸想定ラインよりやや東よりのところで南北方向に据えられた木棺の掘り方(墓壙)と木棺の痕跡を確認した(写真7-4・7-5)。

墓壙の北端側は、一部削平を受けており、調査当初、墓壙の平面プランの確認は困難であった。さらに、腐朽が著しく木棺材等は全く残っていなかったため、木棺の構造・規模は確認し得なかった。おそらく、長大な組合式木棺を直葬したものであったと考えられる。墓壙の規模は、南北約6.8m、東西約2.2mであることが明らかになった。墓壙掘削面は、方形壇の盛土の下層になり、方形壇構築後に墓壙を掘削したのではなく、方形壇は木棺埋葬後に築造したことが分かる。

内部の調査は行わなかったが、トレンチ内の落ち込み土を掘削中に副葬品の一部と考えられる長さ約0.85mの鉄刀(写真7-6：現在保存処理中)がトレンチ内中央部のやや西よりのところで露出したため、急ぎょ取り上げを行った。鋒先を南に向けている。鉄刀は南北端ともにほぼ水平でT.P. +38.0mを測る。鉄刀が棺内のどの位置に副葬されていたかは、木棺の位置、規模が不明であるため分からないが、おそ

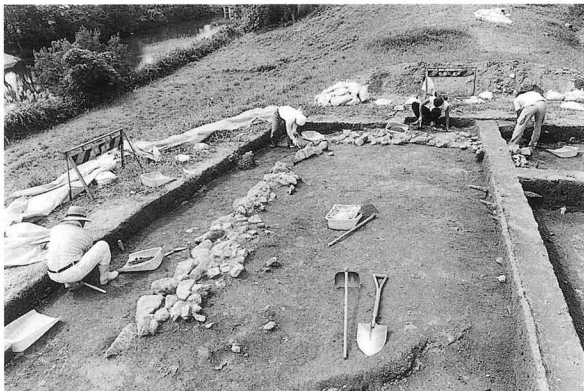


写真7-1 方形壇調査風景



写真7-2 方形壇から後円部を望む



写真7-3 方形壇検出状況(南から)

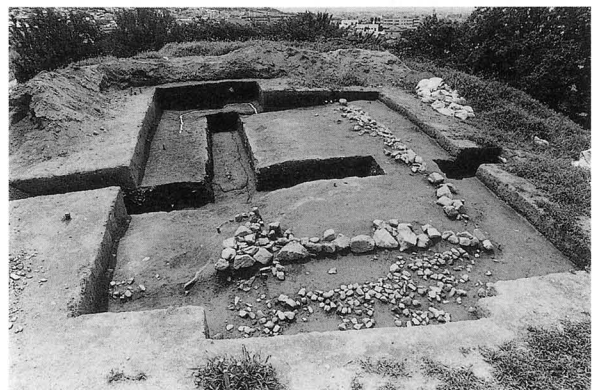


写真7-4 方形壇埋葬施設検出状況(その1)

らく人体埋葬されているならば、被葬者の胸部から腕部付近であったと考えられる。

方形壇の被葬者の性格 今回の調査結果から、木棺の構造等の十分な検討はできなかったが、前方部墳頂平坦面中央部の方形壇下層には埋葬施設1基が存在することが明らかになった。心合寺山古墳の主体部は、後円部の3器の粘土槨と合わせて、計4主体が存在していたことになる。方形壇の埋葬施設は、仮墳丘主軸からやや東よりに位置しており、また後円部と前方部の墳頂平坦面の高低差は約1mあった。その位置関係から後円部の被葬者に対しては、準ずる立場の被葬者であったと考えられる。その他の副葬品の内容等は明らかでないが、前方部にも人体埋葬の可能性のある埋葬施設があったことは方形壇の性格を考える上で注意すべきである。但し、埋葬施設の構造については今後の検討課題であるが、明らかに後円部の粘土槨よりも下位の埋葬施設構造であることは間違いないだろう。

方形壇の築造方法 後円部と前方部の主体部の時期差は不明であるが、後円部の埋葬施設完成以降に、前方部の埋葬施設設置及び方形壇構築が行われたと考えられる。

前方部墳頂平坦面そのものは、平坦面端に樹立された埴輪列が墳丘構築のどの時点で完成していたかは不明であるが、方形壇構築以前すでに完成していたと思われる。これは西側の基底石列が墳頂平坦面の傾斜に沿って据えられており、方形壇を構築するための水平面を築造していないからである。但し、古墳築造当初から前方部に方形壇の構築を予定していたかは定かではない。

方形壇の構築手順としては、まず墳頂平坦面の傾斜地に木棺を設置するために、墓壙底を水平に掘削する。木棺は、棺高・棺底は不明であるが大刀の出土レベルが水平であったことから、水平に設置されていたことが分かる。さらに、木棺を埋葬した後に墓壙を埋め戻した。そして、整地、盛土を行い、葺石を方形に区画し、埋葬施設の長軸辺に合わせた長方形壇状の施設を築造したことが明らかとなった。その後、壇上には、土器や埴輪が置かれ、何らかの祭祀行為が行われていたと考えられる。

方形壇の類例 前方部墳頂平坦面に築造された「方形壇」の発掘調査例はほとんどなく、愛知県青塚古墳の方形壇(東西9m・南北7m)があるだけである。しかし、青塚古墳では方形壇下層の埋葬施設は未確認であるものの、方形壇周囲に円筒埴輪や朝顔形埴輪が並べられており、また石列中より鍬形石製品が出土している(犬山市教育委員会2000)。また、古墳時代前期の天理市西殿塚古墳、古墳時代中期の藤井寺市誉田御廟山古墳や奈良県北葛城郡広陵町巢山古墳などの大型前方後円墳で、墳丘測量図から前方部に方形壇の存在が想定できる。これらについても、前方部墳頂平坦面における埋葬施設の存否を検討する必要がある。心合寺山古墳の方形壇は、埋葬施設上部に壇を築造していたことが重要であり、古墳時代前期のメスリ山古墳や桜井茶白山古墳の後円部墳頂平坦面において埋葬施設埋設後に築造された長方形壇を嚙矢とする祭祀用の土壇〔壇兆〕(網干1983)であったと考えられる。

【参考文献】

網干善教 1983「古墳における壇の築成について」『関西大学考古学研究室開設三十周年記念 考古学論叢』
犬山市教育委員会 2000『青塚古墳史跡整備に伴う発掘調査概要報告』



写真7-5 方形壇埋葬施設検出状況(その2)

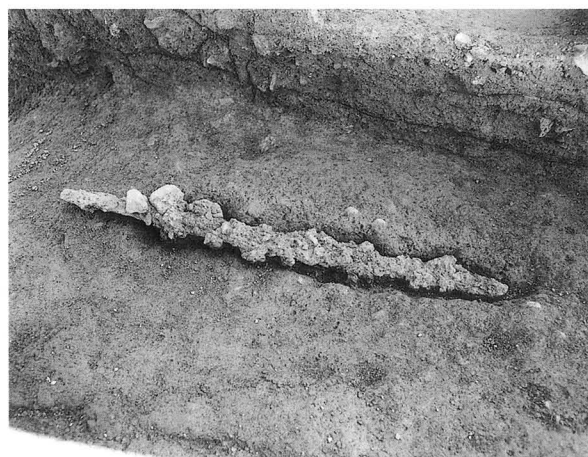
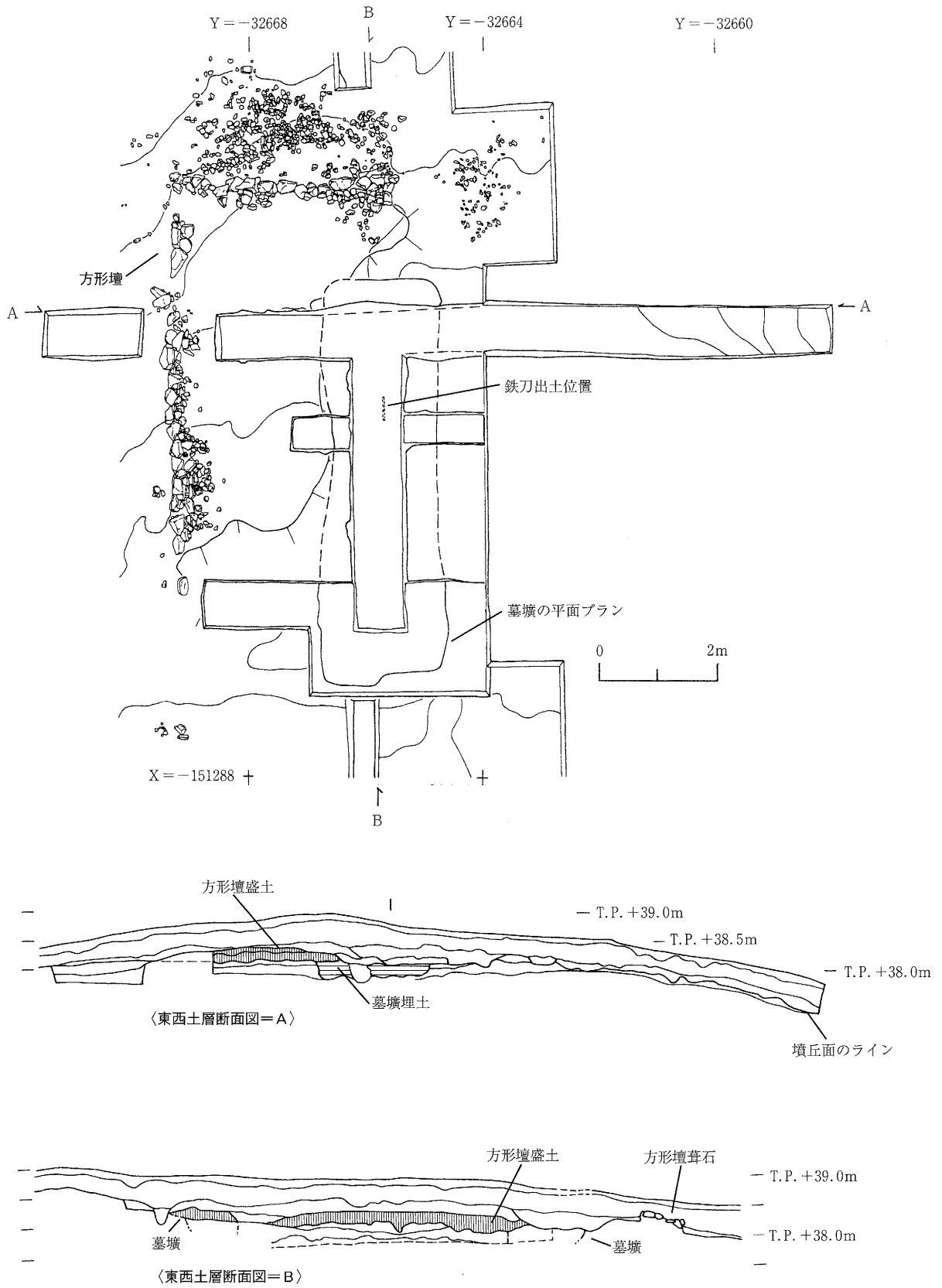


写真7-6 鉄刀出土状況(左が北)

〈方形壇下層埋葬施設検出状況〉



第19図 方形壇下層の埋葬施設の位置と土層断面図(1区・1/100)

(2) 2区

〔後円部主体部の調査概要：第20図・写真7-7～7-10・7-15〕

後円部墳頂平坦面は、西側に一辺2.5m、深さ約1.9mの近現代の大きな攪乱(攪乱1)があるなど後世の攪乱が著しく、本来の墳丘面は遺存していなかった(第6次調査で確認)。地表下0.2m～0.5m(T.P. + 39.9m～39.7m)の比較的浅い位置で、一つの墓壙と長大な3基の粘土槨の位置を確認することができた。第7次調査では、第6次調査で明らかにできなかった東槨の位置や規模、攪乱の著しかった西槨の状況や槨構築方法などの課題を明らかにすることを目的とした(2区)。調査面積は約60㎡を測る。

心合寺山古墳の主体部は、本古墳出土とされる縄掛突起片の存在から長持形石棺と想定されてきたが、第6・7次調査で後円部の3基の粘土槨(中心主体)や前方部の木棺直葬(副主体)の埋葬施設の存在が明らかになったことから、縄掛突起片が心合寺山古墳のものである可能性は低くなった。

墓壙の検出 墓壙は、墳頂平坦面の中央に位置し、東西約7.5m、南北約11mの隅丸長方形の平面形を呈す。検出面から墓壙底(T.P. + 39.0m：攪乱1で断面確認)までの深さが約0.8mあり、緩やかな2段状の掘り方である。但し、本来の墓壙掘削面の高さについては不明である。第7次調査では、墓壙内の粘土槨北端と南端に東西方向のトレンチを設定(写真7-10)し、墓壙の掘り方に沿って粘土槨の上面まで確認している。棺構築、棺の被覆など、粘土槨構築における各段階で墓壙を埋設していったと考えられ、これは墓壙が完全に埋設される直前の最終段階の状況である。

墓壙南端平坦面の性格 また、墓壙に接する南側には、高さ約0.1mほどの低い隆起部分があり、北幅約2.5m、南幅約3mのハの字状に開く平坦面がある。第7次調査では南側に東西2.5m、南北1mの拡張区を設定し、その延長を確認した。南側は一部削平されていたが、少なくとも墓壙南端から約2.5mは続く。おそらく棺埋設時や粘土槨構築時に、墓壙底まで達する緩やかな傾斜を持つ墓道(和田1997)として使用されていたと考えられる。その後、墳頂平坦面の整備に伴い、前方部から後円部の墳頂平坦面へと続く隆起斜道(近藤1999)へと利用されたものと思われる。



写真7-7 埋葬施設調査風景(その1)



写真7-8 埋葬施設調査風景(その2)



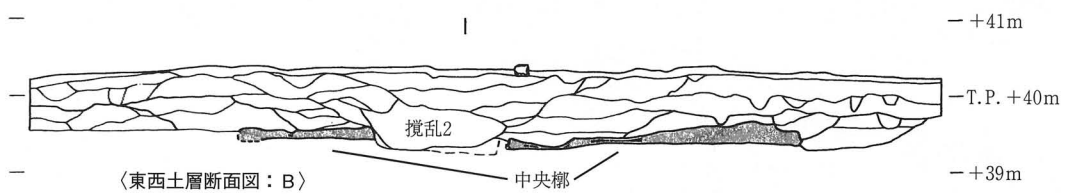
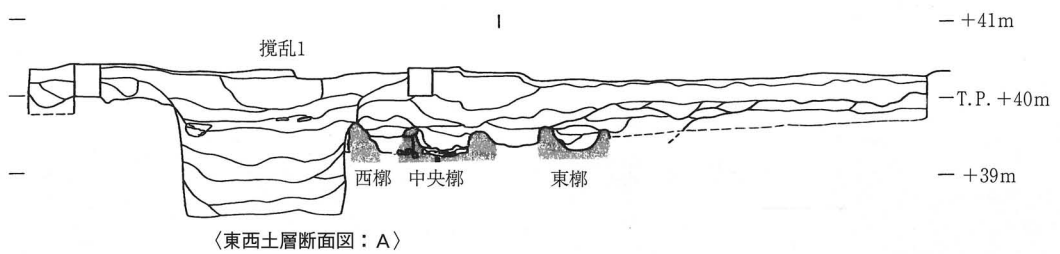
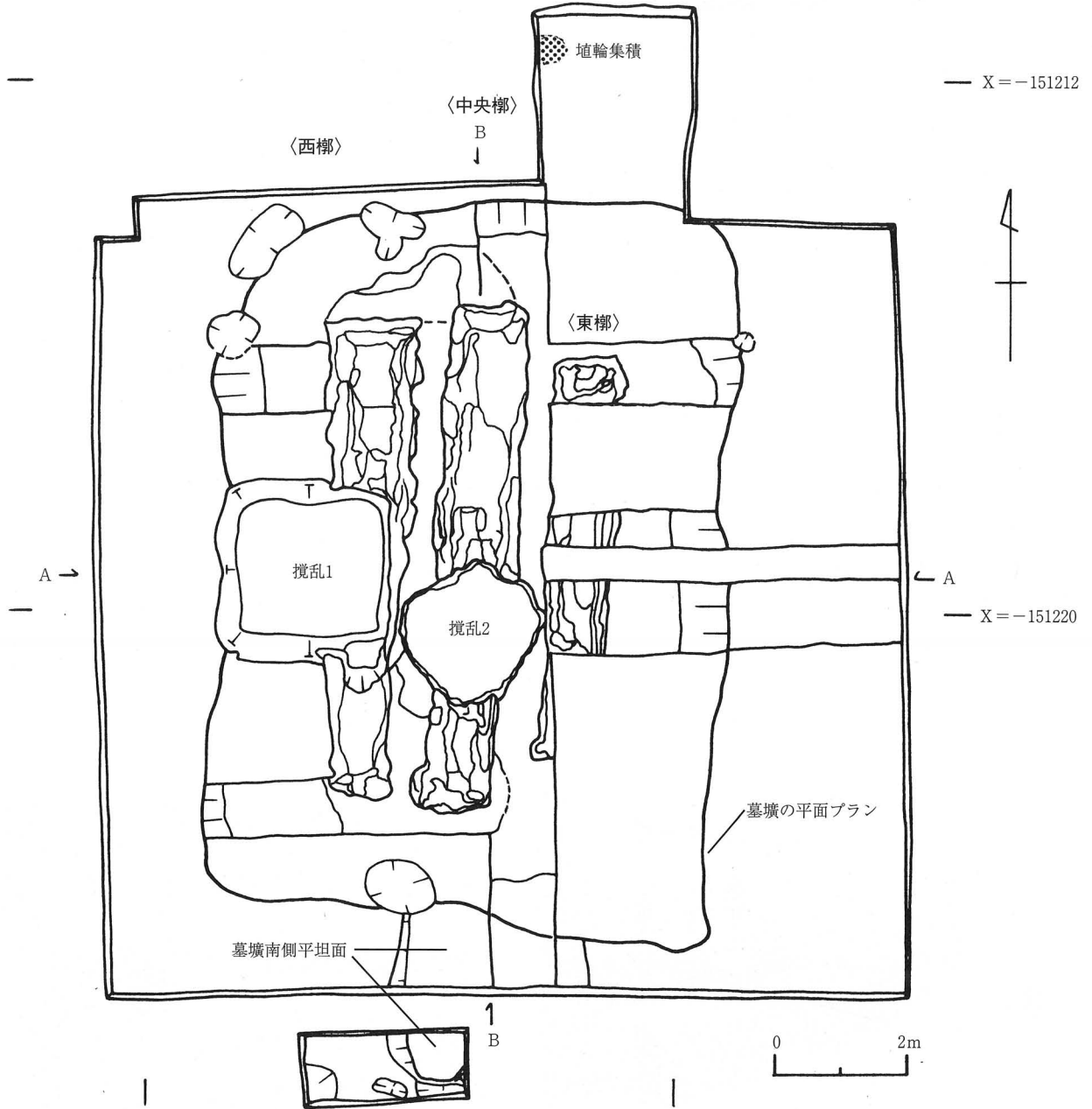
写真7-9 粘土槨検出状況(その1：北から)



写真7-10 粘土槨検出状況(その2：西から)

Y = -32672

Y = -32664



第20図 墓壙と埋葬施設の位置・土層図(2区・1/100)

【参考文献】 近藤義郎 1999「前方部とは何か」『古代吉備』第21集 古代吉備研究会

和田晴吾 1997「墓壙と墳丘の出入り口ー古墳祭祀の復元と発掘調査ー」『立命館大学考古学論集Ⅰ』

〔中央槨と東槨の調査概要：第20・21図・写真7-11～7-14〕

墓壙内中央には、規模の異なる3基の粘土槨(中央槨・西槨・東槨と呼称)が東西に並列する。各埋葬施設はそれぞれ約0.5mの等間隔に配置されており、切り合い関係は見られなかった。中央槨と西槨の南側槨間では、一部被覆粘土を共有している。各粘土槨が、計画的に配置されたことがうかがえる。

中央槨の概要 3基の粘土槨のうち中央部に位置し、最も長大な埋葬施設で、全長約7.7m、最大幅約1.3mを測る。被覆粘土の上面では、T.P. +39.6mとなる。心合寺山古墳の中心主体であると考えられる。内部は未調査である。

槨中央部分は、中世頃に掘られた直径約2mの攪乱(攪乱2)により、完全に南北で分断されている。盗掘は北へ向かって行われたと考えられ、特に北側部分の被覆粘土が一部削平されている。攪乱埋土から副葬品の一部である刀剣類の破片4点が出土している。攪乱の北側壁面には、約3cm大の小礫が帯状に確認でき、後述する西槨内の小礫と同じく棺内の礫床に使用されていたもので、西槨と同じく棺構造が「礫床木棺(粘土槨)」である可能性が高い(写真7-11)。中央槨は、南北に分断されているものの、攪乱の及ばなかった部分では、被覆粘土の状態は良好である(写真7-13)。

被覆粘土の表面には朱が確認でき、本来は槨全体に塗布されていたと考えられる。槨中央部北側の西側壁には、短槍1本が鋒先を北に向けて置かれていた。粘土被覆後に配置された副葬品の一つであろう。

東槨の概要 中央槨の東側にある埋葬施設で、全長約6m、検出最大幅約1.1mを測る。3基の粘土槨の中では、最も小型のものとなる。被覆粘土の上面では、T.P. +39.6mとなる。第7次調査で槨北側小口部分を確認できた。被覆粘土は、北端小口部分では高く残っており、中央部分ではおそらく棺形どおりとなるU字形に落ち込んでいる(写真7-12)。3基の粘土槨のうちで最も良好に残っている。槨内の



写真7-11 中央槨北側攪乱断面



写真7-12 東槨中央部検出状況(南から)



写真7-13 中央槨南側検出状況



写真7-14 中央槨・西槨(南側)

木棺の構造・種類等は不明である。心合寺山古墳と同様の後円部に三基の粘土槨が埋葬のされた石山古墳(京都大学文学部博物館編1993)では、最も規模の小さな「西槨」でも内部の副葬品配置から人体埋葬が想定でき、心合寺山古墳の東槨も同様に人体埋葬されていたと思われる。

【参考文献】 京都大学文学部博物館編 1993『紫金山古墳と石山古墳』

〔西槨の内部調査概要：第22図・写真7-16・7-17・図版11下〕

西槨の概要 中央槨の西側にある埋葬施設である。全長約7.3m、最大幅約1.4mを測り、中央槨にほぼ並行して、約0.5mの間隔をおいて設置されている。中央槨に次ぐ規模になる。被覆粘土の上面では、T.P. +39.7mとなる。

粘土槨外面に朱の塗布は見られたものの、槨周囲に副葬品等は確認できなかった。槨中央部分は、攪乱により徹底的に破壊されており、埋土からも副葬品等は確認できなかった。そして、攪乱1北壁断面の東隅では、朱の付着した皿状の小礫集積が確認でき、両端には鉄製品が露出していた。また、槨北小口付近も攪乱を受けており、大型鉄製品の一部が確認できた。第7次調査では、槨北小口部の大型鉄製品の状況確認を先行させ、さらに攪乱1から槨北小口までの西槨北側部分約2.5mについて槨内の調査を行った。

埋葬施設の構造 西槨の埋葬施設は、棺床粘土は使用されておらず、墓壙底に敷き詰めた微砂層の上に木棺の両側板を立て、側板両脇周囲を側壁の砂混粘土で支える。棺側板周囲には、側壁及び小口粘土を下で支えるためか排水用に拳大強の角礫を配置している。南北の小口両端部分には良質の粘土を使用し、木棺の押さえとする。さらに、棺内を仕切り板で区切った後に、内側に本墳西方の旧大和川(玉串川)で採取した約3cm～5cm大の花崗岩・砂岩・チャートの川原石を約0.1mの厚さで水平に敷き詰めて礫床とし、木棺を構築する(粘土槨で使用された石材の分析は、奥田氏による自然科学分析を参照)。



写真7-15 現地説明会風景



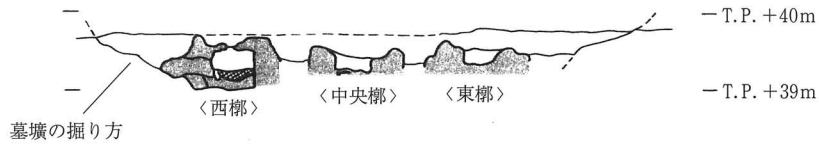
写真7-16 西槨内調査風景



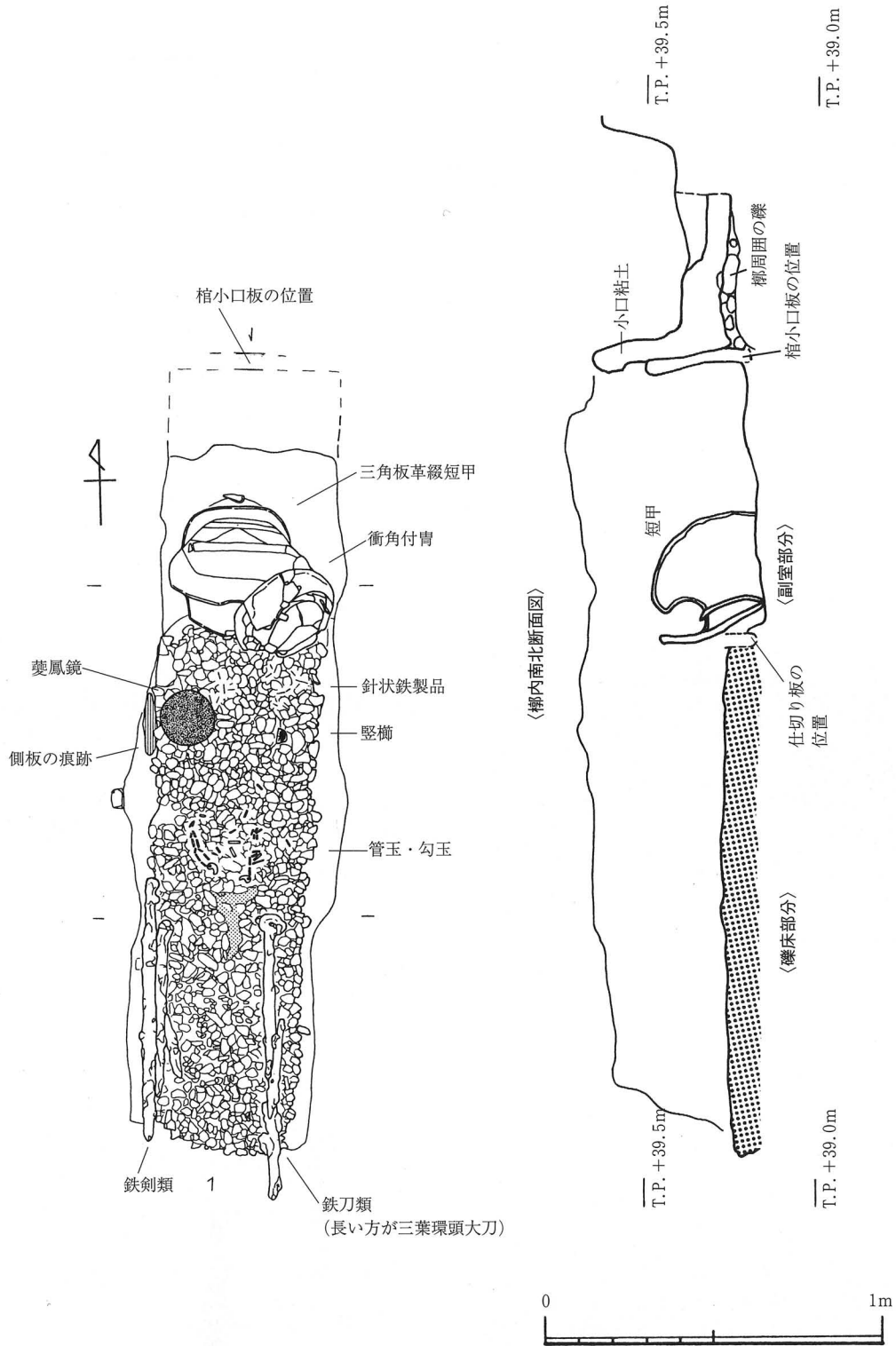
写真7-17 西槨調査状況(北から)



写真7-18 取り上げ直後の鏡の状況



第21図 墓壙と3基の粘土槨の位置(1/100)



第22図 西槨北側部分検出状況図(S = 1/20)

礫床の範囲は、調査範囲で約1.55m、幅は約0.5mを測る。礫床部分はほぼ水平でT.P. +39.25m前後である。そして、人体埋葬、副葬品配置後に棺蓋をし、粘土を被覆したものである。棺材は、鏡付近にコウヤマキの木片が残っていたのみである。棺材の厚さは、5cm前後はあったものと推測される。また棺高は、短甲の配置高(棺底高)から約0.4m~0.5mはあったと考えられる。

槨内は、礫床部分と甲冑の置かれていた北小口付近の礫のない部分に分けられ、人体埋葬部分にのみ礫を敷き詰めて、区切っている。未調査である西槨南側部分では、南側攪乱断面に礫が認められないことから、棺北小口側と同様に、槨内に副室的な空間が南北両端にあった可能性が高い。

西槨の埋葬施設構造は、従来、粘土槨が棺床粘土上に据えられた木棺を粘土で覆うのに対し、棺床粘土はなく、組合式木棺そのものを構築しながら設置していた。粘土槨構築の省略形と考えるよりもむしろ別系統の構築方法といえよう。外見上は粘土槨という構造を持ちながらも、内部の棺構造が特徴的で、棺内に礫床を持つ木棺や箱式石棺に類似していた。心合寺山古墳と同様の構造をもつ古墳は、福岡県糟屋郡志免町萱葉1号墳や兵庫県朝来郡和田山町筒江中山23号墳などがある(「第3章 2. 主体部について」を参照)。心合寺山古墳の埋葬施設は、中央槨、西槨ともに礫床をもつ特徴的な槨(棺)構造を採用していたことが明らかとなった。

[西槨内副葬品配置の概要：写真7-18~7-25]

西槨内北側部分の副葬品の配置は、甲冑(短甲・冑)1領を置くための仕切り板で区切られた槨北小口部分の副室部と被葬者の埋葬された礫床部分の主室部に分けられ、出土状態は良好で、槨内の副葬品は、ほぼ原位置を保っていた。

槨北小口部分(副室部) 槨北小口の副室部は、南北0.8m、東西幅0.5mを測る。三角板革綴短甲が礫床部分に近接して直立状態で置かれていた(写真7-23)。甲冑配置の棺底高はT.P. +39.15mとなる。三角板革綴短甲は、前胴を礫床仕切り板側(南側)にむけ、短甲の上には一枚鍔付の三角板革綴衝角付冑がの

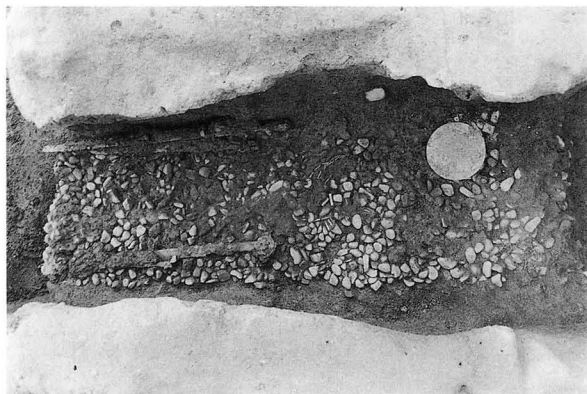


写真7-19 西槨内副葬品配置状況(右が北)

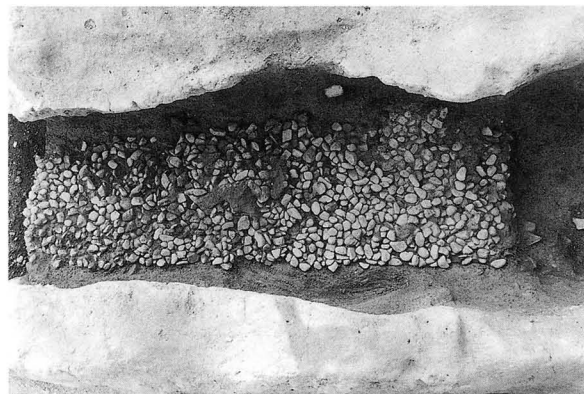


写真7-20 西槨内副葬品取り上げ後の状況

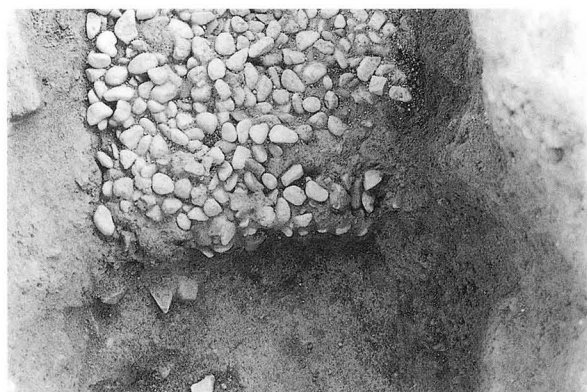


写真7-21 礫床北側仕切り板付近



写真7-22 礫床中央部出土状況

せられていた。また、副室部の北端部分では、副葬品は出土せず、革製草摺等の痕跡は確認できなかった。槨北小口部分は、底板が無く、甲冑1領を納めるための副室的な場所になる。

礫床部分(主室部) 主室部となる礫床部分で出土した副葬品には、夔鳳鏡1面、ヒスイ製勾玉2点、碧玉製管玉32点、鉄剣3本(長剣・鹿角装剣・短剣)、鉄刀2本(うち1本は三葉環頭大刀)、針状鉄製品10数点(7個体以上)、刀剣類茎破片1点、豎櫛1点がある(写真7-19)。

礫床の北端の仕切り板付近から鏡に向かって、針状鉄製品が礫床上に散らばって10点の破片が出土している。針状鉄製品は、出土状況から東と西の2群に分けられる。但し、仕切り板や棺蓋が腐朽した時に若干移動したものと思われる(写真7-24)。

夔鳳鏡1面が、棺北西部の西側板に接した状態で鏡面を上にして置かれていた。鏡が本来棺の西側板か小口板(仕切り板)に立てかけられていたか、出土状況のままかどうかは判然としない。鏡周囲には、多量の朱(水銀朱)と木棺の側板と思われる炭化木片、布の繊維などの有機質が土壌化しながらも残っており、鏡背や鏡面にも、鏡を包んでいたと思われる布や繊維が付着していた。鏡背には、鏡を包んでいた赤色や黄色で染色された何種類かの織り方の異なる何種類かの布(平絹)や有機質が付着していた。これらの有機質が鏡背に多数付着しており、鏡のクリーニングを行うまで、鏡式は分からなかった(写真7-18)。夔鳳鏡に付着した有機質についての詳細は、付編の自然科学分析を参照していただきたい。

鏡を包んでいた方法等は確認できなかったが、古墳時代前期から鏡1枚1枚を絹等の布製品で包んで副葬する方法が行われており、夔鳳鏡が、平絹製の鏡袋か布に入れられて副葬されていたことは間違いのない。古墳に埋葬された青銅鏡に付着した布等の痕跡を確認した例は多く、鏡に対する意識や副葬方法を考える上で重要な資料となろう。夔鳳鏡は被葬者の頭部西上に数種類の布に包まれて配置されていたことになる。また、鏡東側では豎櫛1点分の漆皮膜の一部を確認している。

中央部には、勾玉2点と管玉32点を連ねた首飾りがある。被葬者の頸部に装着されていたと思われる。この付近が上半身と考えられ、朱が最も多く残っていた(写真7-25)。刀剣類は、南側の攪乱孔に



写真7-23 甲冑出土状況(北から)

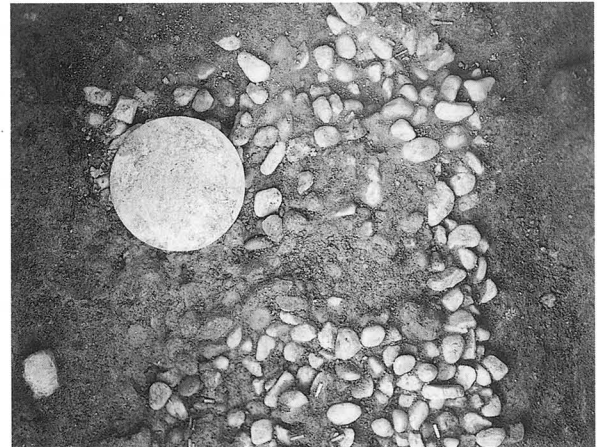


写真7-24 鏡付近出土状況

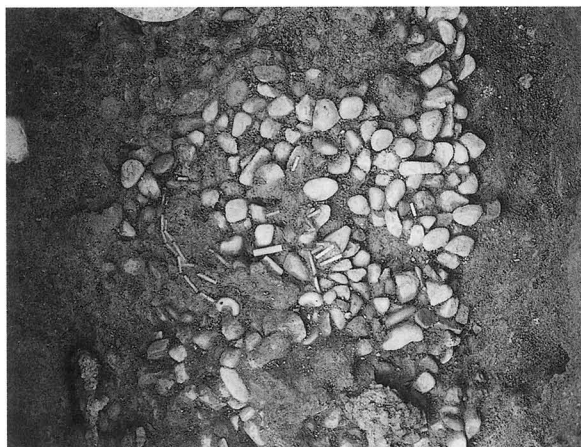


写真7-25 玉類出土状況

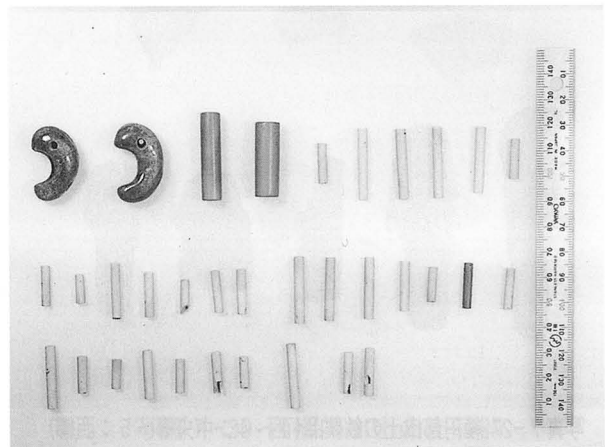


写真7-26 出土した勾玉・管玉

接する西側板付近に長さの異なる鉄剣3本が重なり、東側板付近には三葉環頭大刀と短刀が重ねて置かれていた。刀剣類はすべて鋒先を南に向けており、被葬者の両腕付近に置かれたものと考えられる(写真7-22)。調査範囲から南側部分は攪乱1により破壊されていたが、攪乱断面にかかる西側には切断された刀剣類の茎部(写真7-27:5)が残っており、本来は多数の鉄製品がおかれていた可能性が高い。

副葬品配置から見た被葬者の位置 西槨は長大な組合式木棺で、槨の南北小口に副葬品を納めるための副室構造を持っていた。鏡、豎櫛、装身具等の副葬品の配置から、今回調査した約1.5mの磔床部分が被葬者のほぼ全身が埋葬されていた部分にあたりと考えられ、被葬者の頭位は北方向であった。

[各埋葬施設出土遺物の概要：写真7-27]

中央槨の出土遺物(鉄製品・土器) 西槨以外で副葬品の明らかな中央槨は、中央を攪乱2により大きく破壊されていた。攪乱2から鉄製品の破片が4点出土している(写真7-27:1~4)。棺内中央部に副葬されていた鉄製品で、盗掘時に取り残された一部である。目釘孔の存在から刀剣類の茎部分などで、中央槨の副葬品の一端を知ることができる。槨外に副葬されていた短槍(剣)は、長さ28cmである。その他、槨外の被覆粘土上面には、破碎された土師器細片が出土しているが、器種等は不明である。

[西槨出土遺物の概要(鏡・鉄製品・玉類・土器)：第23・24図・写真7-26~7-30]

西槨内の副葬品の概要については、「副葬品配置」で記載したとおりで、一覧表を参照していただきたい。副葬品のうち、ほとんどの鉄製品が現在保存処理中であり、十分な観察ができないため、今回は正確な実測数値等が明らかにすることができなかった(表1 西槨出土遺物一覧参照)。

調査した部分が、西槨被葬者の人体埋葬された部分か、その近接した付近になり、副葬品の構成等は被葬者の性格を知る上で重要な手がかりになる。

特徴的な副葬品 特に三角板革綴短甲、三角板革綴衝角付冑や三葉環頭大刀(X線写真で確認・写真7-35 X線写真参照)については、今後保存処理が終了次第、詳細な観察・検討等を行いたい。

心合寺山古墳を含む5世紀代以前の三葉環頭大刀については、福島県会津大塚山古墳や奈良県東大寺山古墳の例に代表されるが、国内での出土例が少なく(今尾1982・古野1989・福島県立博物館1994)、心合寺山古墳出土の三葉環頭大刀の年代、製作地やその入手方法等は今後の課題となろう。三葉環頭大刀は、長さ約0.85mで、環頭部は扁平である。環内の三葉部分に文様はなく、中央の舌状円形部の上部から細い二葉が垂れ下がっていた。

装身具の碧玉製管玉は大小合わせて32点、ヒスイ製勾玉が2点出土している。これらの石材は、北陸地方で採集されたものであった(写真7-26：付編 自然科学分析参照)。

その他の出土遺物 副葬品を配置した棺床の磔は、心合寺山古墳西方の旧大和川の川原石であることがわかっている(写真7-29：付編 自然科学分析参照)。西槨内からは、鉄製品や鏡、玉類等の副葬品以外に、衝角付冑と鍔の間にはさまった布留式甕の口縁部や棺内に落ち込んだ埋土より土師器の破片が出土している(写真7-30)。粘土槨被覆後の葬送儀礼等に使用された土器の一部と思われる。

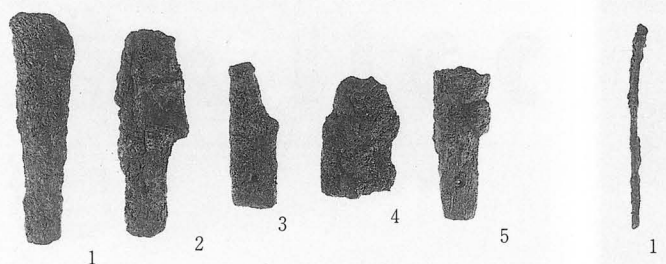


写真7-27 後円部出土の鉄製品(1~4:中央槨・5:西槨)

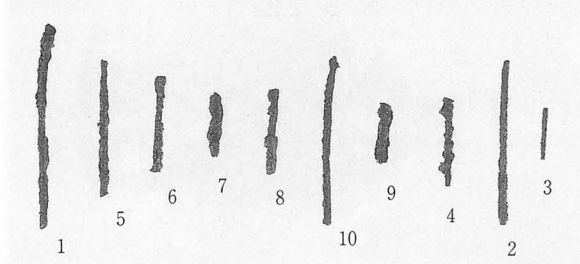


写真7-28 西槨出土の針状鉄製品

表1 西槲出土遺物一覧

副葬位置	種類	遺物名	法量	特記事項
槲北小口 (副室部)	甲冑	三角板革綴短甲		直立配置
		三角板革綴衝角付冑		一枚綴付
磔床北側	装身具	夔鳳鏡	直径16.3cm	中国鏡
仕切り板		針状鉄製品 7本以上	直径約1mm~2mm・最大長約4.5cm	北小口付近に散らばる
付近		堅櫛1(第24図11)	残存長約3cm	漆皮膜断片のみ残存
磔床中央 部		ヒスイ製勾玉 2点	大きさ約3cm	富山県糸魚川産
		碧玉製管玉(大) 2点	直径約9mm・長さ約3cm	石川県産
		碧玉製管玉(小) 30点	直径約3mm・長さ約2cm前後	同上
磔床南東 側壁	刀剣類	三葉環頭大刀	長さ約85cm	古式の三葉環頭(X線写真にて確認)
		短刀	長さ約30cm	三葉環頭大刀の上に置かれていた
磔床南西 側壁		長剣	長さ約80cm	3本の重なった剣の一番上
		鹿角装剣(中型剣)	長さ約50cm	長剣の下に置かれていた
		短剣	長さ約25cm	3本の鉄剣のうち最下層
		刀剣茎破片1(写真7-27:5)	残存長約6cm	攪乱により南側(鋒先)が切断
槲内	土師器	布留式土師器細片(写真7-30)	甕口縁など	棺内落ち込み土より出土

【参考文献】

- 今尾文昭 1982「中平紀年銘をめぐる諸問題－東大寺山古墳出土三葉環頭大刀の系譜－」『考古学と古代史』同志社大学考古学シリーズ
- 古野徳久 1989「老司古墳出土の環頭大刀」『老司古墳』福岡市埋蔵文化財調査報告書第209集
- 福島県立博物館 1994『企画展 会津大塚山古墳の時代』

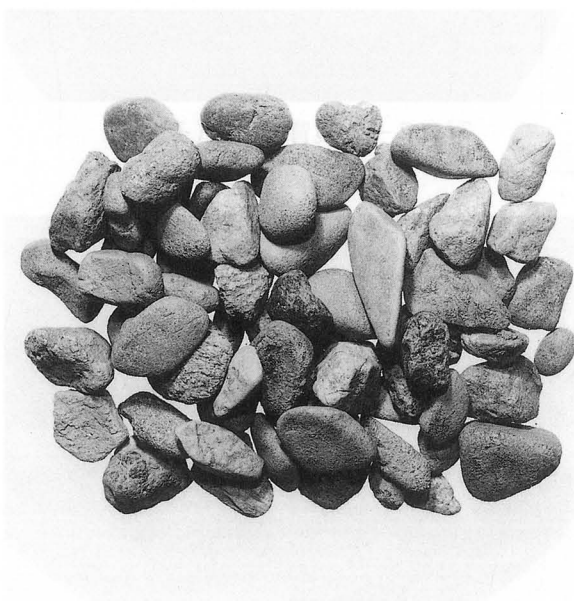


写真7-29 棺床の磔



写真7-30 西槲内出土の土師器

次に、保存処理の終わった夔鳳鏡、針状鉄製品の概要について記載することにする。

[夔鳳鏡の概要：巻頭図版1・第23図 夔鳳鏡実測図・写真7-31～7-34・図版21 X線写真]

主な特徴 遺存状態は良好な完形品で、鑄上がりは良く、欠損部分・破損等はない(図版21 X線写真参照)。鏡面、鏡背全体が緑青の緑色を呈しているが、鏡背の一部に青銅鏡本来の白銅色を残す部分があり、保存状態は良好である。鏡面、鏡背には鏡を包んでいたと思われる平絹の繊維が一部付着していた(写真7-31)。

円形の紐座に近接する丸みのない扁平な四葉文の先端が、外区に向かって伸び、内区を4つに区切っている。区画内には、頭を向き合わせた一对の鳳紋(夔鳳紋)を配置する。鳳紋は合計4組8羽になる(写真7-32～7-34)。外区は、内部が無紋の16個の連弧文を配し、圏線の外側がやや幅の広い平素縁になる。紋様は平彫りで全体的に平面的な表現となっている。

法量・重量 鏡の直径は16.3cmで、外縁部の平素縁の幅が約1.5～1.6cm、内区の紐座から連弧文までが約4.5cmを測る。内区・外縁部とも厚みはほとんど変わらず、外縁の平素縁の部分が内区よりやや厚く、0.3cm～0.4cmの厚さがある。重量は470gを測る。

内区(紋様構成) 四葉文で区切られた内区の4区画内に配置された二羽一对の鳳紋は、小さな円形の目をつけた頭部に、互いの嘴を突き合わせた姿が表現されている。対になる鳳紋が、相似形をなさず、羽や足の表現が異なっている。4区画とも対になる左右の鳳紋が、それぞれ異なる表現で配されている。左側の鳳紋のみを比較しただけでも、同じ表現ではなく、微妙に細部が異なる。丸みのある頭部頂の表現を比較すると、四葉文の四葉の角度に並行するものと異なる角度で表現されているものがある。羽の数や足の表現でも同様で、それぞれに表現が異なっており、形式的にも退化した鳳紋の表現であることがわかる。四葉文の先が伸びる十字に微妙なズレが見られる。

内区(銘文) 扁平な四葉文の弁間には、4字句の銘文があり、「子」と「孫」が判読できる。「孫」と「子」字形のつくりの一部となる「子」の上部分が円形ではなく、「▽」に変化している。また、「孫」の右の



写真7-31 鏡に付着した布痕跡



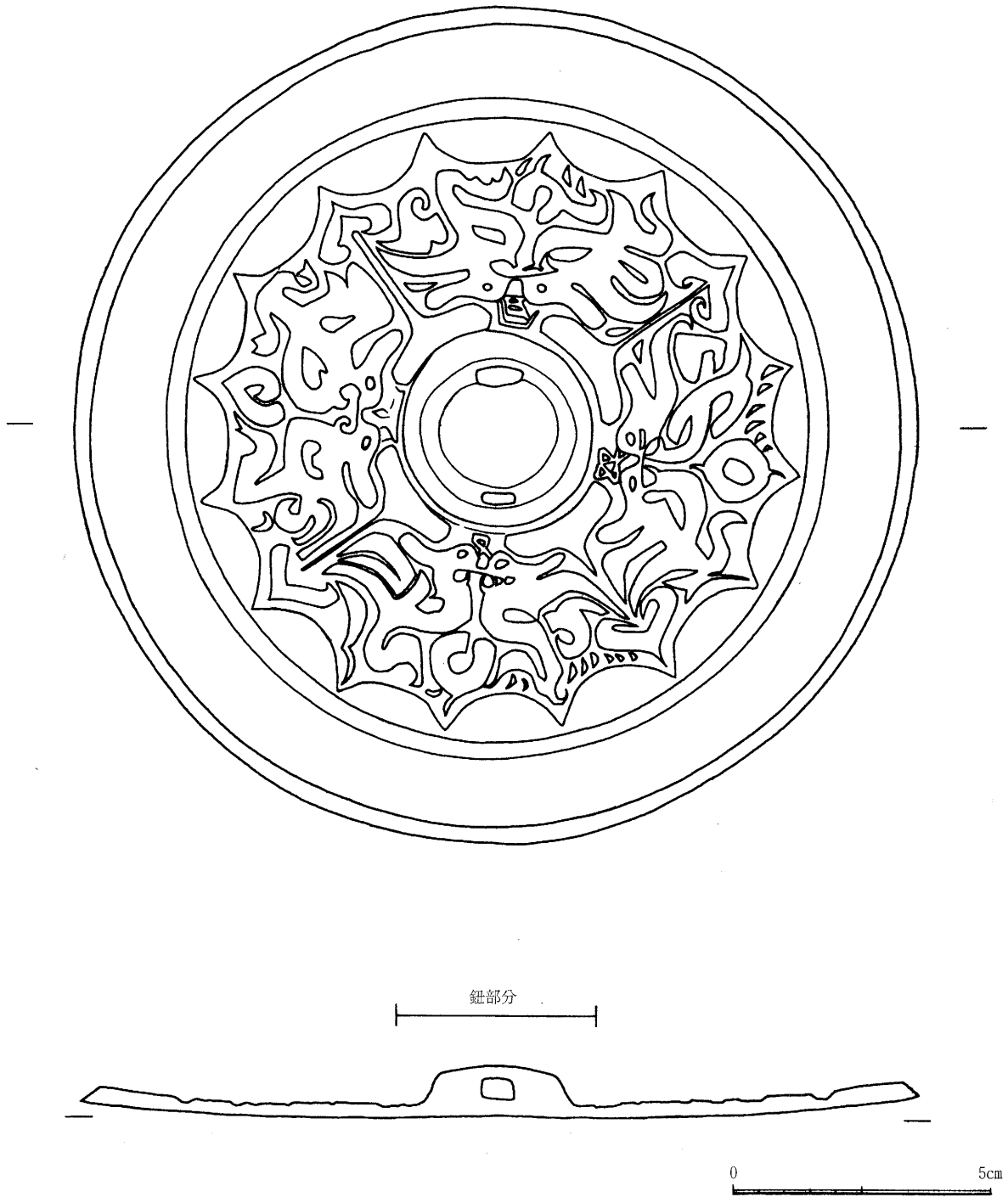
写真7-32 鏡背の近接(その1)



写真7-33 鏡背の近接(その2：孫の部分)



写真7-34 鏡背の近接(その3：子?の部分)



第23図 夔鳳鏡実測図(S=80%縮小)

字句は摩滅が著しいものの「宜」であろう。もう一字の部分は完全に摩滅している。この4字句は、時計回りに[?](摩滅)・宜(やや摩滅・判読難)・孫・子と少なくとも判読できる。「子」・「孫」が半時計回りに続くと思われ、おそらく吉祥句である「長宜子孫」ないしは「富宜子孫」である可能性が高い。

鈕の特徴 鈕の直径は、約3cm、高さは鏡面から0.8cmを測り、扁平円鈕である。鈕孔の位置は、紐座より高さ0.2cmのところであり、縦0.6cm、横0.4cmの断面形が長方形鈕孔である。鈕孔は、銘文の「宜」側のみが、擦り減っており、紐擦れの痕であろう。鈕孔内部には、鈕紐の繊維痕跡が残存していた。

国内の夔鳳鏡出土遺跡について 国内での夔鳳鏡出土遺跡数は、心合寺山古墳鏡を含めて25遺跡(但し、鏡が現存しない3例・鉄鏡1例・別鏡式の可能性のある破片の3例を含む)を確認している(表2 夔鳳鏡出土地名表参照)。

夔鳳鏡の国内での出土例は、古い調査事例や資料が含まれており、出土位置・状況等が不明な鏡が多く、近年の発掘調査で明らかになった例は少ない。弥生時代後期の遺跡(主に墳墓)からの出土が3例あり、古墳時代前期を中心として副葬品として納められたのは、16例ある。沖ノ島を含めた祭祀遺跡からの出土が3例ある。また、古墳での出土の可能性が高いが実態の不明なものが3例ある。

古墳出土の16例のうち、5例が古墳時代前期の前方後方墳から出土している。このことは、「夔鳳鏡」という鏡式がもつ古墳副葬鏡としての一つの特徴となろう。

夔鳳鏡の編年 夔鳳鏡には、中国出土の二面の紀年銘鏡があり、元興元年(=105年)、永嘉元年(=145年)が知られている。後漢代中期から魏晋・西晋代にかけて製作された鏡である。

内行花文鏡を祖形として、同時期には、夔鳳鏡と同じく平彫りで紋様構成も類似する、獣紋や龍紋等を表現した単夔鏡(四鳳鏡)、獣首鏡、双頭龍文鏡(位至三公鏡)といった鏡式が製作されており、後漢鏡の編年を行った岡村氏によると漢鏡7期第1段階(2世紀後半～)に位置付けられている(岡村1993・1999)。

夔鳳鏡の研究は、樋口隆康氏(樋口1979)、岡内三眞氏(岡内1996)、秋山進午氏(秋山1998)を中心に進められ、型式分類・編年がなされている。

樋口氏は四葉文の分類を基本として、外縁型式を加味している。A：内行花文縁糸巻形四葉文式・B：平素縁式・C：内行花文帯(渦文を表現)・D：内行花文縁蝙蝠形四葉文・E：宝珠形四葉文としている。

岡内氏は、紐座をⅠ四葉形・Ⅱ蝙蝠形・Ⅲ糸巻形・Ⅳ宝珠形に分類し、さらに主紋様の鳳紋をA(デザイン化された鳳)・B(具象的な鳳)の2種類に分け、連弧文帯を1(無紋)・2(有紋)に、外縁帯をa(無し)・b(有り)に、紋様帯をイ(無し)・ロ(有り)に分類した。これらの要素を組み合わせた分類を行っている。

秋山氏は、樋口氏、岡内氏の分類を検討した上で、新たな分類案を提示している。紐座の分類を基本として、外縁部の内行花文帯(連弧文帯)を加味している。特に糸巻紐座を十字形と方形との2種類に分類している。それによると、1式：蝙蝠形紐座・2式：十字形糸巻形紐座+無紋内行花文帯(2A)もしくは渦文内行花文帯(2B)・3式：方形糸巻形紐座+無紋内行花文帯(3A)もしくは渦文内行花文帯(3B)・4式：宝珠形紐座+平素縁有文内行花文帯(4A)、+有文縁有文内行花文帯(4B)、+画像線・立体表現(4C)という分類案になっている。秋山氏は分類案に基づき、中国出土の豊富な資料の分析を通じて、1式の蝙蝠紐座が夔鳳鏡の初現と考え、楽浪郡を含む華北地域の生産で後漢中期(岡村編年漢鏡6期)とし、2式を後漢中期～後期(A)、後期(B)とし、3式を後漢後期から末期(A)、呉代前半(B)とした。4式については華南地域のみ出土で、呉代後半から西晋代の鏡としている。

心合寺山古墳西槨の夔鳳鏡 心合寺山古墳西槨出土の夔鳳鏡は、平素縁式無紋内行花文帯(連弧文帯)で四葉形円形紐座である。既往研究の分類方法で分類してみると、樋口分類ではB類、岡内分類ではⅠAⅠbⅡ類となる。しかし、秋山分類では、紐座形態がその分類に当てはまらず分類ができない。これまでに出土した夔鳳鏡にない特徴を持っていることが分かる。今後、心合寺山古墳鏡の位置付けを考える上で、分類案を含めて再検討が必要である。

表2 夔鳳鏡出土地名表

番号	遺跡名	所在地	墳丘(埋葬施設)	時期	面径(cm)	樋口分類	岡内分類	秋山分類	銘文	備考
1	ヘボソ塚古墳	摂津：兵庫県神戸市東灘区岡本5丁目	前方後円墳(全長63m:堅穴式石室)	前期	完形14.7	A	ⅢA1a	2A	□宜高□	
2	国分寺古墳第1号主体	伯耆：鳥取県倉吉市大字国府字東前	前方後方墳(直径60m:粘土槨)	前期	完形20.0	A	ⅢA1a	2A	長宜子孫・如	
3	那須八幡塚古墳	下野：栃木県那須郡小川町吉田八幡	前方後方墳(全長68m:割竹形木槨直葬)	前期	完形12.6	A	ⅢA1a	2A	士□三公	
4	国分尼塚1号墳	能登：石川県七尾市国分町	前方後方墳(全長52.5m:木槨状割竹形木槨)	前期	完形15.7	A	ⅢA1a	2A	なし	破砕鏡
5	象鼻山1号墳	美濃：岐阜県養老郡養老町橋爪	前方後方墳(全長40m:木槨直葬)	前期	完形11.6	A	ⅢA1a	2A	君宜高官	破砕鏡
6	龍子三ツ塚2号墳	播磨：兵庫県龍野市掛西町大字龍子	円墳(直径20m:堅穴式石室・土器棺?)	前期	破片・復元径11.7	A	ⅢA1a	2A	なし	破鏡
7	長須隈古墳	筑前：福岡県糸島郡二丈町大字鹿野字長須隈	円墳(直径21m:舟形石棺)	中期?	復元径約17	A	ⅢA1a	2A	長□□□	現物なし
8	伝名張一之宮神社古墳	飛騨：岐阜県吉城郡国府町名張宮之前	古墳?(不明)	不明	完形21.2	A	ⅢA1a	2A	なし	鉄鏡
9	伝須玖岡本遺跡D地点	筑前：福岡県春日市岡本町5丁目	支石墓?(甕棺)	Ⅳ-V期(弥生)	完形13.6	B	I A 1 b イ	3A	位至三公・君宜古?市	
10	上大谷6号墳	山城：京都府城陽市久世字上大谷	方墳(一辺15m:組合式木槨直葬)	前期	完形11.3	B	I A 1 b イ	2A	長宜子孫	
11	心合寺山古墳西都	河内：大阪府八尾市大竹5・6丁目	前方後円墳(全長157m:粘土槨床木槨)	中期	完形16.3	B	I A 1 b イ	?	冨?(長)宜子孫	
12	安土瓢箪山古墳中央石室	近江：滋賀県蒲生郡安土町大字桑実寺	前方後円墳(全長134m:堅穴式石室・割竹形木槨)	前期	完形15.0	B	ⅢA1b イ	2A	保子宜孫	
13	大浮軍山古墳	対馬：長崎県上県郡上県町大字志多留	古墳(箱式石棺)	前期	完形11.4	B	ⅢA1b イ	3A	なし	
14	十三塚遺跡	肥前：佐賀県佐賀郡大和町大字川上	古墳(箱式石棺)	前期	破片・復元径11	B	—	2A	なし	2体埋葬
15	平遺跡	豊前：福岡県京都郡豊津町大字上坂字平333	墳墓(箱式石棺)	V期(弥生)	破片・復元径16	C	ⅢA1a	—	不明	破鏡
16	馬場山第41号a土墳墓	豊前：福岡県北九州市八幡西区大字馬場山	墳墓(土墳墓)	V期(弥生)	破片(内区)復元径14	C	ⅢA2a	—	不明	双頭龍文鏡?・破鏡
17	伝美濃山王塚古墳	山城：京都府八幡市美濃山	古墳?(不明)	不明	完形12.5	D	ⅡA1a	1	長宜子孫	現物なし
18	漆生遺跡	筑前：福岡県嘉穂郡稲築町大字漆生	円墳?(箱式石棺)	不明	完形12.1	D	ⅡA1a	1	長宜子孫	現物なし
19	尾ノ上古墳	備後：広島県福山市加茂町	前方後円墳(全長60m:堅穴式石室)	前期	完形22.0	E	ⅣB2b 口	4C	なし	沖ノ島17号鏡と同型鏡
20	沖ノ島17号遺跡	筑前：福岡県宗像郡大島村大字沖ノ島	祭祀遺跡(岩陰)	前期~中期	完形22.1	E	ⅣB2b 口	4C	冨宜子孫	沖ノ島18号鏡と同型鏡
21	沖ノ島18号遺跡	筑前：福岡県宗像郡大島村大字沖ノ島	祭祀遺跡(岩上)	前期~中期	復元径22	E	ⅣB2b 口	4C	不明	沖ノ島17号鏡と同型鏡
21	沖ノ島18号遺跡(伝富地獄付近)	筑前：福岡県宗像郡福岡町大字富地獄付近?	—	—	復元径約22(破片3)	E	ⅣB2b 口	4C	なし	沖ノ島18号鏡と同一個体
22	奥山大塚古墳	播磨：兵庫県姫路市大字奥山	円墳(直径15m:堅穴式石室・組合式木槨)	中期	完形18.8	E	ⅣB2b イ	4B	なし	仏像夔鳳鏡・同范鏡有り
23	桜井茶臼山古墳	大和：奈良県桜井市外山	前方後円墳(全長207m:堅穴式石室・割竹形木槨)	前期	破片	—	—	—	なし	単き鏡?
24	七つぐろ1号墳1号石室	備前：岡山県岡山市大字津島字西坂	前方後方墳(全長45.1m:堅穴式石室・割竹形木槨)	前期	破片	—	—	—	なし	攪乱孔より出土
25	神坂峠遺跡	信濃：長野県下伊那郡阿智村大字神坂山	祭祀遺跡	中期?	破片	—	—	—	なし	獣首鏡?

四葉文が完全に押しつぶされたような扁平な形状をしており、四葉文の中でも退化形式のものとなることができよう。また、長方形鈕孔や扁平円鈕の形状にも新しい要素の特徴が見受けられる。夔鳳紋にも簡略・単純化が進み、左右の非対称及び夔鳳紋8羽全体の表現のばらつきなど、本来夔鳳であるはずが、羽や足などの表現を見ると紋様の退化傾向が見られる。これらの特徴から夔鳳鏡の中(樋口分類B類)でも後出する可能性がある。

【参考文献】

- 秋山進午 1998「夔鳳鏡について」『考古学雑誌84-1』日本考古学会
岡村秀典 1993「後漢鏡の編年」『国立歴史民俗博物館研究報告第55集』国立歴史民俗博物館
1999『三角縁神獣鏡の時代』吉川弘文館
樋口隆康 1979『古鏡』新潮社
岡内三眞 1996「双鳳八爵文鏡」『東北アジアの考古学』第二 東北亞細亞考古学研究会編

〔針状鉄製品の概要(第24図 針状鉄製品実測図・写真7-28)〕

針状鉄製品の出土状況 針状鉄製品の出土範囲は、鏡と豎櫛の北側に東西約0.3m、南北約0.2mの範囲に限定され、その中でも夔鳳鏡寄りの西側(破片7点:1~4)と東側(破片8点:5~10)に分けられる。それぞれ接合できた個体があったため、実測点数は10点を数える。

西側では、近接した3点の破片が、同一個体で接合でき、1本分が復元できる。残りの4点は、一部破片同士が接合できたが同一個体かは定かではない。多くとも3個体となる。

東側では、出土した8点のうち、互いに接合できた破片があるため、多くとも4個体となる。

針状鉄製品の配置 出土状況から、配置を復元することはできなかったが、後述するように1本ごとに針入れのような木製のケースに収められており、被葬者の頭部の上付近にきちんと並べてられていた可能性が高い。

針状鉄製品の概要 1は、残存長4.7cmで、今回出土した針状鉄製品の中では最大長のものである。針頭部はやや扁平であるが、針孔は銹化のため不明である。針先に向かって細くなっており、銹化しているものの、針先部分は残存しているようである。針先はやや三角形状で鋭くない。断面は1.5mm~2mm程度の円形であるが、鉄芯部に縦方向の条線のようなものが一部みえる。針芯に沿って木質が良好に残っている。2は、残存長3.8cmで、断面は1.2mm~2mm程度の円形である。針頭、針先は不明である。木質が針芯にわずかに銹着している。3は、残存長1.2cmで、断面径は1mmの円形で、今回出土した中では最も細い針で、保存状態は良好である。針先に近い部分になる。木質は確認できなかった。2と同一個体と思われ、長さ5cm以上になる。4は、残存長2.1cm、断面1mm~1.5mm程度の円形である。針先の方向は分かるものの、全体は不明である。木質は針芯全体に銹着している。

5は、残存長3.2cmで、断面1mm~2mmの円形である。針先の方向は分かるものの、針孔は確認できなかった。木質は針芯に沿って銹着している。6と7は、同一個体と思われるが、接合面を見出すことはできなかった。6が残存長2.2cmで、断面は2mm程度の円形である。7が残存長1.5cmで、断面は1mm~1.5mm程度の円形である。断面径から7が針先になると考えられ、針の長さは、4cm以上はあったものと思われる。それぞれ木質が銹着している。8は残存長2.0cmで、断面は1mm~1.8mmで針先部分である。この木質は、他例と同様に針芯に銹着しているが、針先部分の木質が針先に合わせて良好に残っており、これが針を収める鞘状のケースであったことが分かる。9は残存長1.5cmで、断面は1.5mmの円形である。近接して出土した8と同一個体の可能性があるが、接合面は確認できなかった。針芯片面に銹着した木質の縦方向の繊維が良く残っている。10は残存長3.8cmで、断面は1mm~1.5mm程度の円形である。針先は残っているものの針頭部の針孔は不明である。木質は針芯全体に銹着している。針頭部には、幅2mm、長さ3~4mm、厚さ1mm程度の長方形断面の扁平部がある。銹着のため針孔は不明である。

針状鉄製品の意味 心合寺山古墳で出土した10点の「針状鉄製品」は、銹化しているものの針先を確認

できるものがあることから、7本以上の「縫い針」であったものと思われる。しかし、針孔を持つような全体像を明らかにできる完形品は、確認できなかった。針孔はX線写真でも確認できず、もともとなかったのか錆化により失われたものかは判然としないが、針頭部に扁平部分があり、この部分に針孔が存在していたと思われる。長さについては、それぞれ5cm前後はあったと考えられるが、本来の長さは不明である。出土したほとんどの針状鉄製品(縫い針)が、針芯に沿った形状で錆着している木質(有機質)が遺存していたことから、1本ずつを収めた木製の針入れか針筒に入れられていたと考えられる。

古墳に副葬された針状鉄製品(縫い針)は、古墳時代前期から後期まで存続しており、西日本を中心として全国で100例ほど確認できる(藤井2001)。鉄状鉄製品の副葬の意義、縫い針を含めたその用途等、今後の検討課題となろう。

【参考文献】

藤井淳弘 2001「古墳に針を副葬すること」『研究紀要』第12号
八尾市立歴史民俗資料館

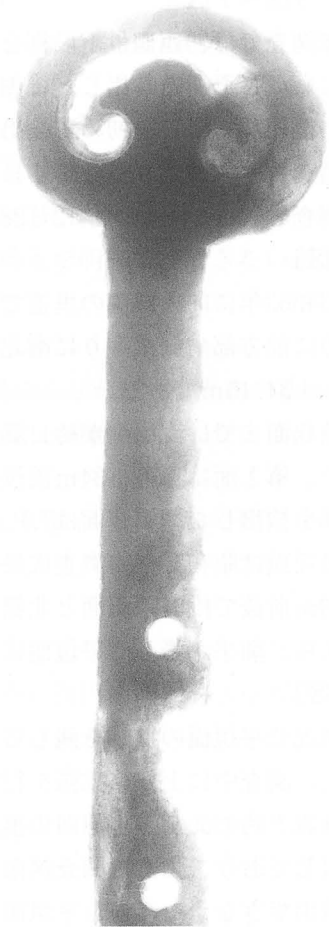
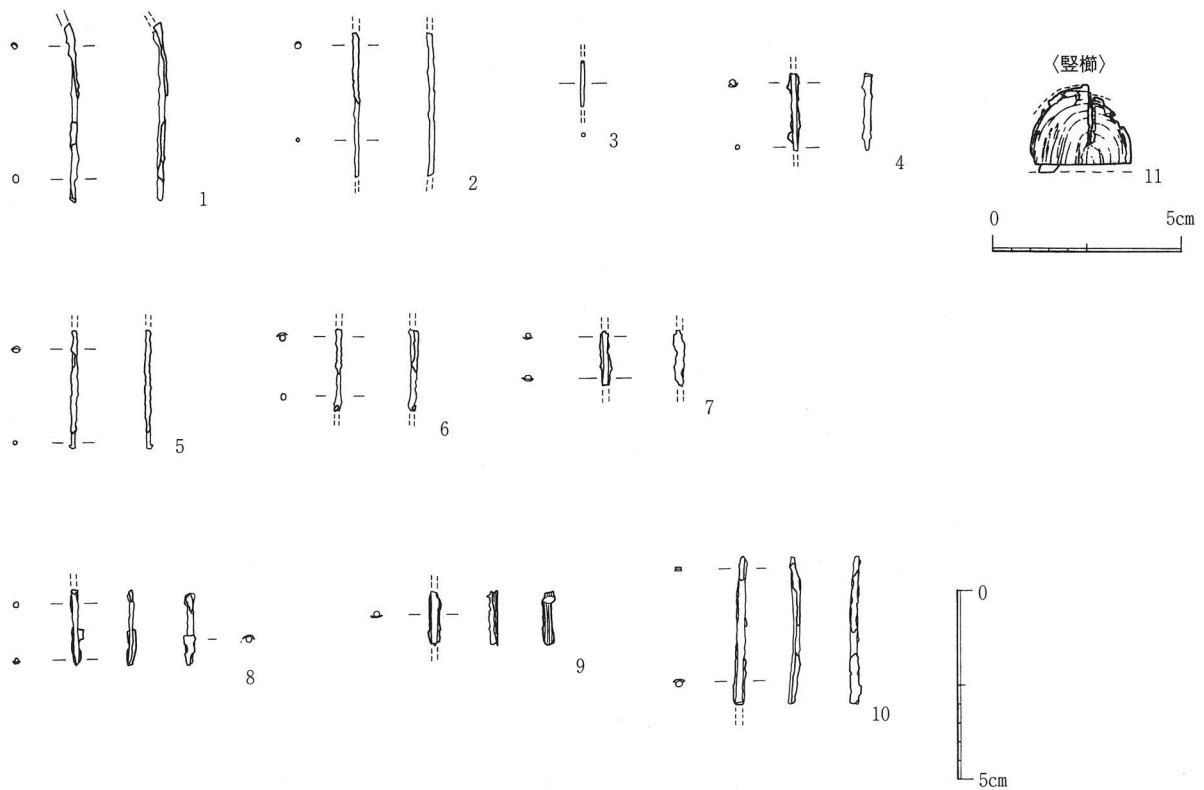


写真7-35 三葉環頭大刀のX線写真▶



第24図 針状鉄製品(1~10)・豎櫛実測図(11)(S=1/2)

(3) 3区～7区

本調査では、西側最下段裾を確認するとともに造り出しを検出し、本古墳が三段築成であることが判明した。また、造り出しと後円部の谷部で原位置を留めた「水の祭祀場を表した埴輪」を検出した。さらに後円部で葺石を初めて検出し、墳頂では墓道らしき痕跡を確認した。

調査は平成11年9月2～4日に調査区の設定を行うとともに基本となる基準杭を設置し、9月6日から調査を開始した。同年12月28日にすべてを埋め戻して終了した。総調査面積は約225m²である。

[3区]

昭和63年に前方部側の里道で埴輪列を検出しており、今回はその延長と平坦面の遺存状況を確認するために前方部南側東寄りに南北3m、東西2mの調査区を設定した。現況上端でT.P. +34.6m、下端でT.P. +34.15mである。

墳丘面までは流出土が約1.25mの厚さで堆積しており、ここでは墳丘面を併せて4つの遺構面を検出した。第1面はT.P. +34m前後で近世～現代の溝と土坑2基、第2面はT.P. +33.6m前後で近世の土坑3基を検出した。第3面はT.P. +33.1m前後で中世に比定される土坑1基を検出した。

墳丘面は昭和63年の調査成果をもとにT.P. +33m前後に遺存しているものと推定していたが、T.P. +32.9m前後で段築平坦面と北側上段斜面の立ち上がりの一部を確認した。中世面と墳丘面との差が無いことから、削平が著しく平坦面には転落した葺石や埴輪片はみられたが、埴輪列は遺存していなかった。

[4区]

現況で平坦面の痕跡を残していると推定された前方部西側南端に南北4m、東西7mの調査区を設定した。調査中に上部に拡張を行った。現況上端でT.P. +34.4m、下端でT.P. +32.2mであった。

地表下約0.65mで平坦面の痕跡と上段と中段の斜面の一部を検出した。平坦面は削平をうけて緩斜面を呈しており、また、調査区南側では中近世の石組が検出された。このように後世の改変により埴輪列は検出できなかったが、平坦面の幅がおよそ4m前後であることが確認できた。これはこれまでの調査と一致するところである。葺石の遺存状況は不良で上段斜面はわずかであるが残っていたが、中段斜面ではまったくみられなかった。

[5区]

前方部墳丘東側の中段平坦面を確認するために、大竹総池西岸に南北1m、東西3mの調査区を設定した。ここでは中段平坦面の埴輪列等は削平のため全く遺存しておらず、T.P. +32.6m～T.P. +32.1mで削平された墳丘面を確認したに留まった。この削平墳丘面は調査区西端から2.2m前後で池の侵食により東側に急傾斜をなして落ち込む。この落ち込みの法面を断面精査したところ、墳丘盛土の下層の旧地形構成層を確認することができた。墳丘盛土層はT.P. +32.1～T.P. +31.6mの間に、厚さ0.5mでみられる。この下のT.P. +31.6～31.4mには弥生式土器片を含む暗灰紫色微砂質粘砂層が堆積し、旧地表付近の構成層とみられる。この下にT.P. +31.4m以下に、上から明灰褐色粘質微砂シルト層、茶灰色砂礫層が堆積し、これは弥生時代以前の扇状地性堆積物層とみられる。これらの上にもみられる墳丘盛土層は0.1～0.2m単位で積まれた灰紫褐色小礫混粘砂層で旧地表付近構成層の暗灰紫色微砂質粘砂層がと扇状地性堆積物層明灰褐色粘質微砂シルト層が混ざり合った状態であった。このことから、墳丘盛土は旧地形構成層を掘削して積み上げたものであることが、明瞭となった。

[6区]

後円部と前方部との結節点の状況を確認するため、後円部南側斜面に南北10m、東西8mの調査区を設定したが、後に一部調査区の拡張を行った。現況上端中央部分でT.P. +38.9m、下端中央部分でT.P. +36.9mである。

地表下約0.3～0.5mで墳丘面を確認した。墳丘面は後円部から前方部にかけて緩やかなスロープを形成している。埴輪列は遺存していなかったが、本来埴輪列があったと推定される調査区両端で、部分的に埴輪の集積箇所が検出された。とくに東側上端付近では墳頂部近辺から東南方向に倒れ込んだ状態の大型円筒埴輪が1個体出土した。埴輪と墳丘面との間には流出土が堆積しており、埴輪が樹立されてか

ら倒れるまでに時間の経過があったことがうかがわれる。

後円部東南側斜面では葺石が確認できた。このため東側を南北約7.2m、東西約0.7m拡張した。葺石は巨礫と小礫が混在し、本来、小礫は後円部頂に葺かれていた可能性がある。このように葺石の遺存状況は良好とはいえなかったが、墳頂から斜面への変換部の痕跡が認められた。

また、調査区中央東寄りで墳丘構成土とは異なった部分の存在が明らかとなった。雲母を多量に含む土層を主体とし、幅約1.2mで、前方部側から後円部方向にむかってのびるが、調査区南端から約6m地点で途切れている。どのような目的でこうした土が使用されたかは現時点で明確にはできないが、墓道の可能性を視野に入れて検討すべきと考えている。

〔7区〕

西側の最下段裾の状況を確認するために、第5次調査で検出された中段のくびれ部をもとに南北10m、東西10mの調査区を設定した。調査区は約半分が現在の墳丘土手側で、残りが池側となった。このため現況上端でT.P. +30.3m、下端でT.P. +27.4mであった。

墳丘面は墳丘土手側で現地表下2～2.5m、池側では地表下0.2～0.7mで検出した。この間には中近世の耕作面が存在する。また墳丘面に近い堆積層には心合寺に関連するとみられる奈良～平安時代の土器と瓦片が多量に含まれていた。

後円部の基底石は良好に遺存しており、T.P. +27.0m前後で最下段裾を確認した。これにより本古墳が三段築成であることが判明した。検出部分は後円部と前方部の結節点から後円部側に約3m程度である。基底石は人頭大の石を主に用いているが、結節点にはやや大振りな石が置かれていた。また、結節点から約1.5m前方部よりで西に張り出す造り出し部を検出した。

造り出し部は調査以前にはその存在が不明な施設であった。北側から北西角にかけて人頭大の基底石と法面に葺かれた拳大の石が良好な状態で遺存していたが、西側の葺石は南東から北西にのびる溝により削られていた。この溝は2時期あり、新しい時期のものは転落石を利用した石積みによって護岸されている。このように後世の改変により造り出しの全容は不明だが、検出長は東西約6.3m、南北約5.6m、高さ約1.2mを測る。平坦面上部は削平を受けており、原位置を保つ遺物はみられなかった。しかし、後円部側に堆積した流出土からは造り出し上面に配置されていたと推定される鶏形、家形、蓋形、円筒などの埴輪が出土している。

また、後円部と造り出し部の間の谷部に巨石と人頭大の石で南北0.9m、東西0.6mの区画をつくり、ここに水の祭祀場を表現した埴輪を配置している状況を原位置で検出した。埴輪は後述するように家形(祭殿)と囲み形から成り、囲み形部に導水のための孔が前後に開けられていたが、この導水部がある壁面を造り出し部に向けていた。こうすることによって南北を軸とした斜面に置かれた状態になるが、実際の導水施設が谷地形の斜面に構築されているのと同じ状況を再現したものと考えられる。

以上のように本調査区では墳丘裾を確認したとともに造り出し部と祭祀に関連した区画の存在が明らかになり、心合寺山古墳が築造された5世紀前半の古墳祭祀を考えるうえで重要な資料が得られた。

〔出土遺物〕

今回の概要報告においては第6区から出土した円筒埴輪と第7区から出土した主要な形象埴輪のみを取り上げる。

円筒埴輪(第27図) 第6区の北東角で倒れた状態で出土した。基底部が若干欠損しているが、器高102.2cm、口縁部径48.3cmに復元できる。体部8段凸帯7本で、円形の透かしが2、4、6、7段に穿たれている。外面調整はBc種ヨコハケがみられ、内面調整は下位がタテハケ、中位ユビナデ～ヘラナデ、上位がヨコハケである。また、黒斑がみられる。

囲み形埴輪(第28図1) 第7区の後円部側に堆積した流出土から出土した。緩やかなカーブを描く部位である。下半部を欠損しており、残存高約7.3cm、厚さ約1.4cmである。壁面内面には接合痕が明瞭である。調整は指ナデの後ハケで、下半には指頭痕が顕著にみられる。上部に剣先状突起を配置し、壁面

上半部に横方向の突帯を2条巡らしている。剣先状突起部分は粘土を継ぎ足し、ヘラで切り込みを入れ、形作る。突帯形状は山形で、頂部が坦面をなしている。下部の突帯をまずナデ付け、次に上部の突帯をナデ付けている。突帯の幅約1.5cmで、水の祭祀場を表した埴輪とは大きさが異なっている。また、角にあった柱も表現されていない。

鳥形埴輪(第28図2～5) 第7区の造り出し周辺で出土した。2は頭部で鼻部が磨滅しているが遺存状態は良好である。残存高20.4cm。3～3.5cm幅の粘土を継ぎ足して形作っている。目は竹管状工具の刺突、嘴は強い指ナデによる凹線で表現している。嘴から頸部にかけて剥離痕がみられることから肉髯があったことも考えられ、鶏冠などを欠いているが、鶏の可能性はある。外面はナデ、内面は指頭痕、シボリメが顕著に残る。3は鶏形埴輪の鶏冠部分であるが、キザミが部分的に欠損している。残存高3.0cm、幅0.45～1.1cmである。4、5は鶏の脚部で、大きさや形態が異なっていることから別個体である。後爪の表現や脚の長さから4は雄鶏、5は雌鶏とみられる。4は残存高6.6cmで後爪は太く良好に遺存しているが、前爪は先端が僅かに欠け、内側よりの1本は欠損している。後爪は粘土を継ぎ足している。全体にナデと指頭痕が残る。5は残存高7.5cmで後爪は短く、下方にのびる。爪は端部が欠けており、前爪3本のうち内側の1本が欠損している。上端部から2.8cmは偏平になっており、円筒部に密着していたとみられる。ナデ、指頭痕が残る。

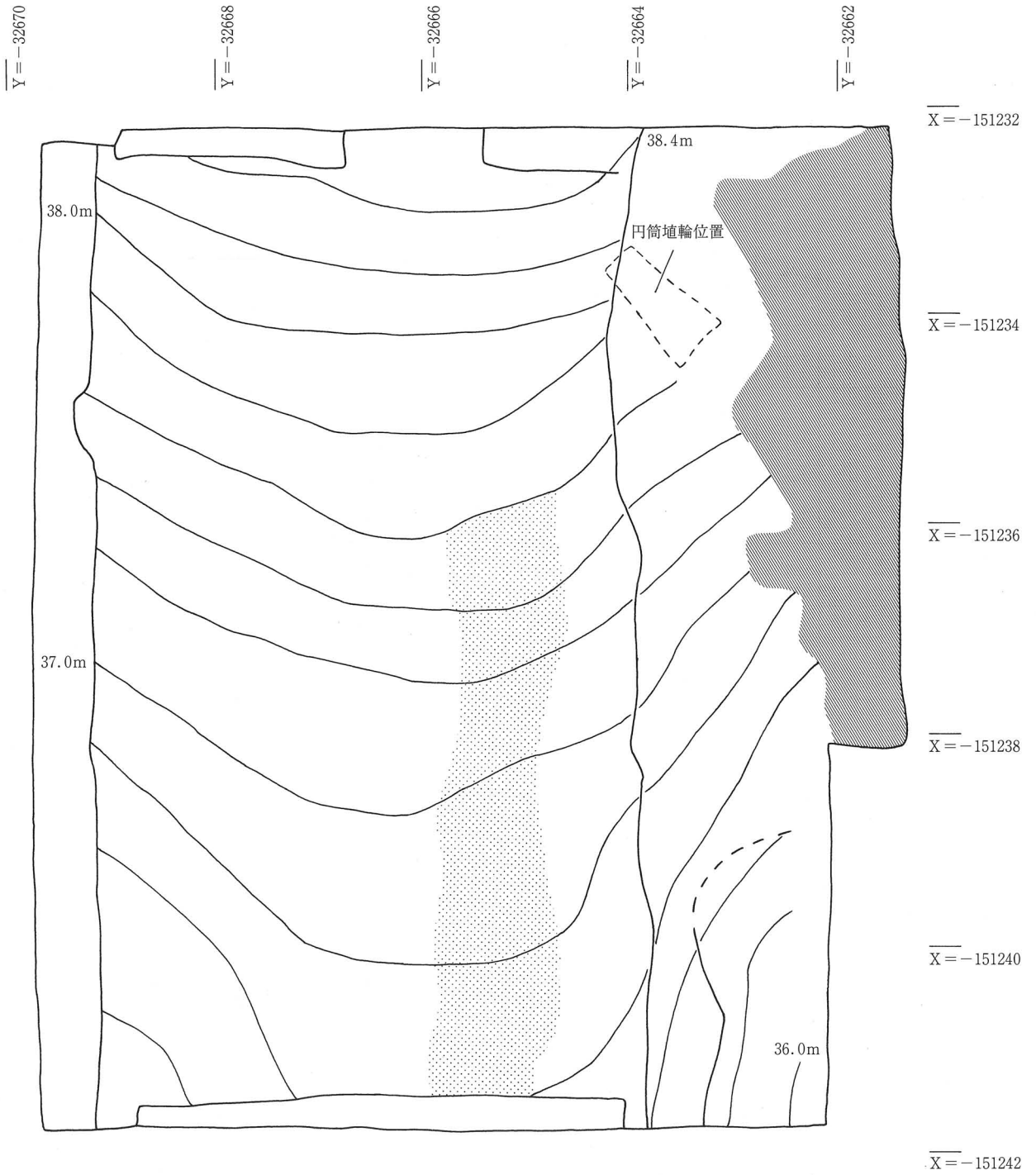
水の祭祀場を表した埴輪(第29図) 祭殿と考えられる家形部分とこれをめぐる塀を表す囲み形部分から成っている。家形部と囲み形部を床でつなげて一体成形し、導水施設を有することが大きな特徴である。導水施設は囲み形部の前後に取水孔と排水孔を開け、床に樋を形作り、さらに家形の壁にも孔を設けて貫通するように作られている。そして家形内部の床を長方形に開けることによって水を濾過する浄水装置(堰・槽・樋)を表現しているものと考えられる。ここでは囲み形の入口のある面を南面として記述する。



囲み形部は1辺約40～45cmの方形で、高さ約13.5cmを測る。壁に2乗の凸帯がめぐり、上部に剣先状突起を配置する。鉤の手状に張り出す位置に入口(5.8cm×3.3cm)を設け、上部には鋸歯紋を施した構造物を置く。柱は各角の内側と、四隅の外側、そして東・西の壁に各1本が立てられていたが、外側四隅のうち3本が欠失している。東・西の壁に立てられている柱には×印が線刻されており、柱を縛りつける紐を表現している。南西角には直径0.5cm大の穿孔が2つあるが、用途は不明である。

家形部は長辺約26cm、短辺約24cm、高さ約27.5cmを測る。切妻造りで、妻側に棟持柱と横木を線刻しているが、平側に柱の線刻は無い。上部には棟持柱をはさんで三角形の2つの透かしを開け、反対側は楕円形の透かしとなる。東壁には入口(8.0cm×4.2cm)があり、西壁の中央下隅には円形の孔が開いている。屋根の押縁は縦方向に2本一組の綾杉紋を中央に2組、両端に1本半の綾杉紋を1組づつ線刻し、横方向は東側に斜線紋を施すが、西側は無紋である。

製作工程は、①床面作成→②導水装置の幅決定・床面の樋管部製作→③家壁の設置→④屋根の構築→⑤囲み形の設置・南壁の樋製作の5工程に分けることができる。①の床面作成段階で、家形内部の導水装置の部分を適当な大きさに開けておく。②では導水装置の位置に合わせて家壁の孔を決定し、穿孔するとともに南側床面の樋をヘラで整え、作成する。③北側床面の樋を粘土紐で作成し、家壁を床に取り付ける。④屋根を乗せ、最後に中央部を粘土紐で塞ぎ、押縁を線刻して破風を取り付ける。⑤南壁、西壁、北壁、東壁の順番に設置し、南壁前面に突出した樋管部を付ける。最後に柱や壁面の凸帯を取り付ける。このため南壁～北壁が床上に、東壁は床に添って取り付けられている。

5区の記述のみは吉田野乃が行った。また、6区で出土した円筒埴輪の実測及びトレースと観察表作成は島田拓(近畿大学大学院)が、7区で出土した「水の祭祀場を表した埴輪」をはじめとする形象埴輪の実測及びトレースと観察表作成は関真一(同志社大学)が行った。



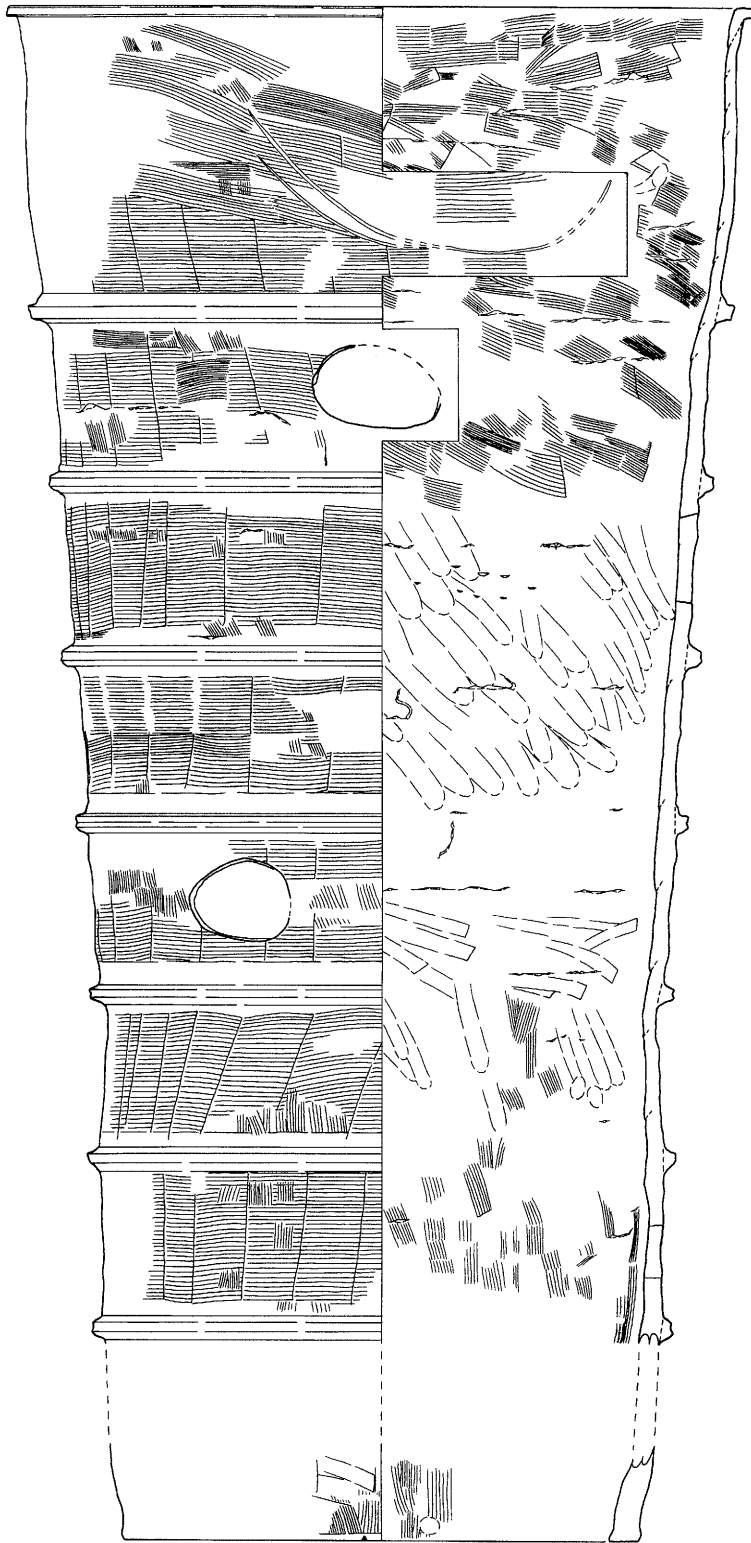
-  葦石部分
-  埴丘構成層と異なる土の部分
- ※コンターラインは20cm間隔



第25図 6区検出遺構模式図(1/50)

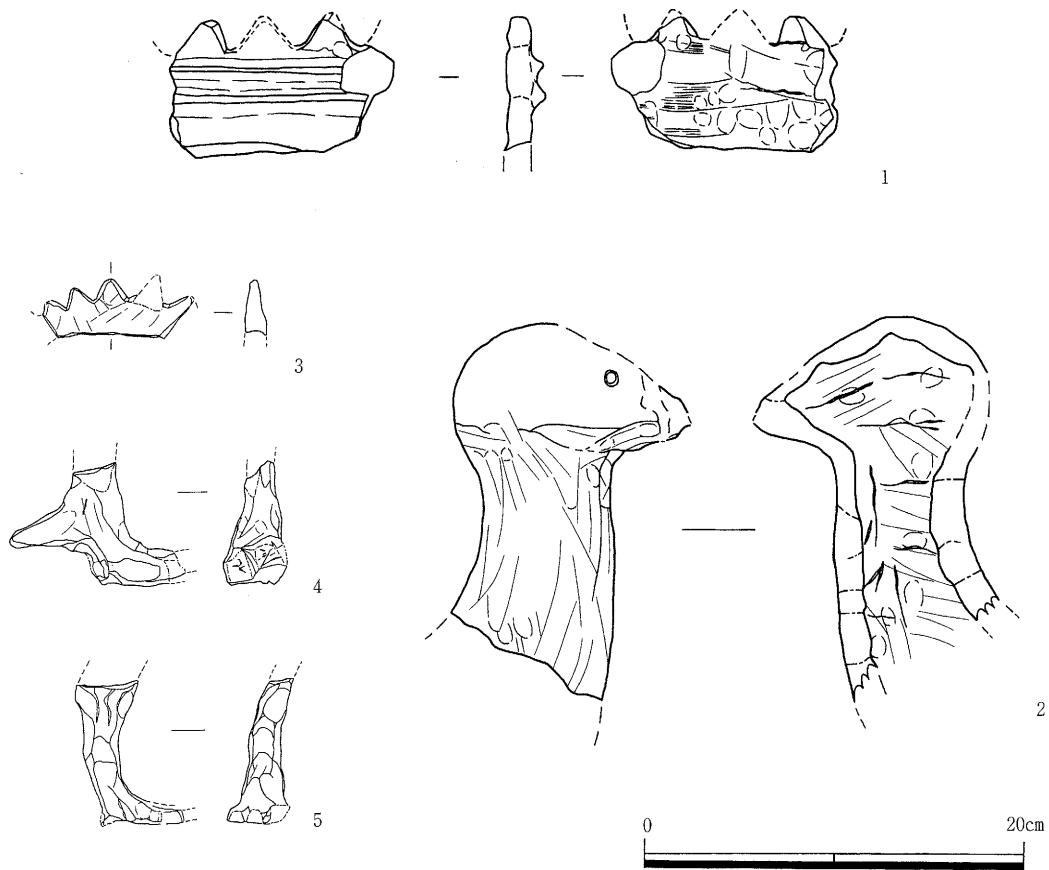


第26図 7区検出遺構模式図(1/50)



0 20cm

第27図 第6区出土円筒埴輪実測図(1/5)



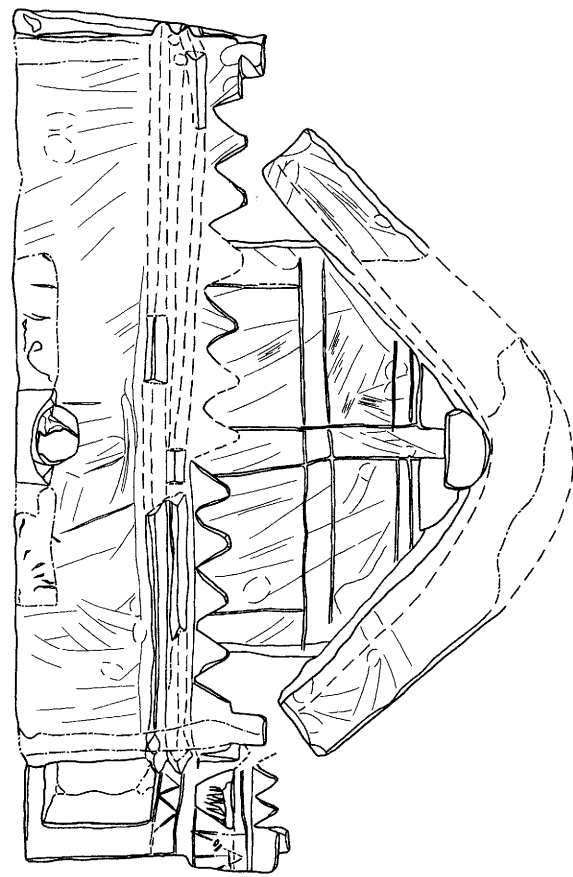
第28図 出土遺物実測図(1/4)

種類	器種	径等(cm)	高さ(cm)	調整・手法	色調	焼成	胎土	胎土の鉱物組成	備考
円筒埴輪	円筒埴輪	口径： 48.3 推定底径： 33.0	残存高 89.1 復元高 102.2	外面-Bc種ヨコハケ、タガ付近横方向ナデ 内面-ハケ・ユビナデ・板ナデ	明赤褐色 (5 Y R 5/6)	硬	やや粗	長石(~5mm)多量 石英(~3mm)やや多 雲母(~1mm)多量 チャート(~2mm)少量 クサリ礫(~3mm)やや多 角閃石(~3mm)少量	底部端面付近に棒状圧痕残存。ヘラ記号・黒斑有り

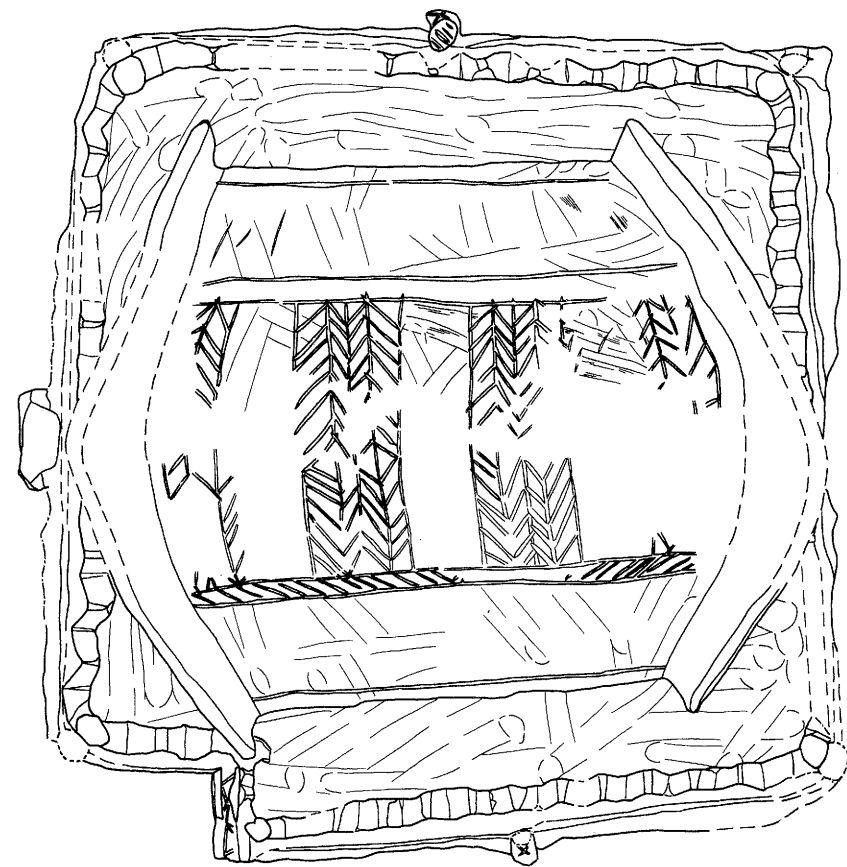
6区出土円筒埴輪(第27図)観察表

部位	突帯間隔(cm)	2次調整	原体幅(cm)	静止痕間隔(cm) □ 内平均	静止痕角度	原体条数	1次調整	備考
第1段 (底部)	推定15.0	B種ヨコハケのちヨコナデ	2.1+	不明	不明	不明	タテハケ	底部調整：ヨコナデ?
第2段	11.3	Bc種ヨコハケ	9.0	2.8~4.6 [3.8]	R10~R13	Bc種ヨコハケ：3~6本/cm タテハケ：5~7本/cm		スカシ孔
第3段	10.7		8.9	2.2~4.9 [4.3]	R18~R28			スカシ孔
第4段	11.4		8.7+	1.8~5.0 [3.4]	R4~R7			スカシ孔
第5段	11.2		7.8+	3.8~5.5 [4.7]	R4~R11			
第6段	11.6		9.1	3.0~6.5 [4.5]	R2~R6			スカシ孔
第7段	11.9		8.3+	3.5~7.2 [4.4]	L2~L10			スカシ孔
第8段 (口縁部)	19.1	B種ヨコハケのちナメハケ	6.6+	3.7~5.4 [4.7]	L4~L6	Bc種ヨコハケ：3~6本/cm タテハケ：5~7本/cm ナメハケ：5本/cm		ヘラ記号

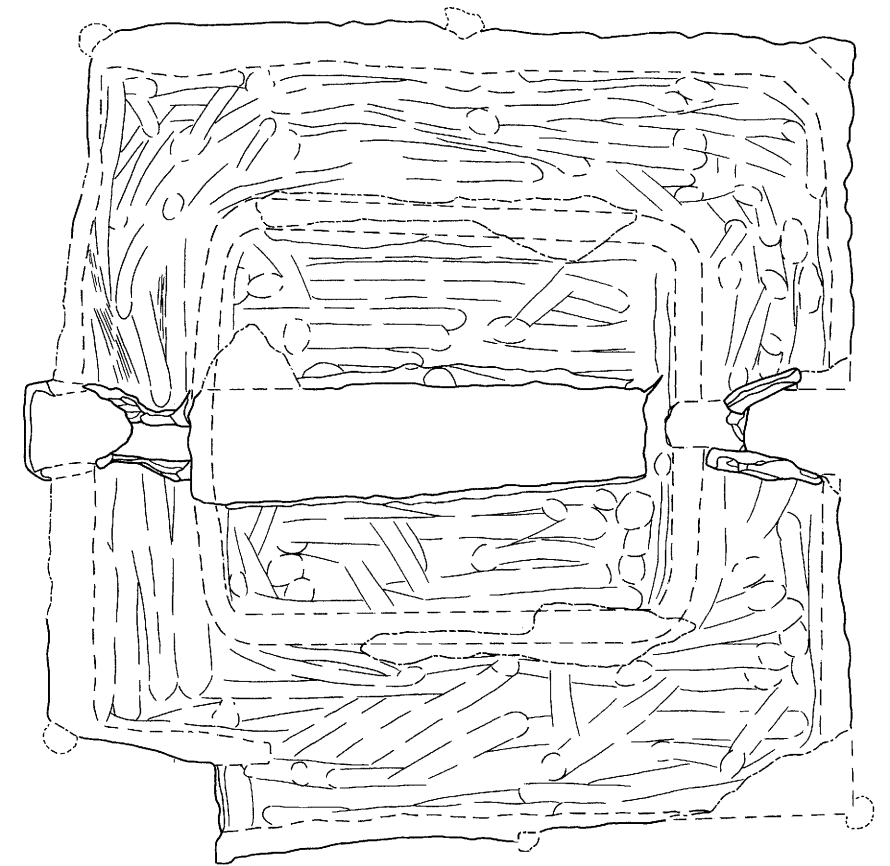
6区出土円筒埴輪(第27図)調整観察表



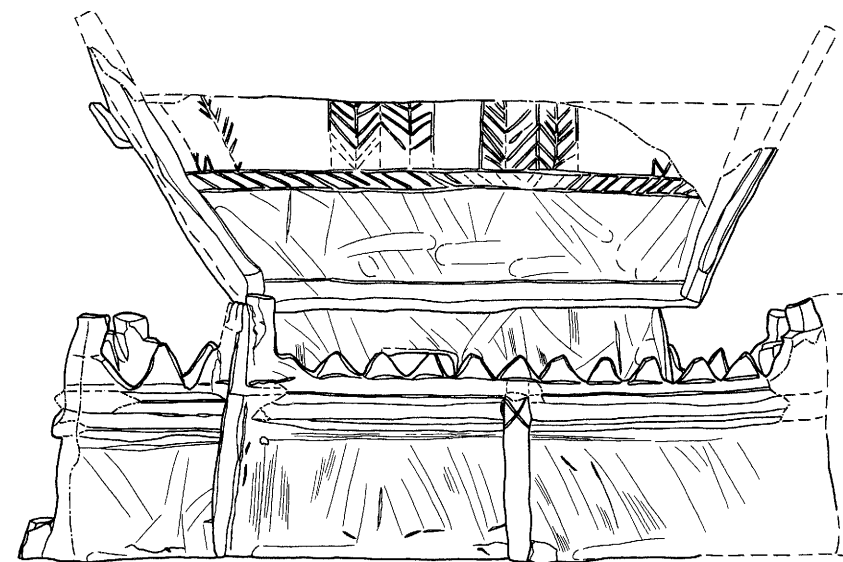
南面



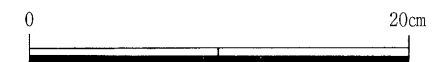
俯瞰



床部俯瞰



東面



第29図 「水の祭祀場を表した埴輪」実測図(S=1/4)

出土遺物(第28図)観察表

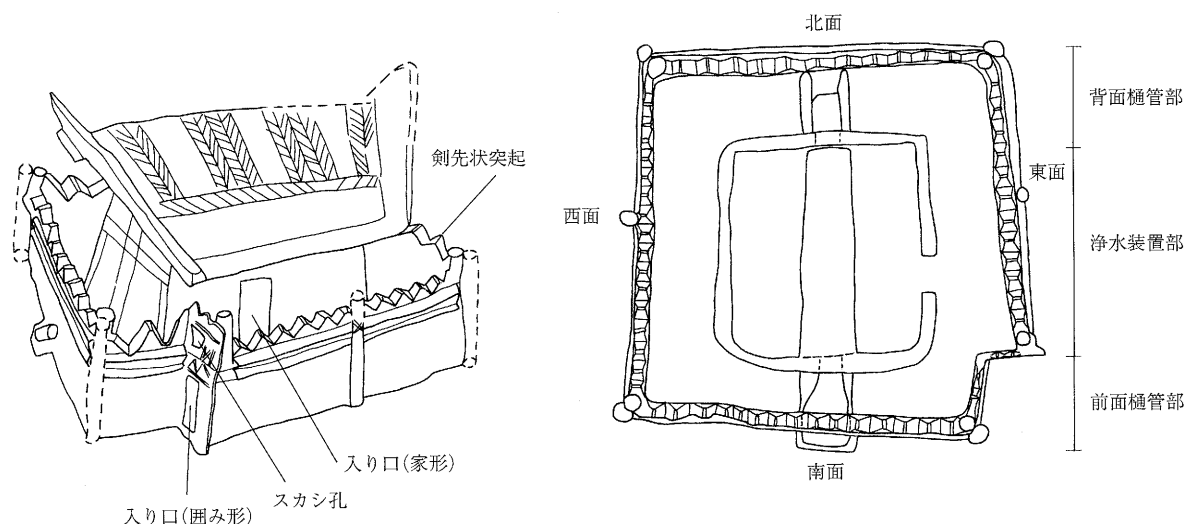
番号	部位	残存長等(cm)	残存高(cm)	調整・手法	色調	焼成	胎土	備考
1	囲み形埴輪	12.0	7.3	内面：ユビオサエ・横方向ナデ後 ヨコハケ(10~12本/cm) 外面：ユビオサエ・横方向のナデ	橙赤色 5YR4/4	普通	粗	
2	鶏の頭部	頭部 12.8	20.4	外面：首は縦方向ナデ 頭部は横方向ナデ 内面：縦方向ナデ・ユビオサエ	橙赤色 5YR4/4	硬	粗	頭部に黒斑あり。 幅2cmの粘土帯を積み上げて成形する。
3	鶏の鶏冠	7.7	3.0	ユビオサエ後横・斜め方向ナデ	淡橙色 7.5YR6/4	普通	粗	鶏頭部との関係不明。
4	鶏の足部	残存幅 3.4	6.6	ユビオサエ、ナデ	淡暗橙色 10YR6/4	硬	やや粗	足部内側側面に剥離痕あり。
5	鶏の足部	残存幅 3.3	7.5	ユビオサエ、ナデ	淡橙色 7.5YR6/4	普通	粗	

第7次調査7区出土「水の祭祀場を表わした埴輪」(第29図)観察表
各部位の計測値・調整

部位名	計測箇所	計測値(cm)				調整・手法
床部	導水部の長さ	前面樋管部 (南)	浄水装置部	背面樋管部 (北)		床上面：ユビオサエ、ユビナデ
	導水部の最大幅	8.8 4.1	24.3 6.0	10.5 4.5		床下面：ユビオサエ、ナデ、幅5~9cmの粘土紐を南北方向に接合し、床面を製作。
囲み形部	壁面の長さ (壁下端)	東面 33.7	南面 40.3	西面 40.3	北面 40.5	壁外面：タテハケ(8本/cm、4本/cm)
	壁面の高さ (剣先状突起上端まで)	11.4	11.7	11.4	11.0	壁内面：ユビオサエ、タテナデ後ヨコハケ(8本/cm)
家形部	屋根の幅(軒先まで計る)	平側 22.3	妻側 27.6			屋根外面：ヨコハケ(8本/cm、4本/cm)、ユビナデ 屋根内面：ユビナデ、ユビオサエ
	壁体部の幅(裾で計る)	平側 26.5	妻側 23.7			壁体外面：タテハケ(8本/cm、4本/cm) 壁体内面：ユビオサエ、ユビナデ

色調・焼成・胎土

焼成	色調	胎土	胎土の鉱物組成	備考
やや硬	暗橙褐色 (10YR6/4)	粗	クサリ礫(~5mm)多量 石英+長石(~1mm)多量 角閃石(~3mm)少量	水越周辺の胎土と考えられる。(奥田尚氏の鑑定による。)



5. 第8次発掘調査概要

(1) 1区

後円部北西側に南北17m、東西10m(面積170m²)の調査区を設定し、中段段築平坦面の確認を目的に調査をおこなった。

東側の斜面部分は現地表下約0.4~0.5mで、西側の緩やかな斜面部分は約1.0m掘り下げると墳丘面に達する。(写真8-1)この写真は作業中であるが写真右手の東側は約0.4m掘削を行っておりほぼ墳丘面に達している。検出した墳丘面は東側がT.P. +34.0mで、西側がT.P. +30.2mである。墳丘は自然堆積層で覆われているが、奈良時代の創建と推測される心合寺の瓦が出土し、中世の整地土や近世から現代の掘り返した土も所々で見られることから寺院建立以降に墳丘が削られていることが判明した。このことから本来の墳丘面はほとんど残ってなく、葺石を検出したがその大半が抜き取られ点在している状況であった。唯一本来の葺石を確認したのは調査区の北西部(写真8-3)と南部の一部(図版14上段)であるが、基底石の存在を確認するには至らず、葺石の置き方などの詳細は明確にできなかった。抜き取られた石の大半は2列に積み上げられ石垣(写真8-2)として再利用されていた。この石垣は中世から近世のものと思われる。埴輪の底部も検出しているが元の位置にあるものは確認していない。

また、西側への葺き石の広がりを確認する目的でトレンチ調査を行った。その結果現状のコンクリート壁が残る部分までは葺き石があることを確認した。

なお、第8次調査では光波測量機器(『カタタ』)を使用し、3次元計測を行った(写真8-4・8-19)。測量したデータはコンピュータに保存し、デジタルデータとして活用している。

出土遺物

近世の陶磁器、中世の土師器、奈良時代の瓦、古墳時代の埴輪、土師器などが客土や自然堆積土の中から出土した。そのうち今回掲載した遺物は埴輪のみである。写真8-5の1~4は蓋形埴輪である。

(2) 2区

後円部の北東側に南北7m、東西8m(面積56m²)の調査区を設定し、1区と同様中段段築平坦面の確認を目的に調査をおこなった。

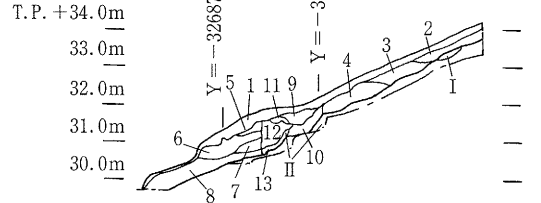
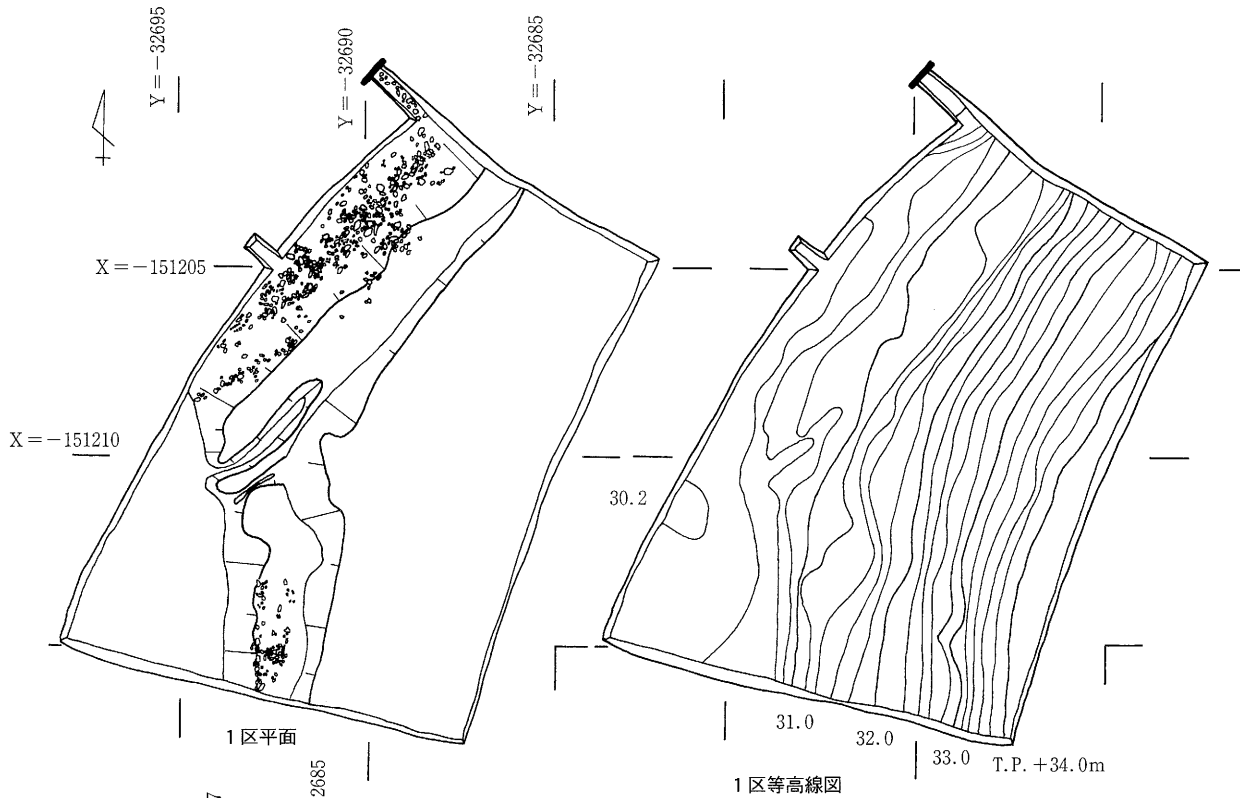
南側は現地表下約0.4~0.5m、北側は1.4~1.6m掘り下げると墳丘面に達する。墳丘面は南側がT.P. +33.8mで、北側がT.P. +30.4mである。墳丘は、自然堆積土や近世頃の客土で埋まっている。

調査の結果、墳丘面には葺石がまばらに存在していた。葺き石は敷き詰められている状況ではなく、葺き方は粗雑である。また、葺き石は抜き取られてなくなっている部分があった。南側は傾斜角度が30~35°あり急である。南側から約4m北の地点には角度15°で傾斜が緩やかになる部分が存在しているが、段築の確認はできなかった。また、埴輪列は認められなかった。

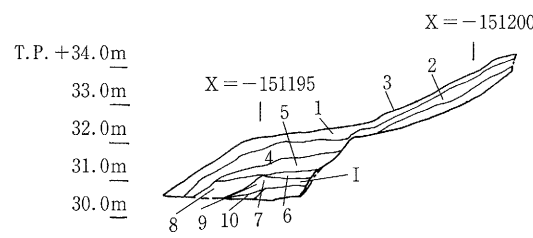
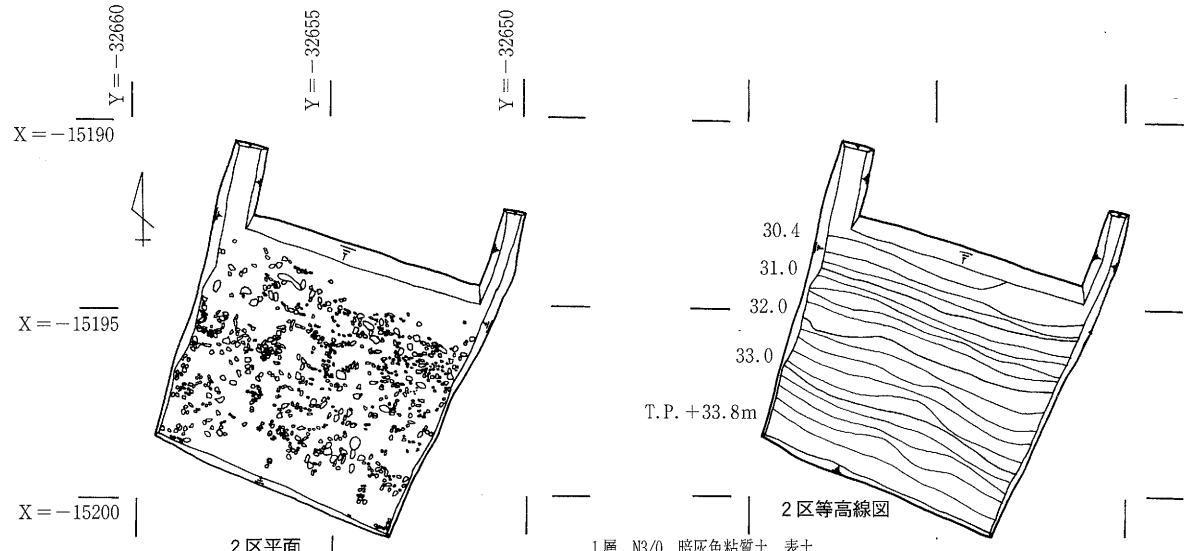
調査区北側のT.P. +30.6m付近より下は、扇状地の堆積層と思われる硬くしまった礫の混じる土を確認した。この層を基盤に古墳は作られていると推測される。

出土遺物

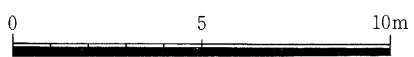
近世の陶磁器、中世の土師器、奈良時代の瓦、古墳時代の朝顔形埴輪・円筒埴輪・形象埴輪、土師器などが客土や自然堆積土の中から出土した。そのうち今回掲載した遺物は埴輪のみである。写真8-5の5は蓋形埴輪の笠部下半の破片である。



- | | |
|------------------------|------------------------------|
| 1層 10YR4/4 褐色細砂混粘質土 表土 | 8層 2.5Y5/3 黄褐色細礫混粘質土 |
| 2層 2.5Y4/2 暗灰黄色細砂混粘質土 | 9層 N3/0 暗灰色粗粒砂混粘質土 溝状窪み埋土 |
| 3層 7.5YR4/1 褐灰色粗粒砂混粘質土 | 10層 2.5Y4/2 暗灰黄色粗粒砂混粘質土 石列埋土 |
| 4層 7.5YR4/4 褐色粗粒砂混粘質土 | 11層 7.5Y4/6 褐色細砂混粘質土 石列埋土 |
| 5層 7.5YR4/3 褐色粘質土 | 12層 7.5YR4/1 褐灰色シルト混粘質土 石列埋土 |
| 6層 7.5YR4/2 灰褐色細礫混粘質土 | 13層 2.5Y5/6 黄褐色細砂混粘質土 |
| 7層 10YR4/6 褐色極粗砂混粘質土 | I層 10YR4/4 褐色細礫混粘質土 墳丘構成層 |



- | |
|---------------------------------|
| 1層 N3/0 暗灰色粘質土 表土 |
| 2層 10YR5/6 黄褐色シルト混粘質土 流入土 |
| 3層 7.5YR4/2 灰褐色粘質土 流入土 |
| 4層 10YR4/4 褐色細礫~中礫混粘質土 近世ころの盛土 |
| 5層 5YR4/2 褐灰色細礫混粘質土 近世ころの盛土 |
| 6層 10YR5/8 黄褐色細礫混粘質土 近世ころの盛土 |
| 7層 2.5YR黄灰色細礫混粘質土 近世ころの盛土 |
| 8層 10YR4/2 灰黄色粗砂~細礫混粘質土 近世ころの盛土 |
| 9層 7.5YR4/2 灰褐色細礫混粘質土 近世ころの盛土 |
| 10層 5Y4/1 灰色粗砂混粘質土 |
| I層 10YR4/4 褐色細礫~中礫混粘質土 |



第30図 1区・2区平断面図



写真 8-1 1区調査状況(南から)



写真 8-2 1区石列検出状況(北西から)



写真 8-3 1区葺石検出状況(北西から)



写真 8-4 2区測量状況(西から)



写真 8-5 1区(1~4) 2区(5)出土遺物(S=1/4)

(3) 3・4区

【前方部の調査概要】 前方部前面の中段斜面から下段裾および周濠の確認を目的として、平成12年7月10日から9月28日の期間で調査を行った。

前方部南面中段斜面に、葺石と裾の確認のため東西2m、南北7mの調査区(3区)を設定し、前方部南面下段に、下段の葺石と裾の確認のため東西6.5m、南北20mの調査区(4区)を設定した。また周濠の形状等の確認のため、4区の南側に東西9m、南北10mの調査区を拡張した。(第31図参照)

中段斜面の上部は以前の建物(老人ホーム)と里道を結ぶ陸橋の基礎の築造により、また裾部は既存水路の築造の際にかなり削平されているが、中央部分では葺石が良好な状態で検出でき、縦方向の区画石がみられる。

下段平坦面は3区の中段斜面裾とともに既存水路の築造の際に削平されたと考えられ、埴輪列は残っていなかったが、削平面以下の下段斜面の葺石が基底石まで検出でき、区画石も良好に残っていた。この基底石の並びが検出できたことにより古墳墳丘の南端が確定し、墳丘の全長が160m前後となることが判明した。また、葺石基底石の南側の周濠と考えられる位置で、樹立した状態の円筒埴輪1個体を検出した。周濠の形状は、4区の拡張した部分でさらに南側へ傾斜している状況が確認されたのみで、最深处は確認できず幅も判明しなかった。

【葺石】 中段斜面葺石は3区のほぼ中央付近で、東西1.8m、南北3mほどの範囲で検出した。高さはT.P.+30.4~31.3mを測り、傾斜角は約25度である。部分的に転落して抜けている部分があるものかなり良好な状態で残っており、調査区外にも続くようである。(写真8-6・8-7)

区画石が調査区の西辺と東辺に縦方向に2列みられ、1.5mの間隔で墳丘主軸線に平行に葺かれてい



写真 8-6 3区葺石検出状況(南東から)

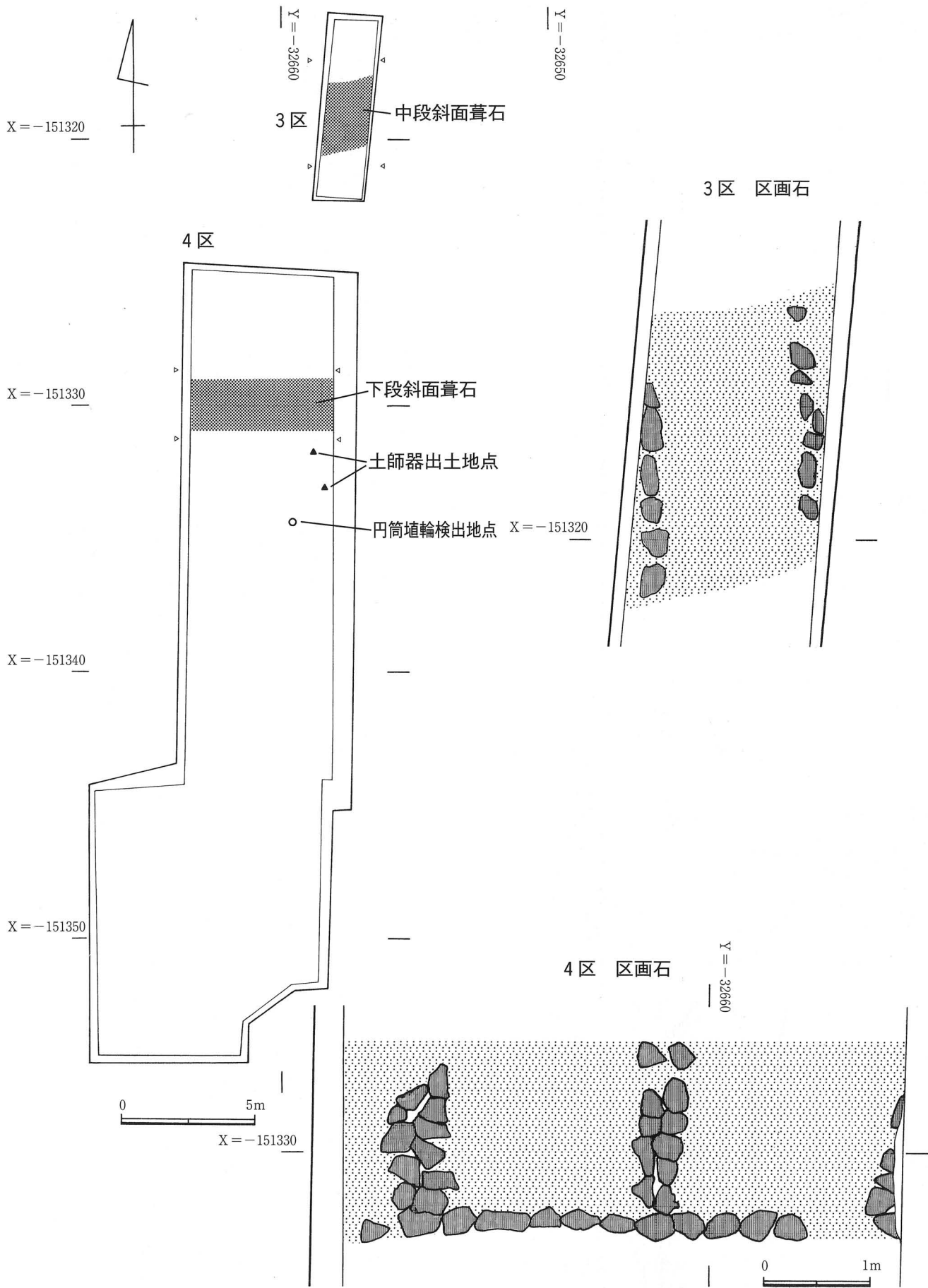


写真 8-7 3区葺石検出状況(南から)

ことから、本来はあったものと考えられる。

下段斜面葺石は4区においてかなり良好な状態で検出された。ただ、下段平坦面とともに斜面の上辺は削平されているようで、残っている葺石上に多くの石が転落していたことから、3~5段分はさらに上まであったと考えられる。以下は斜面裾までほぼ完全な状態で遺存しており、基底石の並びがはっきりとわかる。高さはT.P.+27.4~28.3mを測り、傾斜角は約29度で中段斜面よりやや急である。基底石は、長辺で40~50cmもある大きな石を横方向に葺き、石の下辺を意識的にそろえているようであり、一直線に並ぶ。この基底石の下辺を結んだラインは、古墳墳丘中軸線と直交し、この古墳の築造の際の設計の正確さがうかがえる。

ここでも中段斜面と同様に、墳丘主軸線に平行(基底石に直交する)に葺かれた区画石が3列みられる。東側の石列は調査区の壁にかかっており一部だけであるが、中央と西側については明確に残っており、2列の石列で1単位の区画を成すようである(写真8-9・第31図)。列の間隔は約2.2mあり、中段斜面の区画石間よりも広い。区画石に



第31図 3・4区葺石・円筒埴輪検出位置および区画石列模式図(1/200, 1/50)



写真 8-8 4区調査風景



写真 8-9 4区葺石検出状況



写真 8-10 4区周濠内円筒埴輪検出状況



写真 8-11 周濠内円筒埴輪樹立状況

は長辺で30~40cm前後のものが使用されており、区画石で区切られた面に葺かれている石は、下から4段ほどは同様の大きさのものを使っているが、それより上には20cm大程度の大きさのことが多い。区画石に使用されているものに比べてかなり小さいもので、3区の残存している部分と同じような葺き方であり、使い分けているようである。横方向の区画石があったかどうかは確認できなかったが、葺石上に転落していた石の中に30cm以上のものが多く見られること、区画内の石は小さいのことが多いことから、斜面の上端には大きい石を葺いていたとも考えられる。

下段斜面の葺石については、上部を除きほぼ葺かれた当時の状況で残っていると考えられる。基底石と区画石の他、下方数段は大きな石を用いるなど、非常にしっかりと葺き方であるうえに、葺石上に堆積している土層の状況を見ると、葺かれてまもなく長い時間を経ることなく土砂で埋まってしまったと考えられ、そのため今日まで築造当時の状態が保たれていたようである。

【下段平坦面】下段平坦面については、中段斜面裾とともに既に削平されている状態であったため、埴輪列は検出できなかった。しかし、下段斜面の葺石上で転落した状態の円筒埴輪が4個体以上出土しており、また葺石上に堆積している土層内からも埴輪片が多く出土することから、本来は埴輪が並べられていたと考えられる。

下段平坦面の幅については、中段斜面と下段斜面の位置関係および傾斜角から推定すると5m程度あったと推定できる。また高さは、転落している葺石の量と、埴輪列を並べるための掘り方が削平されている状況であると考え、現況で残存している高さ(T.P.+28.5m前後)よりも30cm前後は高かったと推定でき、後円部下段平坦面の高さ(T.P.+28.9m)に近い数値になると考えられる。

【周濠と円筒埴輪】葺石の基底石の南側は、葺石が葺かれた後の堆積層を取り除いていくと南へ向かって傾斜して下がっていくことから、周濠になると考えて調査を行った。葺石が葺かれた後の堆積と考えられる植物遺体を含むごく薄い水性堆積土層があり、この傾斜した面を追っていったところ、葺石の

基底石から南へ3.5mの地点で、円筒埴輪1個体を検出した(写真8-10)。4条突帯5段の円筒埴輪で、最上段のみが前記の水性堆積土層の上に出ている状態であった。この埴輪は直立しており(写真8-11)、掘り方が認められず、最上段以下の埴輪周囲の土が広範囲にわたってシルトがブロック状に混じっていて人為的な2次堆積と考えられること、また土圧で割れてはいるもの最上段を除いては完全な形で残っており、摩滅もみられないことから、埴輪を置いて周りに土を盛り樹立したものであると考えられる。埴輪の底部より下層はシルト・微砂・粗砂の互層となっており、古墳築造以前の自然堆積層となるようである。これらの土について花粉分析を行ったところ、埴輪周囲の土は更新世後半の堆積層の2次堆積で、埴輪より下層の土は更新世後半の堆積層であることがわかった。(付編4参照)

この円筒埴輪は、周辺に他の埴輪はなく破片も見られないことから、埴輪列としてではなく単独で樹立されたようである。埴輪の口縁部上端の高さと、葺石の基底石の下辺の高さがほぼ同じであり、



写真 8-12 4区周濠内円筒埴輪

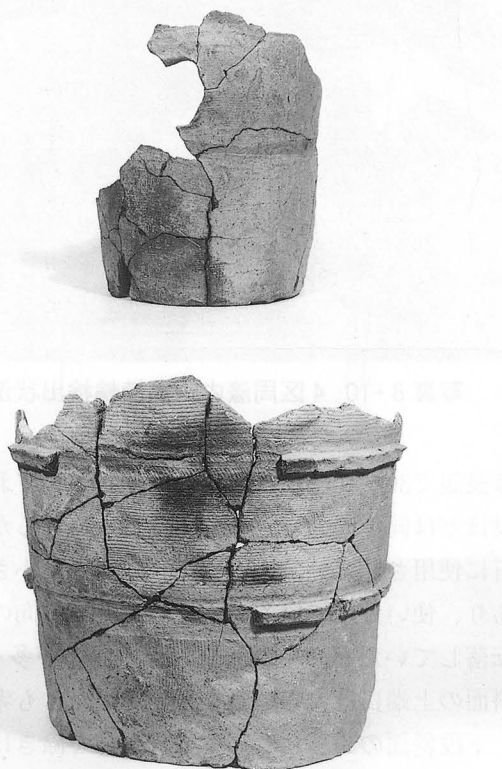


写真 8-14 4区葺石上出土円筒埴輪

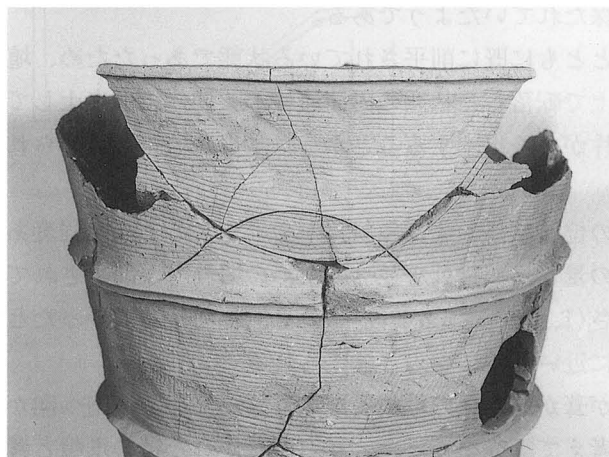


写真 8-13 同上口縁部ヘラ記号

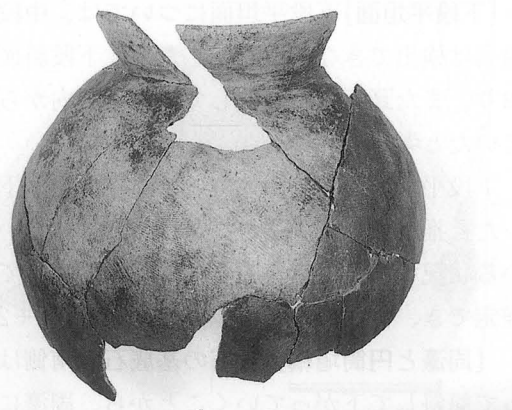


写真 8-15 4区周濠内出土土師器

意図的に揃えられていると考えられる。このように周濠内に埴輪が樹立されていた例は、和歌山市の車駕之古址古墳で見られる。ここでもくびれ部の周濠内で1個体のみ樹立した状態で検出されており、周濠の底面から埴輪全体の約3分の1程度しか表面に出ていない状況で、一般的な埴輪列とは別の意味があったものとみられている。くびれ部と前方部の違いはあるものの樹立状況が似ており、今後この埴輪がどのような意味を持つのかを考えるうえで、比較検討の必要があろう。

周濠内からはこの円筒埴輪の他には、葺石の基底石より南側約0.8mと2.2mの地点で土師器(布留式土器の甕)が出土している。同一個体のものでなく残りの良いほうでも約1/3程度しかなく、前記の水性堆積土層面上にあり、古墳築造時以降に下段平坦面上付近から転落してきたものであろう。前方部方形壇裾でも同時期のものが出土しており、古墳に伴う土器と考えられる。

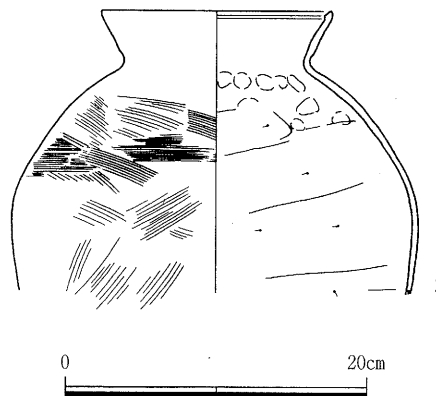
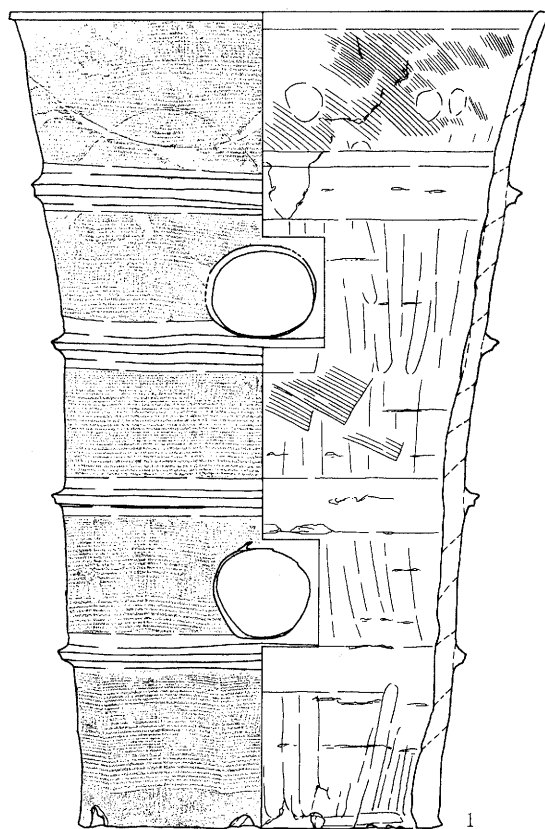
周濠については、古墳築造以前の谷地形を利用して形成されているようではあるが、調査区範囲内では外側の立ち上がりは確認できず、また前記の水性堆積層上の土層は、水流のある短期間で一度に堆積した厚い砂層が西へ向かって傾斜しており、不安定な状態であったとみられ、水を湛えた閉じた周濠であったとは考えにくい。(周濠の土層の堆積状況については、東大阪市教育委員会の別所氏よりご教示いただいた。)

[参考文献] 和歌山市教育委員会1993『車駕之古址古墳発掘調査概報』

[出土遺物] 3区・4区とも、それぞれ平坦面に樹立してあったと考えられる埴輪片が葺石上から出土している。4区の葺石上でかたまっていた中には円筒埴輪と朝顔形埴輪がみられ、小型品と底部径が30cm以上ある大型品があり、口縁部に幅広の突帯を貼り付けたものもある。既往の調査において出土している埴輪と同様の川西編年Ⅲ期のものである。

周濠内に樹立されていた円筒埴輪(第32図1)は、4条突帯5段で2・4段目に円形のスカシがあり、有黒斑の野焼きのもので、突帯は台形、底部に棒状の圧痕がみられる。外面調整はタテハケの後にB種ヨコハケを施し、内面はユビオサエとタテ方向のナデのほか口縁部にはナナメ方向のハケメがみられる。最上段に半弧状を2つ組み合わせたようなヘラ記号(写真8-13)がある。

周濠内で出土した土器(第32図2)は布留式土器の甕で、外面はナナメおよびヨコ方向のハケメ、内面は上半に指頭痕とナデ、下半にヘラケズリを施している。



第32図 出土遺物実測図

(4) 5区

前方部墳頂に南北2m、東西5m(面積10m²)の調査区を設定し、墳丘中軸線の確認を目的に調査をおこなった。写真8-16は調査地近景で、左の手前から5区、6区、7区である。第6次調査地は5区～7区の西側、写真右手になる。

墳丘面は、西側は現地表下約0.2m、東側は0.6m掘り下げると達する。検出した墳頂部の平坦面はT.P.+36.4m前後で、墳丘斜面の下はT.P.+35.4mである。墳丘は自然堆積土で覆われており、数層に分けることができる。現代(昭和年代)のごみ穴が現地表面から掘り込まれており、墳丘面を一部壊していた。

調査の結果、平坦部には埴輪の破片が散在して出土したが、元の位置にある埴輪列の検出はなかった。ほぼ中央で南北方向に伸びる溝状の落ちを確認し(図版17上段)、この落ちには異質な土が入り埋められており、本来埴輪列が存在していたが、抜き取られた可能性があると思われる。東側では東に下がる墳丘斜面を確認したが、葺石の検出はなかった。

出土遺物

近世の陶磁器、中世の土師器、奈良時代の瓦、古墳時代の埴輪、土師器などが客土や自然堆積土の中から出土した。そのうち今回掲載した遺物は埴輪のみである。写真8-20の1は蓋形埴輪である。

(5) 6区

前方部墳頂の5区から約14m地点に南北2m、東西5m(面積10m²)の調査区を設定し、墳丘中軸線の確認を目的に調査をおこなった。

墳丘面には、西側は現地表下約0.2m、東側は0.6m掘り下げると達する。検出した墳頂部の平坦面はT.P.+36.9m前後で、墳丘斜面の下はT.P.+35.4mである。墳丘は自然堆積土で覆われており、数層に分けることができる。

調査の結果、平坦部分と東側の斜面を確認した。平坦部の東端では、円筒埴輪を2個体検出した(写真8-17)。埴輪の底部が元の位置にあり、上部は壊され、存在していなかった。この埴輪は南北に一列に並ぶ。埴輪の底部の高さはT.P.+36.6m前後である。北側で検出した埴輪の底部の径は23cm前後である。埴輪は北側ものから南へ約50cm間隔をあけて立てられていた。南側の埴輪も底部の径が約22cm前後である。並んでいた場所は溝状にくぼんでいることから、列の場所は布掘りを行っていると考えられる。東側斜面には葺石と認められる石をまばらに検出した。しかし抜き取られ散在している状況であった。

埴輪の立っている位置を確認し、前回(第6次)の調査では西側の埴輪を確認していることから、古墳の中軸ラインが判明し、古墳の軸はほぼ真北を向いていることがわかった。今回検出した埴輪列は間隔があき、西側の埴輪列は隙間なく置いていることから西側と東側では本数に差があることが判明した。このことの類例として、京都府綾部市私市円山古墳では表側は埴輪の間隔をつめて置き、裏側は徐々に間隔を開けることにより、埴輪の本数を抑えていると記載され、正面側(平野側)の景観を意識していると述べられている(塩見1994)。このことから心合寺山古墳でも西側(平野側)からの景観を意識していることが言えるかもしれない。

出土遺物

近世の陶磁器、中世の土師器、奈良時代の瓦、古墳時代の埴輪、土師器などが客土や自然堆積土の中から出土した。そのうち今回掲載した遺物は埴輪のみである。写真8-20の2は形象埴輪の破片で、平行の線刻を施す。

[参考文献]

塩見勝洋1994『史跡 私市円山古墳 整備事業報告』 綾部市教育委員会

(6) 7区

前方部墳頂の6区から南へ約14m地点に南北1.4m、東西5.5m(面積7.7m²)の調査区を設定し、墳丘中軸線の確認を目的に調査をおこなった。

墳丘面は、西側は現地表下約0.25m、東側は0.45m掘り下げると達する。検出した墳頂部の平坦面は